

平成24年度調査研究報告書

特別支援教育担当

小・中・高等学校及び特別支援学校における
ユニバーサルデザインの視点を取り入れた
授業実践に関する調査研究(最終報告)



埼玉県マスコット「コバトン」



埼玉県立総合教育センター
Saitama Prefectural Education Center

目 次

第1部 調査研究

I 研究の概要	1
1 研究主題設定の背景	1
2 研究の目的	2
3 研究のデザイン	2
4 ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の定義	3
5 研究計画（平成24年度）	7
II ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の要点整理	8
1 授業づくりの12のポイントの作成	8
III ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の効果の検証	11
1 目的	11
2 方法	11
3 結果と考察	13
IV 研究のまとめ	19
1 要約	
2 今後の課題	

第2部 実践事例集

1 活用にあたって	21
I ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの12のポイント	24
1 教室環境①「場の構造化」	25
2 教室環境②「刺激への配慮」	29
3 ルールの確立	32
4 生活の見通し	37
5 授業の見通し	40
6 授業の組み立て	44
7 板書の工夫	47
8 集中・注目のさせ方	52
9 指示の出し方	56
10 参加の促進	59
11 個人差への配慮	65
12 学級モラルの形成	69
II ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの実践	72
1 小学校・6学年・外国語活動の実践「Hi friend Lesson 8 夢宣言をしよう」	73
2 小学校・6学年・算数の実践「場合の数」	77
3 中学校・1学年・技術・家庭科の実践「生活に役立つ小物をつくろう」	81
4 高等学校・古典の実践「漢文：史記『項羽と劉邦』」	85
5 高等学校・体育の実践「長距離走」	89
6 特別支援学校・小学部・教科別の指導「図画工作」の実践	93
7 特別支援学校・高等部・「作業学習」の実践	97

資料編

- 資料1 学習指導案 小5・道徳「夢をもち、未来を拓く」
資料2 学習指導案 高・物理Ⅰ「静電気」
資料3 学習指導案 特・中学部「生活単元学習」
資料4 検証授業アンケート「児童生徒用」
資料5 検証授業アンケート「参観者用」
引用参考文献一覧
研究協力委員等氏名

第 1 部 調査研究

I 研究の概要

1 研究主題設定の背景

(1) 通常の学級における特別支援教育の現状

現在、通常の学級に特別な支援を必要とする児童生徒が多数在籍することが明らかになっている。文部科学省が小・中学校を対象に平成24年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」によれば、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示すと担任教師が回答した児童生徒の割合は6.5%であった。しかも、その内の約4割が支援を受けていないという結果であった。平成21年8月の特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議高等学校ワーキング・グループによれば、高等学校に進学する発達障害等困難のあるとされた生徒の高等学校進学者全体に対する割合は約2.2%と報告された。このような状況から、通常の学級における発達障害等の児童生徒への支援は、喫緊の教育課題となっている。

平成19年度から特別支援教育が本格的にスタートした。それ以後、発達障害等の特別な教育的ニーズのある児童生徒への有効な指導方法や支援のあり方についての研究・開発が急速に進み、数多くの優れた実践が報告されるようになった。

そうした通常の学級における発達障害のある児童生徒への指導・支援を通して、結果的にそれらが他の児童生徒にも有効であるという指摘が多く見られるようになった（例えば、廣瀬他，2009）。特別支援教育の視点を生かした授業づくりは、「全ての児童生徒にとって分かりやすい」という指摘であり、いわゆる「授業のユニバーサルデザイン」と呼ばれている（廣瀬他，2009；花熊，2011）。ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業は、「配慮を要する子供には『ない』と困る』支援であり、どの子供にも『ある』と便利な』支援」とも言われている（佐藤，2011）。現在、教育研究機関や学校現場等において「授業のユニバーサルデザイン」についての研究や実践が盛んに行われるようになってきている。特別支援教育が培ってきた指導の方法や視点を小・中学校や高等学校の授業に積極的に取り入れることによって授業改善が図れるのではないかと、現在、大きな期待が寄せられている。

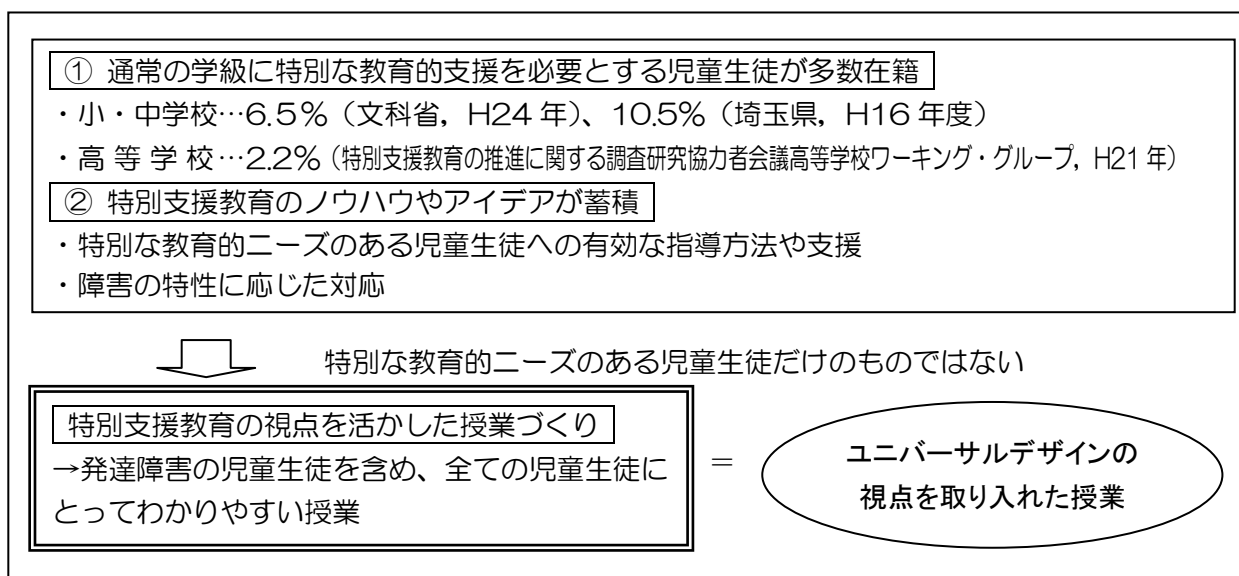


図1 研究主題設定の背景

（２）授業のユニバーサルデザイン研究の課題

期待の大きい授業のユニバーサルデザインであるが、一方で課題や問題点も散見する。

第１は、実証的研究がまだまだ少ないことである。特別支援教育の視点を取り入れた「授業のユニバーサルデザイン」に関する多くの実践が書籍や雑誌、報告書等を通して紹介されるようになった。しかし、そのほとんどが論説や実践紹介であり、その有効性について実証的に扱った研究は、ごく少数である。柘植（2011）が指摘するように、通常の学級における授業のユニバーサルデザインは、未だエビデンスに基づいた実践とは言いがたく、何が有効で、何が限界であるのか、実は良く分かっているわけではない。

第２は、ユニバーサルデザインを取り入れた授業は、誰にとっても有効で最良の支援といえるのかという問いに未だ明確な答えがないということである。

丁寧で分かりやすい板書や掲示物の活用は、授業のユニバーサルデザインにおいて「視覚支援」としてよく取り上げられる代表的な支援の一つである。しかしながら、視覚支援がなくても聞くということのみで理解することも一方では重要な学習内容である。

また、年齢や発達の段階が上がることで、過剰な視覚支援はむしろ不要となってくることも推察され、小・中・高のそれぞれの年齢や発達の段階に適した支援を検討することも課題となる。しかしながら、授業のユニバーサルデザインとして紹介されている実践の多くが小学校の取組である。

２ 研究の目的

本調査研究は、総合教育センターのコンセプト「授業力の向上」を踏まえ、「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業」の有効性について以下の３点を仮定し、検証するものである。併せて「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業」の効果的な実践の在り方について検討する。

「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業」は、

- ①多くの児童生徒にとってわかりやすい。
- ②児童生徒はわかる喜びを実感し、学習への興味や意欲の向上につながる。
- ③教師の授業力が向上する。

３ 研究のデザイン

本研究の全体像を模式的に表した（図２）。研究は、３つの内容で構成する。

第１に、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を定義することである。ここ数年で急速に広まり認知されるようになった「授業のユニバーサルデザイン」という用語であるが、明確な定義があるわけではない。「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業」を定義し、本研究の位置付けを明らかにする。

第２に、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の要件・要点を整理し、それに基づいて実践事例集を作成することである。ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業とは具体的にどのような授業を指すのか、授業づくりの観点からそのポイントを整理する。

第３に、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の効果を検証するために、調査を実施することである。ユニバーサルデザインの要件を取り入れた授業を実施し、授業を受けた児童生徒及び参観した教員等からの調査データを元に、その効果の検証を行う。

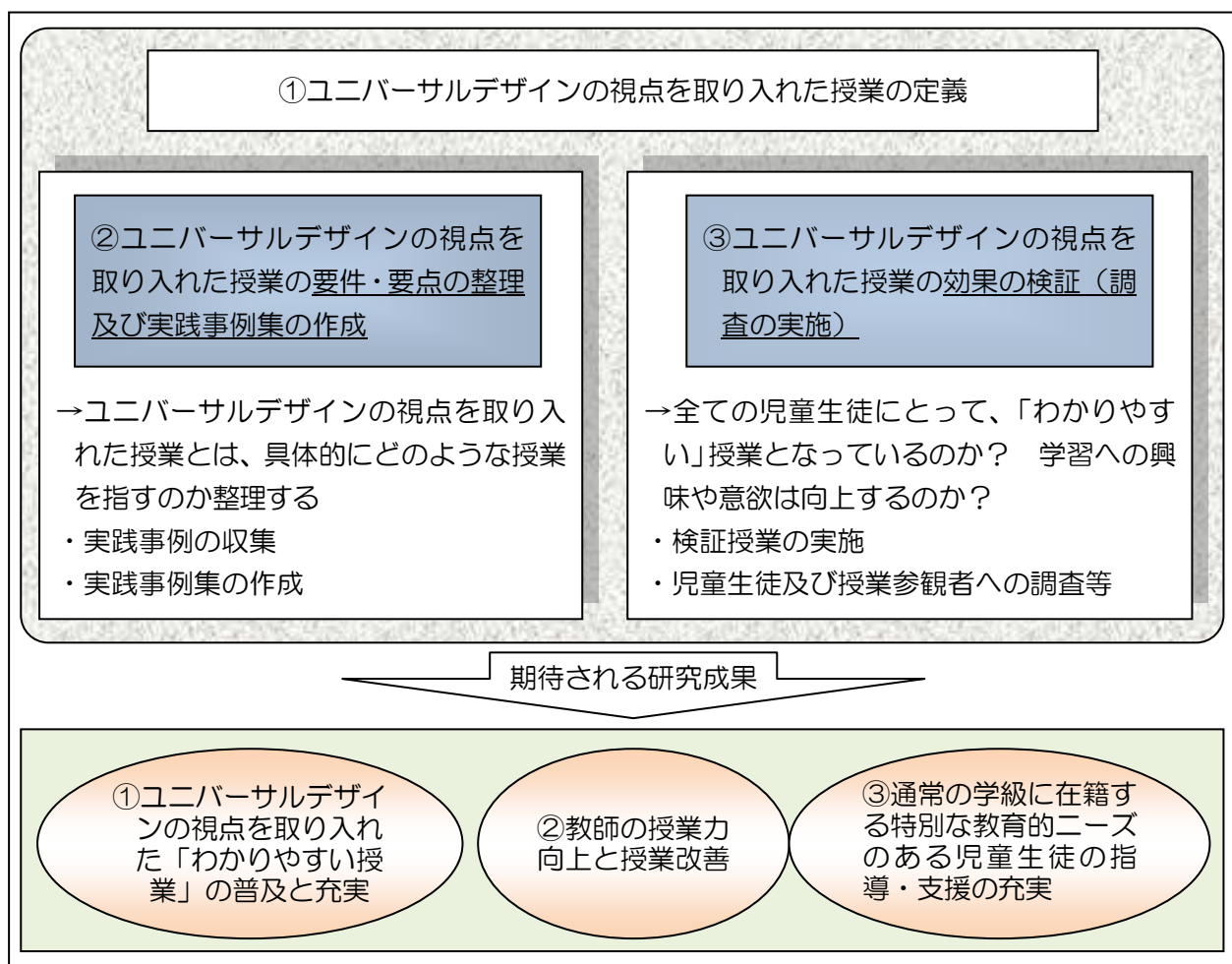


図2 本研究のデザイン

4 ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の定義

（1）ユニバーサルデザインとは

「ユニバーサルデザイン」とは、1985年にアメリカノースカロライナ州立大学のロナルド・メイスが提唱した考え方である。使う人に必要な情報がすぐわかる、使い方が簡単にわかって使える、少ない力で効率的に使えるなど、あらゆる人にとって使いやすいデザインを意味する。

ユニバーサルデザインの提唱者のロナルド・メイスは、ユニバーサルデザインを見極める視点として「ユニバーサルデザインの7原則」を示した。

ユニバーサルデザインの7原則（ロナルド・メイス、2005）

- 1 公平な利用
- 2 利用における柔軟性
- 3 単純で直感に訴える利用法
- 4 認知できる情報
- 5 エラーに対する寛大さ
- 6 少ない身体的能力
- 7 接近や利用のためのサイズと空間

出典：ロナルド・メイス他（1997）Version 2.0 NC State University, The Center for Universal Design.

我が国では、バリアフリー・ユニバーサルデザインの推進に関する政府の基本的な方針として、「バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進要綱」（平成 20 年 3 月 28 日）が、バリアフリーに関する関係閣僚会議において決定された。この要綱の中でユニバーサルデザインについて、「新しいバリアが生じないよう誰にとっても利用しやすくデザインするという考え方」と示されている。

ユニバーサルデザインとバリアフリーの考え方との違いは、バリアフリーは障害を前提にその困難を解消するための考え方であるのに対し、ユニバーサルデザインは「あらゆる人にとって使いやすい」という発想であり、全ての人を対象にした考えであるといえる。

（２）授業のユニバーサルデザイン化

授業をユニバーサルデザイン化するとは、具体的にどのような内容を指すのか。ここでは、先行研究の中から 2 つの研究を概観する。

ア 長江・細渕（2005）による「授業のユニバーサルデザインの 7 原則」

長江・細渕（2005）は、ドナルド・メイスによるユニバーサルデザインの 7 原則を参考に、授業づくりの観点でそれぞれの項目を読み替え、「授業のユニバーサルデザインの 7 原則」を示し、この 7 原則を全て満たしていることをユニバーサルデザイン授業の要件としている。

表 1 授業のユニバーサルデザインの 7 原則（長江・細渕，2005）

7 原則	授業づくりの観点
① 全ての児童が 学びに参加できる授業	参加に対して制限のない、学習活動が保証されている授業のこと。学びの共同体の一員となりうる最低限の学習のレディネスを獲得している、または必要な支援の基に保証されていることで、学びの共同体としての共通課題が存在していることが必要である。
② 多様な学び方に対し 柔軟に対応できる授業	多様な興味・関心に対応でき、多様な学びのスタイルに対応できる授業のこと。一人一人の学び方が保証され、多様な学び方の重なり合いや絡み合いが、豊かな学びとして評価されるようにすることが必要である。
③ 視覚や触覚に訴える教材・ 教具や環境設定が準備され ている授業	視覚や触覚による手がかりで、何を学ぶのか理解することができる、わかりやすい授業のこと。学びの興味・関心を引き出し、学び方やその目標とすることを把握するために、教材・教具の工夫や環境設定の工夫が必要である。
④ 欲しい情報がわかりやすく 提供される授業	欲しい情報やわかりやすいメディアで必要なときに提供される授業のこと。学びの支援となる情報が、必要なときにすぐに手に入れることができるように、整理された環境づくりをすることが必要である。
⑤ 間違いや失敗が許容され、 試行錯誤をしながら学べる 授業	試行錯誤しながら学ぶことが認められている授業のこと。試行錯誤をするための時間と機会と環境設定が必要である。
⑥ 現実的に発揮することが 可能能力で達成感が得られ る授業	一人一人の課題を把握し、適切に設定された課題に取り組む学びができる授業のこと。正確な実態把握と適切な課題設定をすることが必要である。
⑦ 必要な学習活動に十分に 取り組める課題設定が なされている授業	子どもの興味・関心から生まれた活動が、十分に展開できる授業のこと。環境設定などの理由から、活動を制限して子どもの意欲をそがないように環境設定に留意することが必要である。

イ CAST による「学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン (ver. 2.0)」

米国の CAST (Center for Applied Special Technology) は、「学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン (ver.2.0)」において、「提示」「行動と表出」「取り組み」の3点について、多様な方法で学習者に提供することとしている。また、学びをユニバーサルデザイン化することによって、学習者が「学習リソースが豊富で、知識を活用できる」「方略的で、目的に向けて学べる」「目的を持ち、やる気があがる」ようになることとしている。

これらは、学校教育法第30条2項に定義された学力、「基礎的な知識・技能」「それらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」と同様の内容を読みとることができる。学びをユニバーサルデザイン化することとは、全ての児童生徒の確かな学力を育てることを目指した配慮であり、多様な手立てであると理解できる。

図 学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン (ver. 2.0.)



CAST (2011). Universal design for Learning guidelines version 2.0. Wakefield, MA: Author.

[キャスト (2011) バーンズ亀山静子・金子晴恵(訳) 学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン ver.2.0. 2011/05/10 翻訳版]

(3) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の定義

本研究におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を次のように定義した。

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業とは、以下の2点を満たす授業である。

- ①特別な教育的ニーズのある児童生徒への指導・支援の中にある要素と、通常の学級で培った「どの子にもわかる授業」とされてきた要素を融合させた授業。
- ②その結果、児童生徒にとって「わかりやすく」、学習への興味や意欲が喚起される授業。

この定義について、以下の3つのことについて補足する。

第1に、本研究でいうユニバーサルの視点とは、長江・細渕（2005）による「授業のユニバーサルデザインの7原則」に依拠する。

ただし、7原則を全て満たさなければならないと考える必要はない。実際に授業者が授業のユニバーサルデザイン化を試みようとする際、この7原則を使えるところから可能な範囲で取り入れて欲しいと考えるからである。

第2に、特別支援教育の要素と通常の学級での教育の要素の融合としたことである。

授業をユニバーサルデザイン化するということは、特別支援教育の手法を一方的に通常学級に持ち込もうとするものではない。従来からある通常の学級での「どの子も生かされる学級経営」「どの子にもわかる授業」の要素と特別支援教育で培った要素を融合させるという発想を持つことをユニバーサルデザインの視点として捉えている（東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫，2010）。

第3に、通常学級と特別支援学級・特別支援学校と連続性のある視点ととらえることである。

本研究の特色の一つに、小学校、中学校、高等学校だけではなく、あえて特別支援学校も含めて研究を進めていることにある。その理由は、「支援の連続性」を重要視しているからである。平成24年7月23日に文部科学省から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進（報告）」が出された。本報告書は、小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておく必要性が指摘された。学びの場が断絶されずに連続しているということは、それぞれの場に「支援の連続性」が備わっていることに他ならない。

そこで本研究では、特別支援学級や特別支援学校で実施される支援を小・中学校の通常の学級や高等学校で行われる支援の「発展・応用」と位置づけ、同じ視点として同列に扱うことにした。

5 研究計画（平成24年度）

調査研究協力委員を組織し、年間5回の委員会を開催した。その他、検証授業を10回実施した。研究協力委員会の各回の主な内容を表2に示す。

表2 平成24年度の調査研究協力委員会の取組の概要

回	期日	主 な 内 容
第1回	5/18	・委員長及び副委員長の選出 ・平成24年度の研究計画 ・実践事例集の編集検討
	5/31	・柘植雅義氏からスーパーバイズを受ける（事務局） （於 国立特別支援教育研究所）
第2回	7/5	・柘植雅義氏から受けたスーパーバイズの報告 ・実践事例集の執筆要領の検討 ・検証授業の計画
第3回	9/5	・実践事例集Ⅰの第1次原稿確認 ・検証授業の細案検討
第4回	10/12	・実践事例集Ⅱの執筆確認 ・検証授業アンケートの検討 ・柘植雅義氏からのスーパーバイズ
第5回	12/11	・実践事例集Ⅱの執筆確認 ・検証授業の分析計画報告

Ⅱ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の要点整理

1 「授業づくりの12のポイント」の作成

本研究ではユニバーサルデザインの視点は、長江・細渕（2005）の「授業のユニバーサルデザインの7原則」に準ずることとした。しかし7原則は、あくまでも視点を示したものであるため、検証授業を実施する際に授業者がユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を設計するためには、より具体的な例示が必要であると思われた。

そこで、先行研究を参考に長江・細渕（2005）の7原則をより具体化し、「授業づくりの12のポイント」として整理した（表2）。

そして、これを基に実践事例集「Ⅰ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの12のポイント」を作成した（p.22～71）。

表2 授業づくりの12のポイント

項目	概要	具体例	ユニバーサルデザインの視点
1 教室環境1 「場の構造化」	構造化とは、「いつ」「どこで」「何を」「どのように」行動すればいいのかわかりやすくするために、目に見える形で提示することを行う。そうすることで、児童生徒が迷わずに自発的に教室での作業に取り組むことが期待できる。 教室での構造化には、①見ただけでわかるように明瞭に表示する、②空間を目的別に仕切る、③合理的にものを配置する、などの方策がある。	・整理整頓 ・提出箱の設置 ・空間を目的別に区切る（教室のレイアウト） ・立ち位置を示す（マーカー、三角コーン等）	「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」 →場と目的、道具と行動等の対応を明確にすることで、「何をすればいいのか」視覚的・直感的に把握しやすくなる。表示や説明を加えるなどに加えて、「場をわかりやすく構造化」する工夫が求められる。
2 教室環境2 「刺激への配慮」	集中しやすく、落ち着いて学習に取り組むやすい環境にするには、教室の刺激の量を減らす配慮が必要である。児童の注意をそらしたり大切な情報をわかりにくくしたりする余剰な刺激（情報）を取り除き、必要な情報に集中できるわかりやすい教室環境をつくる必要がある。 配慮したい刺激として、①目障りとなる視覚刺激、②不要で不快な聴覚刺激、③影響し合いがちな人的刺激が挙げられる。	・視覚：簡素な黒板周り、棚に目隠しカーテン ・聴覚：椅子の脚にテニスボール ・人的：座席の配慮、パーティションの活用	「①全ての児童生徒が参加できる授業」 →安心して参加し、授業に集中するためには、第一に不安材料や集中を妨げる要因の軽減又は排除が不可欠である。特に視覚や聴覚など感覚刺激に過敏な児童生徒もいるという前提で教室環境を見直したい。
3 ルールの確立 (手順や工程)	ルールというと個人の振る舞いを制限したり、統制したりするものと受け取られるかもしれない。しかし、本来、ルールは、集団生活に於いて適切な行動を示し、具体的にどのように振る舞えばよいのかを教えてくれるものである。ルールが不明確な状況は、不要なトラブルを増やしかねない。 ここでは、教室のルールを事前にわかりやすく示し、みんなで共有する手立てを示す。	・声の大きさ ・鉛筆の持ち方 ・話を聞く姿勢 ・発言の仕方 ・発表の仕方 ・手順や行程 ・朝の身支度 ・掃除の手順書	「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →その場その時の状況に応じた適切な対応ができない場合、「ふざけている」「怠けている」と決めつけず、もしかして「状況理解が不十分だからでは」と考え、わかる工夫を凝らしたい。
4 生活の見通し	児童生徒が主体的に判断し、意欲を持って行動するためには、生活に見通しが持てることが重要である。「これから何をすればいいのか」「自分は今、何に向かっていているのか」を視覚的にわかりやすく示すことが大切になる。 また、「忘れ物はないか」など、重要な事項を記録したり確かめたりすることも大切な生活の力である。一日のスケジュールや一週間の予定などを自己管理し、生活の見通しを持たせるための工夫やアイデアを示す。	・時間割の工夫 ・予定表の工夫 ・手帳やノート、メモ帳の活用	「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →時間を意識し段取りよく行動するためには、時間の見通しを持つことが必要になる。その意識を高め、必要に応じて確認できるように、視覚的に情報を整理して提供したい。
5 授業の見通し	授業のめあてや流れを明示することで、見通しを持って授業に臨むことができ、主体的な学びが期待できる。 学習活動の始まりと終わりを明確に示し、いつまでに何をするのか、どこまでやれば終わりなのかなど、具体的に示すことがポイントとなる。	・授業のめあてや流れの掲示 ・「授業の今」を示す ・課題ボックス ・アラームやチャイムの活用	「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →児童生徒の学習への意欲や努力を持続させるためには、目標や目的を目立たせ、時間の見通しが持てるための工夫が大切になる。
6 授業の組み立て	授業を展開する上で配慮したい点として、①教科の特性に応じた一定の型があること、②活動にメリハリをつけること、③活動の区切りを明確にし、複数の活動を同時に行わないことなどが考えられる。	・毎回、一定の流れで進む授業スタイル ・一斉指導とグループ指導	「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →授業そのものの構造化。

項目	概要	具体例	ユニバーサルデザインの視点
7 板書の工夫	板書の目的は、視覚に訴え、思考を深めることにある。そのままでは消えてしまう言葉のやりとりを板書の形に整理することで、児童生徒の思考の拠り所となる。 ポイントとして、①「めあて」が明示してある、②授業の全体像と流れが視覚的に把握しやすい、③今、何を学習しているのか明確となっている、④適時確認でき、振り返りができる、⑤見やすい、などが挙げられる。	・めあて、ポイントなどの表示 ・チョークの色（白と黄が基本） ・板書は残す ・ホワイトボード、プロジェクターの活用	「①全ての児童生徒が参加できる授業」「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →話し言葉だけでなく視覚情報を適切に添えることが重要となる。黒板はそのための基本ツールである。
8 集中・注目のさせ方	聞き漏らしを無くし、学習に集中させるためには、注意を喚起し、児童生徒自らが対象に意識を向けることが大切となる。それには、不注意な児童生徒にその都度、個別に注意を促すのではなく、なにより本人の「聞く構え」を育てることが重要となる。 具体的には、①注意を促す指示や合図が明確である、②ルール化する、③自ら注意が向けられた時を逃さずにほめる、④授業そのものが魅力的である、などがある。	・注意喚起 ・沈黙の活用 ・視覚教材の活用 ・話を「聞く」と「板書を写す」場面を分ける ・同じ立ち位置 ・端的な説明 ・興味を引きつける教材の工夫	「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →一度に複数の情報処理は誰にとっても優しいものではない。今、重要となる情報源に児童生徒自ら注意を向けることで集中して、情報がキャッチできる。
9 指示の出し方	記憶に残りやすい指示は、①話の前に注意を喚起する、②指示する内容が明確で具体的である、③聞く側にとって要点を整理しやすい、いつまで集中して聞いていればいいのか終わりが見通せる、などがある。 そのためには、①「しっかり」「ちゃんと」などの曖昧な言い回しは避け避け、②明示性の高い具体的な表現を用い、③視覚的な情報を活用する、③「1つめ...、2つめ...」のように列挙法の活用、などがポイントとなる。	・活動の始まりと終わりを明確に示す ・具体的に話す（×「しっかり」×「ちゃんと」） ・肯定的な表現（×「走るな」、○「廊下は歩きます」）	「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →教師自身が最も重要な学習環境であり、言語環境を整理することは児童生徒の「わかりやすさ」の基本である。
10 参加の促進	教科教育の中で培われてきた「わかる授業」の工夫の中には、ユニバーサルデザインの視点が多く含まれている。 学習活動を活発にし、授業への参加を促進するには、①学習へのモチベーションを高める、②間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる、③多様な学習スタイルがある、④学習のポイントをつかめる教材の工夫、⑤参加のための支援・援助、などがある。	・helpカード、ヒントカードの活用 ・多様な解決方法を示す ・プリント教材、ワークシートの工夫	この項目は、授業UDの7原則全ての要素が含まれる。特に「②多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」「⑤間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる授業」の視点で工夫が望まれる。
11 個人差への配慮	学級には、たくさんの個性を持った児童生徒がおり、いろいろな能力差や得意・不得意などの個人差があることを前提とした学級経営や授業づくりが望まれる。 それは決して「特別扱い」という発想ではなく、必要であれば「誰でも受けることのできる支援」と考えたい。	・活躍できる場の用意（分業化） ・選べる教材 ・個別の補助教材や教具の活用 ・学力に合わせた教材の工夫	特に「②多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業」「⑥現実的に発揮することが可能な力で達成感が得られる授業」「⑦必要な学習活動に十分に組み入れる課題設定がなされている授業」の視点は重要。
12 学級モラルの形成	学習に有効な手立てであっても、自分だけ「特別扱い」と感じると個別的な対応を嫌がり受け入れたがらない児童生徒は多い。 個人差への配慮が学級に自然なことで受け入れられるには、①日頃からお互いの個性を認め合う風土が培われ、②児童生徒が「価値の多様さ」に気付けることが不可欠である。	・助け合いや認め合いの場面の設定 ・集会や学級通信の活用	「①全ての児童生徒が参加できる授業」 →学びの共同体としての意識を培うことである。

Ⅲ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の効果の検証

1 目的

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業は、児童生徒の「わかりやすさ」や「学習への興味や意欲の向上」に有効性について明らかにするとともに、ユニバーサルデザインの視点を効果的に授業に取り入れるための知見を得ることを目的とする。

2 方法

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた検証授業を実施し、授業を受けた児童生徒及び参観者を対象にそれぞれアンケート調査を実施した。また、検証授業後に研究協議を行った。

（１）検証授業の実施

小学校 3 校、中学校 1 校、高等学校 3 校、特別支援学校 3 校の計 10 校で検証授業を行った（表 3）。検証授業の実施にあたり、授業者に「授業づくりの 1 2 のポイント（表 2）」の項目の中から具体的に何を取り入れたのか学習指導案に記すように求めた（詳細は【資料編】を参照のこと）。

（２）児童生徒アンケート

授業を受けた児童生徒にアンケート調査を実施した。アンケートは、無記名自記式とし、授業実施後に回答を求めた。なお、特別支援学校は、児童生徒に回答は困難であると判断し、実施しなかった。

各授業とも 5 つの質問項目で構成した。そのうちの「興味」「話のわかりやすさ」「理解度」の 3 つは全ての授業に共通の項目とした。他の 2 項目は、それぞれの授業の中でユニバーサルデザインとして取り入れた「授業づくりの 1 2 のポイント」についての質問項目とした。なお、教科の特色によって共通項目であってもあえて、質問を変えた（例えば、F 校の「体育」は、「理解度」に変えて「取組への意欲」とした）。

項目ごとに、4～1 点の間で評定を付けさせ、併せて理由や根拠について自由記述を求めた。評定は、基本的に 4 件法としたが、数直線を設けて数値と数値の中間に○印を付けるなどの回答でもよいこととした（【資料編】参照）。その場合、付けた○印の距離を測定し、小数第 1 位で数値化した（例えば、4 と 3 のちょうど中間に○印を付けた場合、3.5 点とした）。

（３）参観者アンケート

検証授業を参観した校内教員、校外教員、研究協力委員及び総合教育センター所員を対象にアンケート調査を実施した。

授業に取り入れた「授業づくりの 1 2 のポイント」の内容について、その効果について評定と自由記述を求めた。評定は、「とても効果がある」に 5 点、「少し効果がある」に 4 点、「どちらとも言えない」に 3 点、「あまり効果はない」に 2 点、「効果はない」に 1 点を与え、数値化した。

（４）研究協議

可能な範囲で授業後に授業者と参観者とで研究協議を実施した。内容は、授業の振り返り、質疑応答及び協議を行った。

表3 検証授業一覧

	学校・学年・教科 教科・単元・題材等	授業の概要	実施した授業づくりのポイント	詳細の 掲載頁	回答数 上:児童生徒 下:参観者	研究 協議
A	小学校5年『道徳』 「夢をもち、未来を拓く」 資料「批木作りの里」	郷土の偉人「宮島勘左衛門」 の生き様から、人生を切り拓く ことの大切さを学ぶ。	⑤授業の見通し ⑦板書の工夫 ⑩「分かち合い」	資料1	31	○
					19	
B	小学校6年『外国語活動』 Hi friend Lesson 8 「夢宣言をしよう」	外国語サポーターとのTTによる 授業。外国語の表現に親しみ、 世界の様子を知る。	⑩話し合い活動 ⑩題材設定の工夫 ⑩視覚化等	事例1 p.73	34	○
					8	
C	小学校6年『算数』 「順序よく整理して 調べよう（場合の数）」	修学旅行を題材に、見学する 順序が全部で何通りあるか 整理して調べる。	⑥授業の組み立て ⑦板書の工夫 ⑩ヒントカード	事例2 p.77	27	○
					12	
D	中学校1年『技術・家庭』 「生活に役立つ小物をつ くろう」	木工作業。けがき線に沿っ て、まっすぐ直角にのこぎりで 切断する。	①場の構造化 ⑦ICTの活用 ⑩ヒントカード	事例3 p.81	30	—
					7	
E	高校2年『古典（漢文）』 「史記『項羽と劉邦』 鴻門之会」	助動詞、句法等のルールを確 かめ、白文に訓点を付し、書 き下し文を読解する。	②刺激の排除 ⑦板書の工夫 ⑩プリント教材	事例4 p.85	19	○
					10	
F	高校2年『体育』 「長距離走」 (5km 走)	能力別に4段階に分けて時 差スタート。能力・目標に適 ったグループを選べる。	⑦目標の明確化 ⑩時差スタート ⑫学習規律	事例5 p.89	31	○
					9	
G	高校2年『物理』 「静電気～静電誘導と 誘電分極」	授業を、「説明－問題演習（グ ループ活動）－確認テスト」 で構成。65分授業。	⑥授業の組み立て ⑦視覚的な説明 ⑩ファシリテーション	資料2	24	○
					4	
H	特別支援学校・小学部 『図画工作』「紙でいろ んなものを作ろう」	紙を丸めたりつなげたりし て「ぶどう」「恐竜」などの 作品を作る。個別化に工夫。	①ペーテーションの活用 ⑦ビデオ教材 ⑪教材の個別化	事例6 p.93	—	○
					8	
I	特別支援学校・中学部 『生活単元学習』「オレた ちの仕事をはじめよう」	アイロンビーズの袋詰め、楊枝 さしの袋折り・テープ止めな ど、個々の作業に取り組む。	⑤授業の見通し ⑦視覚的な説明 ⑪教材の個別化	資料3	—	—
					8	
J	特別支援学校・高等部 『作業学習』 「紙工芸」	牛乳パックを再利用し、班別 に一筆せん、ポチ袋、卓上カ レンダー等を作成する。	①場の構造化 ③手順書 ⑪教材の個別化	事例7 p.97	—	—
					19	

(注)丸数字は、「授業づくりの12のポイント(p.9～10)」の項目番号を表す。

(5) 分析の視点

ア 得点の高さの分析

各アンケートは、それぞれ項目ごとの得点を算出し、児童生徒の「理解度」、「興味・関心」及び「授業づくりのポイント」の得点の高さからその効果の測定を行う。

ただし、測定の対象となるそれぞれの授業の内容や学校種、データ数等が異なるため、得点を単純には比較できない。そこで、児童生徒の回答と参観者の回答を照らし合わせ、また自由記述も参考にし、総合的に分析を行う。

イ 項目間の関係性の分析

実施した「授業づくりのポイント」が児童生徒の理解度や興味・関心を高めているのかどうか明らかにするため、児童生徒アンケート回答の5項目についてクラスター分析を行った。クラスター分析とは、類似性の高いグループ(クラスター)にまとめる分類のための技法であり、結果をデンドログラムによって表す。「理解度」「興味・関心」と「授業づくりの12のポイント」との間の関連の強さを分析することで、ユニバーサルデザインの効果を測定する。

3 結果と考察

各授業で得られた有効回答数を表3に示す。

児童生徒アンケートの結果をレーダーチャートに示した(図5)。最小値は2.92、最大値は3.98、中央値は3.58であった。参観者用アンケートのそれぞれの授業で設定した項目と平均点を図5に示した。最小値は3.2、最大値は5.0、中央値は4.3であった。

クラスター分析の結果を図6(p.17~18)に、結果の概要をp.18に示す。

(1) 「話のわかりやすさ」をユニバーサルデザイン化する効果

クラスター分析の結果、教師の「話のわかりやすさ」は、「理解度」と「興味・関心」の両方又はどちらか一方と高い類似性が認められた。

「話をわかりやすくする」とは、CAST「学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン ver.2.0(p.5)」でいう「Ⅰ. 提示に関する多様な方法の提示」に相当するものであり、情報の視覚化や視覚メディアの活用、パターンや重要事項、全体像、関係を目立たせるなどにあたる。本研究で作成した「授業づくりの12のポイント」のその多くが「提示」に関連した内容となっている。

例えば、C校は、児童生徒アンケートの「話のわかりやすさ」が3.91、理解度3.95といずれも高い得点を示している。この授業で取り入れた「授業づくりの12のポイント」のうち提示に関する内容は、「授業の組み立て(4.92)」や「板書の工夫(4.90)」であるが、いずれも参観者から高く評価されている。クラスター分析の結果からも「理解度」と「話のわかりやすさ」が極めて高い類似性が認められたことから、取り入れた「授業づくりの12のポイント」が有効に機能し、児童の「授業がわかった」という手ごたえとなったと考えられた。

したがって、児童生徒の理解や興味関心を高めるには、提示に関する内容をユニバーサルデザイン化することが重要であり、効果が認められると考えられた。

ただし、実技教科の場合、それが必ずしもあてはまるとは限らないことが示唆された。D校の技術・家庭の授業では、ユニバーサルの視点としてICTの活用を取り入れ、参観者からの評価も極めて高かった。しかし、「話のわかりやすさ」と「迷わずに作業できた」や「興味関心」との類似性は高くなかった。「わかる」ことと「できる」こととは、また別の次元であると考えられた。

(2) 小学校と高等学校では異なる学びの特徴

児童生徒アンケートの各項目を変数にクラスター分析によって項目間の類似性を分析したところ、小学校と高等学校とでそれぞれ特色があった。

小学校では3校とも「理解度」と「話のわかりやすさ」の密接度が高かった。「提示」に関する内容をユニバーサルデザイン化することで、児童の「わかった」に比較的直接的につながるものが推測された。

一方、高等学校では、「理解度」は「話のわかりやすさ」よりも「主体的な学び」に近い関係にあり、むしろ「話のわかりやすさ」は、「興味関心」と密接な関係にあった。このことは、高等学校では、生徒の授業内容の理解をより深める手立てとして、より主体的に学習に取り組む態度を促すことが重要であると考えられる。それは、CAST「学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン ver.2.0」でいう「Ⅲ. 取り組みに関する多様な方法の提供」に関する内容をユニバーサルデザイン化することではないだろうか。

したがって、発達段階に応じて取り入れるユニバーサルデザインの視点を焦点化したり、特化したりすることも必要になるのではないだろうか。

（３）ユニバーサルデザイン化された授業には多様な工夫や手立てがある

「授業づくりの１２のポイント」の項目を何か一つ取り入れればよいというわけではなく、複数の対策や仕掛けが相互に補完し合って児童生徒の学びを支えていると考えられた。

アンケートの自由記述や研究協議から、「授業づくりの１２のポイント」の適切な実施にも関わらず、教師の指示を児童生徒が聞き逃す場面や説明を正しく理解しないまま演習に入る場面があった。しかし、そうした児童生徒も教師が用意した別の手立てによって、結果的に自分の聞き逃しや間違いに気づくことができていることが多々あった。

例えば、一斉指導の場面に聞き逃しがあっても生徒同士がペアになって確認し教え合う場面で自分の間違いに気づいたり、教師の説明では内容を正しく理解できなかった生徒が配布された図解の豊富なプリント資料によって理解できたりしていた。

（４）授業者の設定した以外にもユニバーサルデザインと呼ぶにふさわしい支援も

参観者アンケートから授業者が設定した「授業づくりのポイント」ではないものが、児童生徒の取組を促進していることがあった。

例えば、前の項目で示した「生徒同士によるペア学習」は、授業者の授業設計ではユニバーサルデザインの視点として取り入れたものではなく、教科の特性から「効果的な指導方法」という観点から普段の授業で取り入れていた。しかし、結果的に聞き逃しのあった生徒の気づきを促すという効果があった。

本研究の「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業」の定義の中に「通常の学級で培った『どの子にもわかる授業』とされてきた要素」とあるが、まさにこの事例がそれにあたるのであろう。

（５）特別支援学校におけるユニバーサルデザイン

検証授業として実施した特別支援学校の授業の中には、いずれも「個人差への配慮」が取り入れられており、教材や教具の個別化が実施されていた。

参観者アンケートからは、いずれも概ね高い評価が多かったが、少数ではあるが参観者から「より個々の実態に応じた工夫が必要」という意見もあった。

授業を評価するには、たとえ、それが一般に有効性が高いといわれる支援策であっても、実際に個々の児童生徒に適した支援となっていなければ、効果があるとは言えない。

一斉指導、集団での指導の中でも個別の指導計画を活用し、内容や教材の個別化を一層進める必要がある。

図5 アンケート結果の概要

授業	児童生徒アンケート	参観者アンケート
A 校 小5年 「道徳」		ルールの確立 ：「分かち合い」の形式を取り入れたことで、話し合いが円滑になる。 3.74
		授業の見通し ：授業の流れを図式化し、掲示したことで、活動の見通しが持てる。 3.34 板書の工夫 ：話し合いの見通しが持ちやすい。発表や発言が把握しやすい。 4.21
	児童の「授業の見通し」が低さが目立った。図式化して掲示するなどUDの視点として取り入れた事項ではあるが、掲示のみで授業前や途中に確認の機会がなかったからかもしれない。	
B 校 小6年 外国語 活動		参加の促進 ：これまでの学習を相互に関連付けた題材設定により、関心・意欲が高まる。 4.89
		授業の組み立て ：授業に基本のパターンがあり、見通しが持て主体的に活動できる。 3.89 参加の促進 ：ペアやグループでの話し合い活動を設定することで、自分の夢や考えを発表しやすくなる。 4.56 参加の促進 ：児童の想像を広げやすくするために写真や挿絵を活用したり、役割演技などを取り入れたりする。 4.67
	全体的に高い評価であった。児童の「話し合い」が3.14点なのは、設問が「話し合い」と「発表」ができたかについて訪ねるWクエスチョンであったため、発表していない児童が低い点をつけたことによる。児童の実体験を題材にした点が参観者から「興味を持って参加した」と評価されていた。	
C 校 小6年 算数		教室環境「刺激への配慮」 ：前方の掲示板に目隠しカーテンを使用し黒板周りがすっきり。 4.54
		授業の組み立て ：基本パターンがあり、見通しが持て主体的に活動できる。 4.92 板書の工夫 ：学習カードの活用、チョークの色分け、授業の展開が分かる工夫。 4.90 参加の促進 ：発表ボードやワークシート・ヒントカードの活用。活躍できる場や活動の設定。 4.92 個人差への配慮 ：個別の補助具（便利カード）の活用。 5.00
	児童及び参観者ともに極めて高い評価。その中であって、児童の「話し合い」3.61点は、設問が「話し合い」と「発表」ができたかについて訪ねるWクエスチョンであったため、発表していない児童が低い点をつけたことによる。修学旅行から題材を選んだことも「参加を促進」していたという意見があった。	
D 校 中1年 技術		作業時間の確保（効率よい作業） ：安全で作業しやすい木工室のレイアウト、工具の整理・整頓、アラームによる時間報告 5.00
		導入の工夫 ：ICTを活用することで作業内容やポイントを視覚的に分かりやすくする。 5.00 ヒントカードの活用 ：個人差を配慮し、必要な生徒はヒントカードを掲示し、活用できるようにした。 4.33 補助具・工具の工夫 ：向きや材料の固定の仕方を示した椅子、のこぎりの切り込み角度を示す補助線 4.60
	児童の「わかりやすさ」が高く、裏付けるように参観者からの評価も極めて高い。ただし、実技教科のためか、「わかる」に比べて、「できた」はやや低い。作業時間は「もっとやりたい」という前向きな意見だった。	
E 校 高2年 古典 (漢文)		穏やかな声で授業を行う ：不要な刺激の排除、注目を促し、指示が伝わりやすくする。 4.36
		分かりやすさの工夫 ：授業の見通しを持たせる導入、「書き下しのルール」の活用、マインドマップの活用 4.50 板書の工夫 ：チョークの色の使い分け、記号の活用 3.20
	生徒及び参観者からの評価は総じて高い。参観者の「板書の工夫」3.2点は、板書そのものの機会が少なかったためと思われる。むしろ評価項目にはないが「プリント教材」が工夫されていたという意見があった。また、指示を聞き逃す生徒がいても、生徒同士がペアで学ぶ場面で気づいたり教え合ったりしている。	

授業	児童生徒アンケート	参観者アンケート	
F 校 高 2 年 体育		個人差への配慮及び参加の促進：時差スタートを活用することで、能力差がある中で生徒一人一人が全力を出し切れる。	4.90
		大きめのタイマーと評価規準の掲示：目標を意識し、意欲を持って取り組める。	4.30
		授業規律と話を聞く態度の形成：習慣化することで、落ち着いて、楽しく安全に授業に参加することができる。	4.60
		生徒及び参観者からの評価は総じて高い。参観者から「時差スタート」の効果を高く評価されているが、生徒評価が 3.48 点であるのは、「なくても実力を発揮できる」という意見の生徒があったため。	
G 校 高 2 年 物理		構造化された授業プロセス：進め方に一定の型があることで生徒は見通しを持ち、能動的な学習が促される。	4.80
		視覚化された分かりやすい説明：パワーポイントやプリントの配付による視覚的で分かりやすい説明。	5.00
		参加の促進と個人差への配慮：生徒個々の多様な学びを認めて促すファシリテーションや介入。	4.80
		生徒の「話のわかりやすさ」「興味関心」の評価が高い。それを裏付けるように参観者からの評価が各項目とも極めて高い。「理解度」が他と比較して低いが、評定を 3 以下につける生徒でも自由記述には「自分で復習しないといけない」など、必ずしも否定的な意見ではなかった。	
H 校 特・小 図画工作	なし	授業の見通し：「見本ビデオ」を用いた、視覚的に分かりやすい導入と手順表	4.60
		参加の促進・個人差への配慮：作り方、作る量が分かりやすい教具（紙を筒状に丸める道具）	4.35
		個人差への配慮：同じ題材、素材を扱いつつ、活動量や内容、支援具を個々に配慮した授業内容。	4.30
		場の構造化：ついたてや机を用いた場の構造化（意識しやすさ、不要な刺激のシャットダウン）。	4.40
		参観者からは、「児童は落ち着いて参加していた」「個別の配慮が行き届いていた」と評価が高かった。研究協議の中で、「見本ビデオ」は流すだけではなく、静止画を取り入れるとより効果的という意見があった。	
I 校 特・中 生活単 元学習	なし	授業の見通し：工程表や授業の流れを示す掲示物の活用、一定の流れを繰り返す授業スタイル。	3.67
		視覚的に分かりやすくする：イラストや写真を活用し、視覚的に分かりやすい提示。	3.67
		個人差への配慮：作業内容や工程の個別化。	3.22
		それぞれの UD の視点が授業に取り入れられているものの、一層綿密な「個々の生徒の実態に合った工夫や配慮が必要」という記述が見られ。また、活動のねらいを明確にすること、提示する写真は「何を伝えたいのか」情報量を限定すること、などが指摘された。	
J 校 特・高 作業学習	なし	場の構造化：整理整頓（清掃用具、文具、材料）により見通しを持ち、取り組める。	4.00
		ルールの確立：手順書を活用することで見通しがもて、積極的に参加できる。	3.78
		板書の工夫：作業目標、作業結果、製作目標を記し、目標意識と意欲を高める。	4.00
		個人差への配慮：補助具の活用、すき具、計量道具の改良等により参加意欲を高める。	4.00
		参観者の評定は、大きく分かれた。例えば、「個々の配慮が十分になされていた」という意見もあれば、「理解の低い生徒への工夫が見られない」「用具や安全への配慮が感じられない」などであった。授業の UD を単に「授業のコツ」という水準ではなく、授業の質そのものとして考える必要があるという指摘もあった。	

児童生徒アンケートは、4～1 点で、参観者アンケートは、5～1 点でそれぞれ評定を求めた。

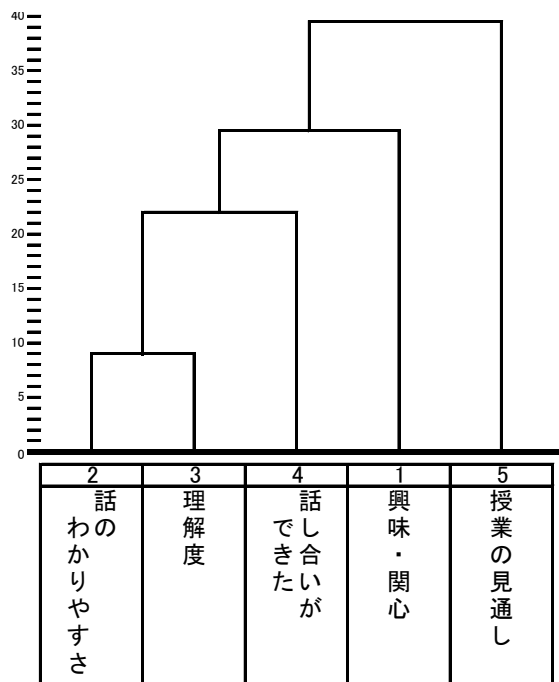


図6-1 A校(小5年「道徳」)

「話のわかりやすさ」と「理解度」の類似性が高いが、他の項目と連結するまでの枝が長く、項目間の関連は強いと考えられた。

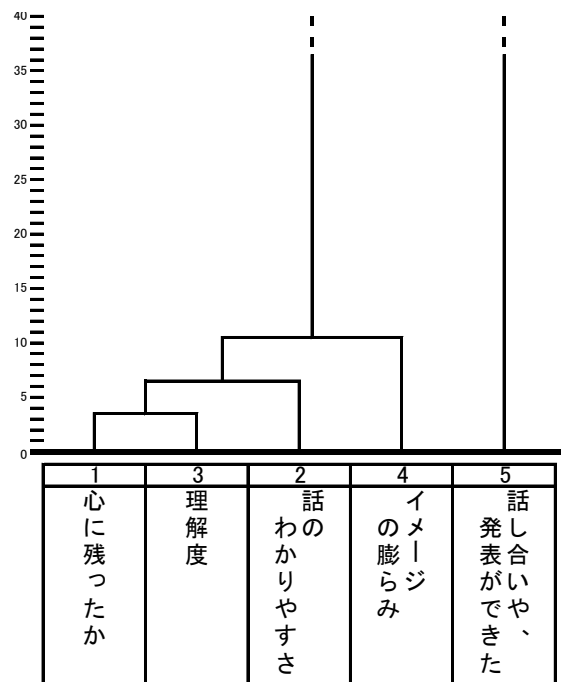


図6-2 B校(小6年「外国語活動」)

5項目のうち「5 話し合いや、発表ができた」以外の4項目は類似性が高く、相互の関連は強いと考えられた。

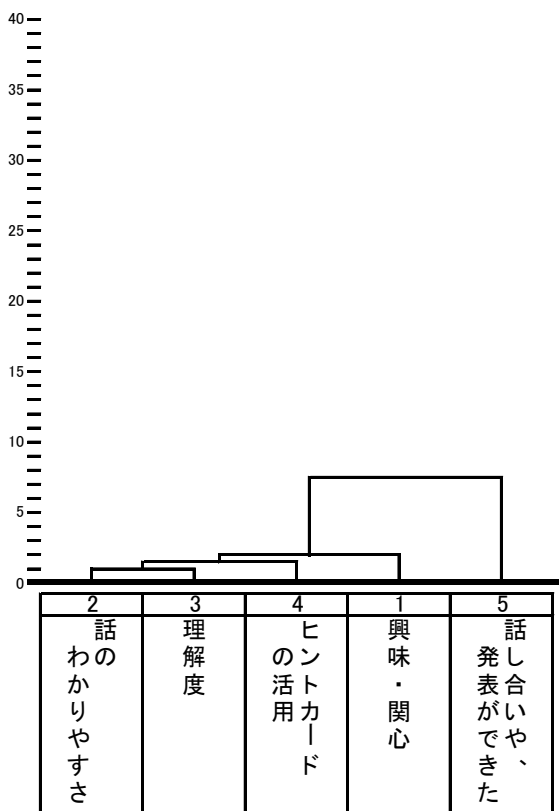


図6-3 C校(小6年「算数」)

全ての項目において類似性が高く、特に「話し合いや、発表ができた」以外の4項目の関連は極めて強い。

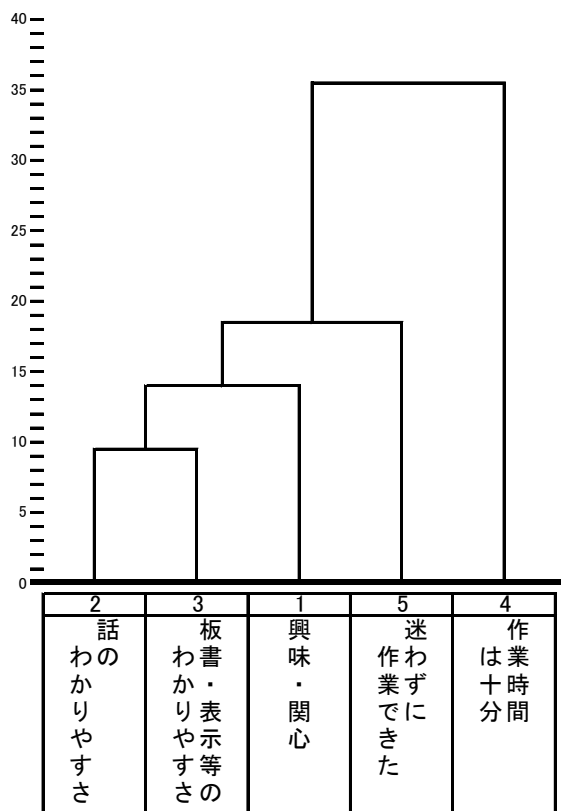


図6-4 D校(中1年「技術」)

「話のわかりやすさ」と「板書・表示等さのわかりやすさ」の類似性が高いが、それらと他の項目との関連は弱い。

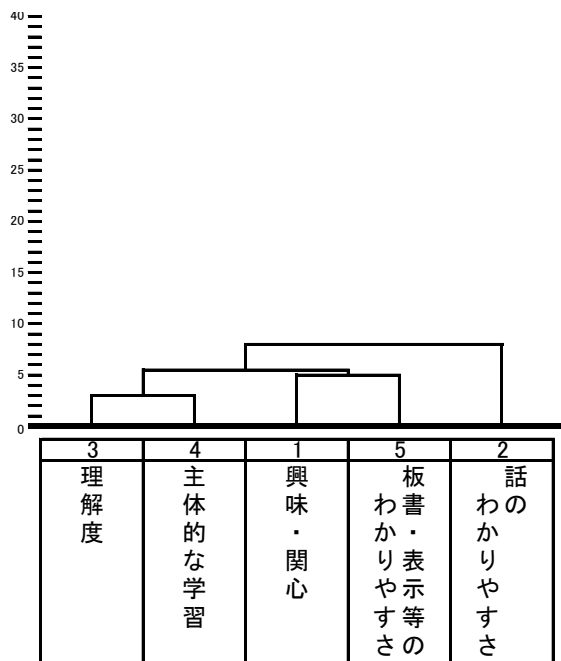


図6-5 E校(高2年「古典」)

全体としての類似性は高い。その中で「理解度」と「主体的な学習」が、「興味・関心」と「板書・表示等のわかりやすさ」に関連は強いと考えられた。

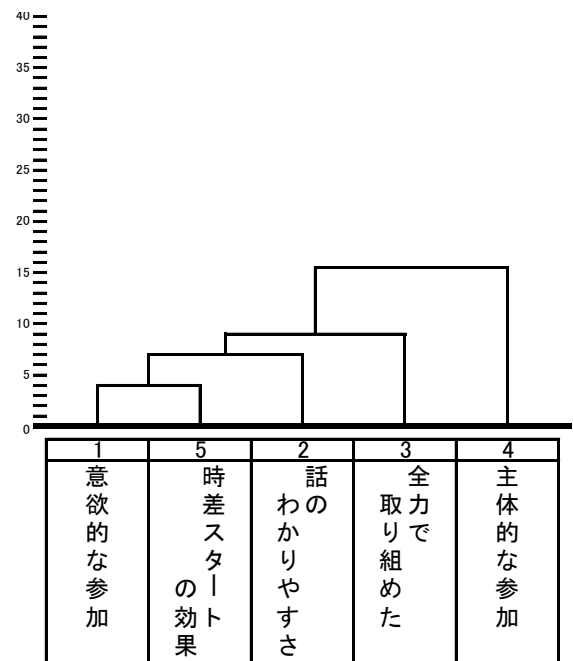


図6-6 F校(高2年「体育」)

「主体的な参加」以外の4項目は、高い類似性を示した。その中で「意欲的な参加」と「時差スタート」との間の関連が強いと考えられた。

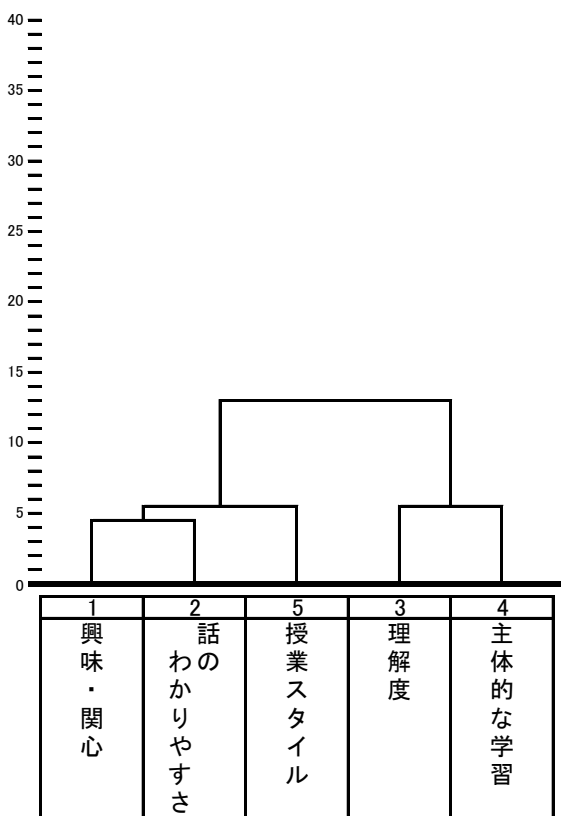


図6-7 G校(高2年「物理」)

全体としての類似度は高い。その中で「興味・関心」と「話のわかりやすさ」「授業スタイル」のまとまり、「理解度」と「主体的な学習」のまとまりが示された。

＜クラスター分析の結果概要＞

- ①児童生徒アンケートの結果 (p.15～16) と照らし合わせると、評定の低かった項目は他の項目との関連性も弱かった (例えばA校の「授業の見通し」、B校の「話合いや発表ができた」、D校の「作業時間は十分」)。
- ②児童生徒アンケート及び参観者アンケートの結果と照らし合わせると、いずれも評定の高かった授業は、取り入れた「授業づくりのポイント」の項目が「興味・関心」「学習意欲」「理解度」と密接に関連していた (例えば、C校の「ヒントカードの活用」、F校の「時差スタートの効果」、G学校の「授業スタイル」等)。
- ③学校種で連結 (まとめ) に特色が見られた。小学校では「理解度」と「話のわかりやすさ」に類似性が高かった。一方で高等学校は「理解度」と「主体的な参加」に、「興味・関心」と「話のわかりやすさ」「板書・表示等のわかりやすさ」との間に関連が強かった。

(注) デンドログラム

・縦の枝が短く、数値の小さい段階で項目同士が連結しているものは、相互に類似性が高いことを示している。

IV 研究のまとめ

1 要約

本研究の目的は、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の効果を検証し、併せてユニバーサルデザインの視点を効果的に授業に取り入れるための知見を得ることであった。そこで、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を定義し、要点を整理した。それに基づいて検証授業を実施し、効果の測定を行った。

その結果、以下の4点の知見が得られた。

第1に、授業における「情報の提示」についてユニバーサルデザイン化することで「わかりやすく」することが重要であること。

第2に、学校種や発達段階によってユニバーサルデザイン化の重点が異なり、小学校では理解に向けて「情報の提示」を、高等学校では理解に向けては「主体的な学び」を、興味関心に向けては「情報の提示」をそれぞれユニバーサルデザイン化することが重要であること。

第3に、授業を真にユニバーサルデザイン化するためには、一つの手法を取り入れるだけではなく、「多様な手立て」があること。

第4に、特別支援学校においては、単にユニバーサルデザインの手法、例えば本研究で整理した「授業づくりの12のポイント」を授業に取り入れるだけではなく、「個人差への配慮」の徹底を図ることが何より重要であること。

これらの知見を学校で生かし、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業が円滑に実施できるように実践事例集を作成した。

2 今後の課題

今後の課題として3点挙げる。

第1に、研究の方法論についてである。本研究は、10校の事例的データをもとに検討を行ったため、得られた知見だけから安易に一般化することはできない。小学校と高等学校におけるユニバーサルデザイン化の違いや特色について言及したが、教科ごとの特色など他の影響について検討を行う必要がある。また、高等学校といっても学科や課程などにより様々な特色があり全て同じには扱えない。より多くのデータを更に検証する必要がある。

第2に、ユニバーサルデザインの対象についてである。「授業づくりの12のポイント」を示したが、それらはCAST「学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン ver.2.0」での「提示」に関する内容に重心が置かれていると思われた。検証授業を通して、通常の学級で「よい指導」といわれる取組の中には、特別支援教育の立場から見て、「まさにユニバーサルデザイン」といえるようなたくさんの取組に出会った。

今後は、「参加の促進」「主体的な取組」などにおいてユニバーサルデザインの視点を取り入れた実践例の検証及び実践紹介をしていくことが求められる。

第3に特別支援学校の実践を十分に検討できなかった。適切に検証するためには、児童生徒個々の実態を適切に把握した上で、効果の測定をしなければならない。

これはユニバーサルデザインの授業に限らず、障害による学習上又は生活上の困難のある児童生徒の授業評価について言えることであり、今後の重要な課題である。

第2部 实践事例集

1 活用にあたって

(1) はじめに

この事例集は、2つの部分から構成されています。

一つは、「Ⅰ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの12のポイント」です。これは、学校種や教科・科目にかかわらず、授業に取り入れると学びやすくなる授業のポイントを観点別に12の項目に整理したものです。できるだけ、写真や図、イラストを取り入れて視覚的に具体的な実践例を示しました。

もう一つは、「Ⅱ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの実際」です。本調査研究において検証授業として実施した中から、小学校2、中学校1、高等学校2、特別支援学校2の計7件を事例として取り上げたものです。授業づくり12のポイントを各教科等の特性に応じて実際の授業の中でどのように取り入れたらいいのか示しました。

Ⅰ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの12のポイント

1	教室環境①「場の構造化」	25
2	教室環境②「刺激への配慮」	29
3	ルールの確立	32
4	生活の見通し	37
5	授業の見通し	40
6	授業の組み立て	44
7	板書の工夫	47
8	集中・注目のさせ方	52
9	指示の出し方	56
10	参加の促進	59
11	個人差への配慮	65
12	学級モラルの形成	69

Ⅱ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの実際

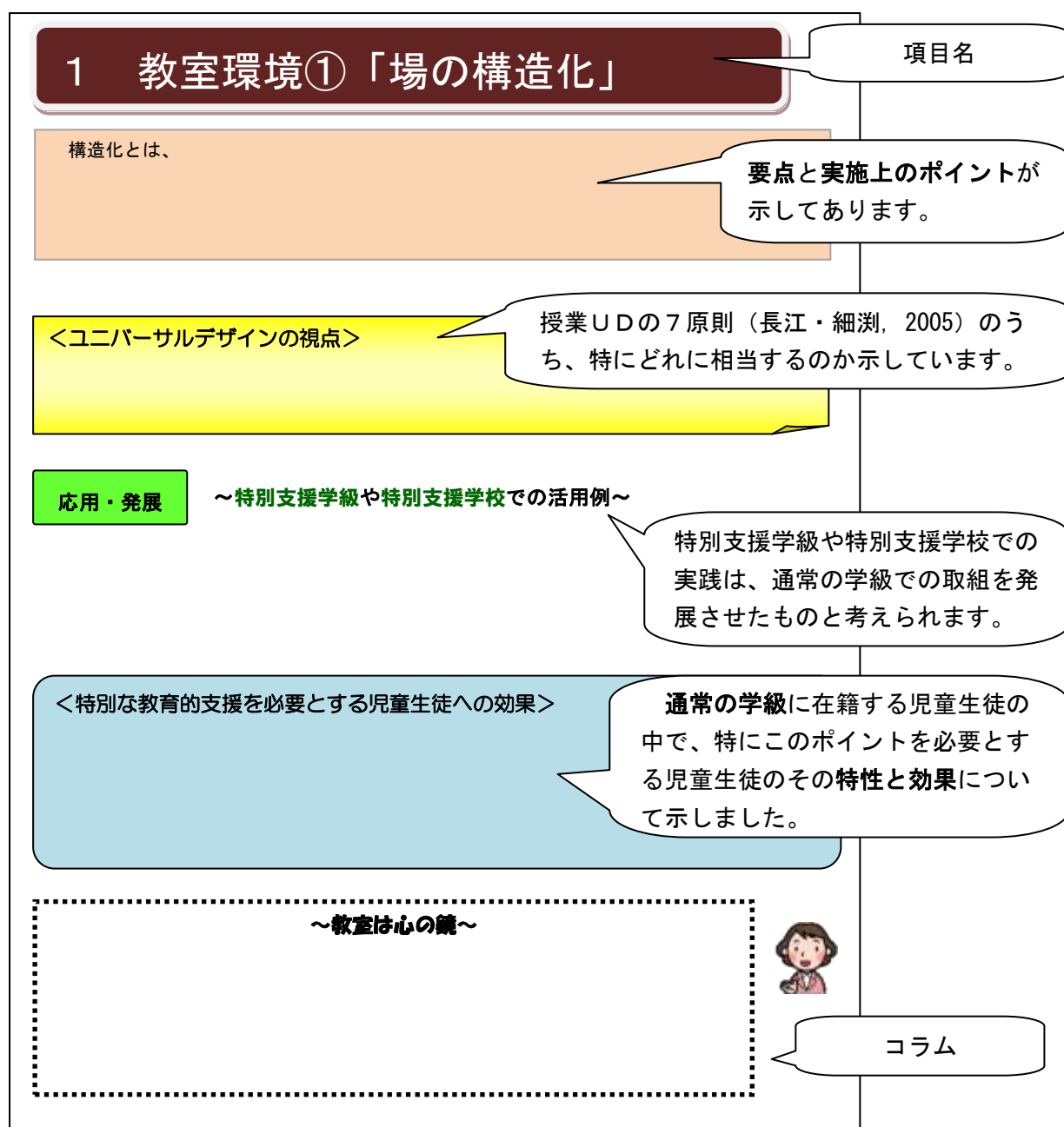
1	小学校・6学年・外国語活動「Hi friend Lesson 8 夢宣言をしよう」	73
2	小学校・6学年・算数「場合の数」	77
3	中学校・1学年・技術・家庭科「生活に役立つ小物をつくろう」	81
4	高等学校・古典「漢文：史記『項羽と劉邦』」	85
5	高等学校・体育「長距離走」	89
6	特別支援学校・小学部・教科別の指導「図画工作」	93
7	特別支援学校・高等部・「作業学習」	97

(2) 活用の仕方

I ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの12のポイント

12のポイントの各項目は、それぞれ独立した内容で構成されているので、どこから読んでいただいても結構です。

それぞれの項目は、写真や図などの具体例のほか、以下の内容で構成されています。



Ⅱ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの実際

各事例は、主に以下の5つの部分から構成されています。

小項目	内 容
実践の概要	ユニバーサルデザインを取り入れた意図やねらい、学級の概要（支援の必要な児童生徒の有無）など、授業の概要について記してあります。
単元（題材）について	教科・科目、単元の意図やねらいなどが記してあります。
本時の学習指導の実際	学習指導案の「展開」が示してあります。授業の中で「どこ」で「どのよう」にユニバーサルデザインを取り入れたのか記してあります。
ユニバーサルデザインの視点	「授業づくりの12のポイント」のうち具体的に何を取り入れ、どのように取り組んだのか記してあります。
成功へのポイント	ユニバーサルデザインが有効に機能するための実施上のポイントやヒントが記してあります。

I ユニバーサルデザインの視点を取り入れた 授業づくりの12のポイント

1 教室環境①「場の構造化」

構造化とは、「いつ」「どこで」「何を」「どのように」行動すればいいのかが分かりやすくするために、目に見える形で提示することをいいます。そうすることで、児童生徒が迷わずに自発的に教室での作業に取り組むことが期待できます。

教室での構造化には、①見ただけで分かるように明瞭に表示する、②空間を目的別に仕切る、③合理的に物を配置するなどの方策があります。

1 「見ただけで分かる明瞭な表示」「合理的な物の配置」

(1) 登校後の「提出箱」と「表示」

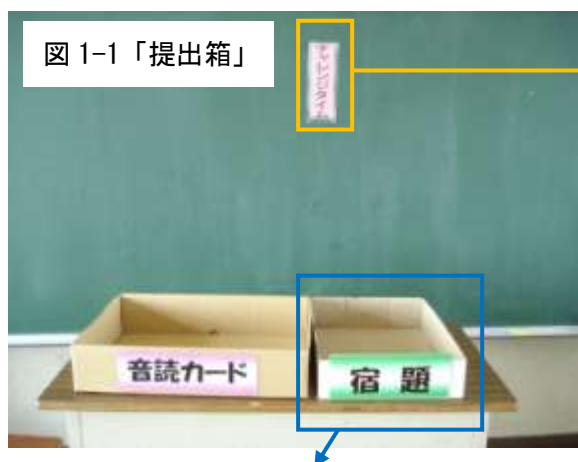
朝、児童が教室へ入った時に、「何を、どこへ」提出するのか、「業前の活動は何か」など一目で分かるように表示します。

①提出物は、児童の目に触れやすい教卓の上に表示をした箱を用意します（図 1-1）

②業前の活動（朝自習、朝会、読書タイム等）は、黒板に掲示します。

こうすることで、宿題を出す際に黒板の掲示に気づきやすく、児童の動きにも無駄がなくなり、合理的といえます（図 1-2）。

仮に提出箱や掲示物が目に入らなくても、周りの児童の動線が同じため、自分から気づき



箱の中に仕切りを作り名簿番号ごとに集めておくと、未提出の児童の確認もスムーズに行うことができます（図 1-3）。

一つ一つ指示を出さなくても子供が自分で判断して行動できる！

教師にとっても児童生徒と挨拶を交わしたり話ができたりするなど、有意義に時間を使えるため、合理的です！



(2) 写真で示す食器の収納の仕方

「皿」「おわん」など言葉によるラベル表示の他に、写真で収納の仕方が掲示してある。



図 1-4 「食器の収納の仕方」

(3) 道具の整理整頓・管理

技能教科では、様々な工具を使用します。使いやすく、管理しやすいように収納にも工夫が必要です。そうすることによって、片づけが苦手な生徒への対応ができ、また、片づけ時間の短縮にもなり、作業する時間の確保につながります（図 1-4）。



図 1-5 「整理された工具箱」



図 1-6 「使いやすい半透明」

＜ポイント＞

- ①工具は班ごとに1つの工具箱に収める。
- ②班の人数に適した数量を用意する。
- ③各工具を工具箱のどこに収めればいいのか分かるように「はめ込み式」にする（図 1-5）。
- ④中が見える半透明でプラスチック製の工具箱（積んでも活用しやすい）（図 1-6）。

＜ユニバーサルデザインの視点＞

「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」

→場と目的、道具と行動等の対応を明確にすることで、「何をすればいいのか」視覚的・直感的に把握しやすくなります。表示や説明を加えるなどに加えて、「場をわかりやすく構造化」する工夫が求められます。

2 目的別に仕切られた空間 ～木工室のレイアウトの工夫～

快適な学習空間は、生徒たちの安全性と学習能率を上げるのにとっても大切なことです。狭くて「作業しにくい」「危ない」などのトラブルがないように、教室のレイアウトに工夫が必要です。

そこで、のこぎりを使用する授業では、教室の前半分をのこぎりの作業場所、後ろ半分を生徒が座る工作机にしました（図 1-7）。

作業場所には、工作椅子を各班 2 個ずつ用意し、各班の作業する位置を指定しました。さらに、のこぎり作業している生徒の向きを全員黒板の方を向くようにしました（図 1-8）。

作業場所の確保ができ、また安全に安心して作業ができます。清掃もスムーズにきれい早く終わることが出来ます。



図 1-7 「のこぎりは教室の前半分」

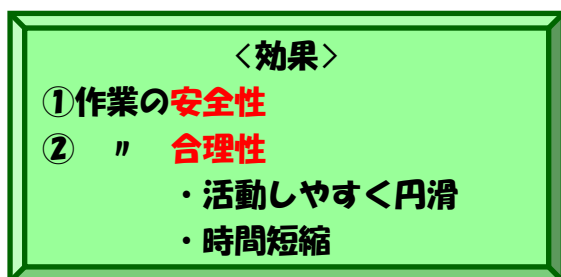


図 1-8 「のこぎり作業の様子」

＜特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果＞

場の構造化は、「**自閉症のある児童生徒への支援**」としてよく用いられる手法です。

自閉症のある児童生徒は、耳から入る言葉による指示や説明よりも、視覚的な情報のほうが理解しやすいことが知られています。また、その都度やり方が変わったり、その場の状況に応じて柔軟に対応したりすることが苦手です。

そのため、場所や道具を手掛かりに、この時には何を求められているのか一目瞭然に示すこと、その方法やルールを一貫して活用することが有効な支援となります。

応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 教室のレイアウト

場の構造化によって、環境の変化が苦手な児童生徒にも、決まった位置や置き場が明確に分かり、安心感が得られます。そのためには、思い切った構造化も必要です。

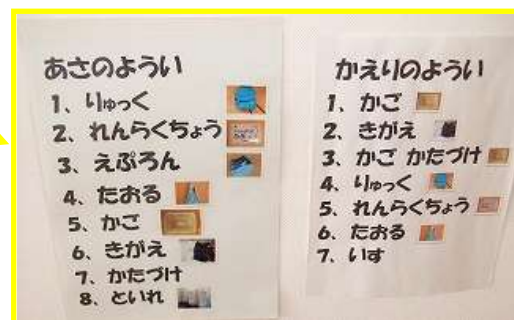


図 1-9 「壁に並べた机の配置」

机の配置も教卓と向かい合わせではなく、あえて壁に付けました。壁面掲示を利用し、活動の流れが分かるようにするための工夫です。



図 1-10 「目的別にレイアウトした教室」

- ・ **教室の前面**：黒板の前に椅子を扇形に並べます。
朝の会・帰りの会に使います。椅子を並べる位置を示すテープが目印です。
- ・ **教室の中央**：長テーブルを配置。
作業や給食など机上を使用する時に使います。
- ・ **教室の後面**：窓際に後ろ向きに机と椅子が並びます。
自立活動の個別課題を学習する場所です。自分で課題を用意し、取り組みます。

2 立ち位置を明確に示す

立ち位置を明確にするために「足型」を置きました（図 1-11）。立つ位置だけでなく、友だちとの間隔も示すことができます。

縦並びにすると、「順番」を学習する教材として利用できます。



図 1-11 「立ち位置を示す足型」

2 教室環境②「刺激への配慮」

集中しやすく、落ち着いて学習に取り組みやすい環境にするには、教室の刺激の量を減らす配慮が必要です。児童の注意をそらしたり大切な情報を分かりにくくしたりする余分な刺激(情報)を取り除き、必要な情報に集中できる分かりやすい教室環境をつくる必要があります。

配慮したい刺激として、①目障りとなる視覚刺激、②不要で不快な聴覚刺激、③影響し合いがちな人的刺激が挙げられます。

1 目障りな視覚刺激の排除 ～見た目もスッキリとした黒板周り～

教室で学習する場合、最も重要な部分は、前面の黒板の周囲です。

どの子も集中できたり、落ち着いたりするためには、黒板への掲示物を必要最小限にします。

黒板の脇にある、時間割表や給食当番表、日直の仕事等の掲示物は、必要な時以外はカーテンなどで隠します(図 2-1)。余分な刺激を取り除き、「今必要で大切な情報」がわかりやすくなるため、落ち着きが増すとともに、集中しやすくなります。

また、子供によっては壁の汚れが気になり集中できない児童がいます。壁の汚れを落として隠したりすることで安定する児童もいますので、意識してあげたいものです。



図 2-1 「カーテンで目隠しした黒板周り」

～教室は心の鏡～

教室環境の美化や机の整頓などは授業への集中を高めるためにも重要です。

教室が乱れてきた時には、児童生徒の中に何らかの問題がひそんでいる可能性があります。「服装の乱れは心の乱れ」という言葉もありますが、教室環境を維持・向上させることは、児童生徒の「心の乱れ」をなくし、学びの場として相応しい環境にするための第一歩だと考えられます。



<ユニバーサルデザインの視点>

「①全ての児童生徒が参加できる授業」

→安心して参加し、授業に集中するためには、第一に不安材料や集中を妨げる要因の軽減又は排除が不可欠です。特に視覚や聴覚など感覚刺激に過敏な児童生徒もいるという前提で教室環境を見直したいものです。

2 聴覚刺激の軽減

椅子や机が床に擦れる音を軽減するために、使い古したテニスボールを脚に取り付けます（図 2-2）。

気が散りやすい児童生徒への対応だけではなく、耳からの情報に頼る視覚障害の児童生徒のために静寂な環境を提供するためにも有効です。



図 2-2 「テニスボールで音を軽減」

3 座席の配慮 ～人的環境～

教室の座席の位置によって、刺激の量は大きく異なってきます。それぞれの座席にどのようなことが余計な刺激になるのか踏まえておくことが重要です（図 2-3）。

また、お互いに刺激し合いやすい児童生徒同士の座席を離す配慮も必要です。

〈集中しやすい座席〉



- ・他の児童生徒からの刺激を受けにくい。
- ・教師から個別のサポートを受けやすい。

- ・刺激が少なく、教師の指示を聞き逃しても、周囲の行動を見本にできる。

〈集中しにくい座席〉



＞窓側
＜

＞廊下側
＜



- ・窓際は校庭の様子や物音に、出入口の近くは廊下の人々の気配に注意をそがれやすい。
- ・特に両端の最前列の席は、黒板の方を向いていても身体が半身になりやすく、他の生徒の様子が視界に入りやすい。

- ・余計な刺激自体は少なく、教師の目も届きやすい。その反面、本児が多弁・多動の傾向がある場合、それが他の児童の刺激となり、教室全体が騒々しくなりがちになるので注意が必要。

図 2-3 「座席の配慮」

1 カーテンやパーティションで区切った個別スペースの確保

集中して課題に取り組むために、カーテンやパーティション等で空間を区切り、刺激量を調整することが必要です。児童生徒が個別学習の形態で取り組むことも必要な場合があります。

どのような環境が落ち着くのか、集中できるのかを把握することも大切です。



図 2-4 「カーテンで仕切られた学習空間」



図 2-5「段ボールを利用したパーティション」
使用しない時には、たたんでしまえます。

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

煩雑な学習環境や学習に不必要な刺激が多々ある状況は、誰にとっても注意・集中の妨げになりがちです。

中でもADHD（注意欠陥多動性障害）の児童生徒は、目や耳から入る様々な刺激の中から不要なものを除き、自分にとって必要な情報に注意を向けること（選択的注意）が苦手です。過剰に刺激を拾ってしまうため、情報を整理し、自己の行動をコントロールすることが困難な状態といえます。それは、決して本人が不真面目であるとか辛抱強さが足りないというのではなく、脳の機能の特性から来るものです。

注意・集中が苦手な児童生徒にとっては、余計な刺激の少ない教室環境、具体的には、すっきりとした黒板周り、静かさなどが、特に注意・集中のしやすい適切な学習環境と言えます。

3 ルールの確立

ルールというと、個人の振る舞いを制限したり統制したりするものと受け取られるかもしれませんが、本来ルールは、集団生活において適切な行動を示し、具体的にどのように振る舞えばよいのかを教えてくれるものです。ルールが不明確な状況は、不要なトラブルを増やしかねません。

ここでは、教室でのルールを事前に分かりやすく示し、みんなで共有する手立てを示します。

1 教室にある共有物品の借用の仕方

忘れ物のある児童生徒に対して、筆記用具の貸出コーナーを教室に設置しました（図 3-1）。

その際、「勝手に借りていかない」や借りる時の「礼儀」などのルールも 1 学期初日に指導しておきます。

また、見える場所に「先生の物を借りる時の約束」を掲示しておくことでルールの定着を図るようにします。



【先生の物を借りる時の約束】

- 鉛筆・消しゴム・定規・赤鉛筆・鉛筆削りは、休み時間に借りに来ること。

*** 注意！授業中に借りに来ないこと！**

- 鉛筆が削れていないときには、休み時間に必ず削っておくこと。

- 必ず先生にことわってから借りること。

借りる時 → 「○○を忘れたので、貸して下さい。」

返す時 → 「ありがとうございました。」

*** 鉛筆は削って返しましょう！**

*** 先生がいない時には、机の上にメモを置いて借いましょう。**

- 1日使用する場合には、その日の授業が終わってから返しにくること。

図 3-1 教室の共有文具と借用のルールの掲示

<ユニバーサルデザインの視点>

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→その場その時の状況に応じた適切な対応ができない場合、「ふざけている」「怠けている」と決めつけず、もしかして「状況理解が不十分だからでは」と考え、わかる工夫を凝らしましょう。

2 授業中の発表・発言の仕方

(1) 声の大きさ

小学校低学年のうちは、声の大きさなど自分で意識しやすいことから、状況に応じた適切な発言の仕方を学ばせたいものです。

図3-2のような「こえのもののさし」は、教室でよく掲示してありますが、掲示するだけでなく、機会があるごとに活用し、ルールを徹底することが何より大切です。



図3-2「こえのもののさし」

(2) 発言・発表の仕方

自分の意見や感想の「発表の仕方」を共通の型として決めておきます。

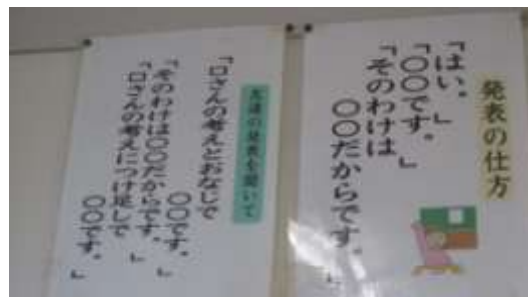
～小学校～

- ① 気持ちや感想を発表する場合は、全員が必ず一回は発言をする。
- ② 挙手は、意思表示として真っすぐに手を伸ばす。
- ③ 「はい」と返事をしてから話し始める。
- ④ 聞き手は、「はい」の合図とともに、発表者の方を見て聞く。
- ⑤ 語尾まで「はっきり」と話す。
- ⑥ グループ学習の場合は、予め順番を決めて提示しておく。



～中学校・高等学校～

- ① 「結論が先」
- ② 「ナンバリングとラベリング」
- ③ 「具体例を提示」
- ④ 「不要に繰り返さない」
- ⑤ 「簡潔な説明」



～教師がモデル～

教師自身が大声を出さずに穏やかに話すことで、生徒たちも穏やかに語り出すことが期待されます。騒々しい場面であっても、不必要に大きな声で教師が「叫ぶ」のは、かえって逆効果だと考えます。「～をしなさい」などの命令口調ではなく、穏やかに話すことで、生徒に「自分は尊重されている」という安心感を与えることができます。

時間どおりに授業を終わらせることは、重要です。生徒へのマナーとして時刻を守るのが教員として重要となります。



3 話の聞き方

(1) 話の聞き方～小学校～

相手の「話を聞く」、内容を正確に「聞き取る」ためには、単に受け身ではなく、自分から聞き取ろうとする主体的な構えを作ることが大切です。

そのために、話は、耳だけではなく「手」と「目」と「心」で聞く習慣を付けることが大切です。

【話は、耳だけではなく「手」と「目」と「心」で聞く！】

- ①姿勢を正す（背筋を伸ばす）。
- ②手はひざに（【手】筆記用具を一旦手放す）。
- ③顔を相手に向ける（【目】相手を見る）。
- ④集中して聞く（【心】）。

(2) 話の聞き方～中学校・高等学校～

板書をノートに書き写したり、問題を解いたりする際に、今は「書く時間」なのか「聞く時間」なのかを明確にすることも必要です。板書を書き写し終わる、問題を解き終わるなどしたら筆記用具を置かせるというルールを作り、全員が置くまで次の説明を始めないといったような工夫も効果的です。

～「聞く時」は聞く～

- ・教師の話聞く時は、聞くことに専念する（その間は、板書を書き写さない）。
- ・板書を書き写し終わったら、筆記用具を置く（それまでは次の説明に入らない）。

(3) 書く時の姿勢や鉛筆の持ち方～小学校編～



図 3-3 「書き方のルール」

応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 手順・行程や内容の明確化

(1) 掃除の仕方～行動を視覚的に示す～



図 3-4 「テーブルの拭き方」

周辺から中心に向かって円を描くように雑巾で拭き取る動きを教えるための補助線です。

常にこのテープが必要というのではなく、初めに手順を明示するために使用することがポイントです。



図 3-5 「雑巾の絞り方」

掲示するだけではなく、必ず教師が持ち方や絞る動作を見本で示しましょう。児童生徒が後で確認するため用いるなど、用途をはっきりさせましょう。

(2) 作業の工程～手順を明示する～

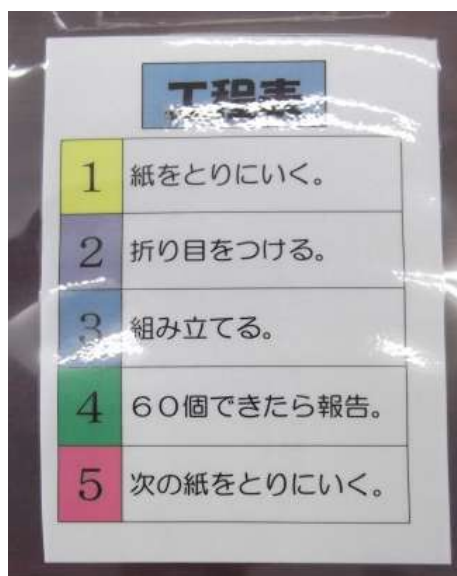


図 3-6 「作業の工程表」

作業工程の内容と手順を明示します。



図 3-7 「めくり式の朝の会の進め方」

学部によって、統一した絵やマークを活用しています。

（３）日常生活のルール

教室での守るべきルールを覚えることが環境づくりの一步です。こうしたルールを簡潔に文章・図式化することで、誰にも円滑な活動が可能となります。ルールの遵守は、社会性や規範意識の向上にもつながり、全員が理解した上で遵守できる環境づくりが大切です。

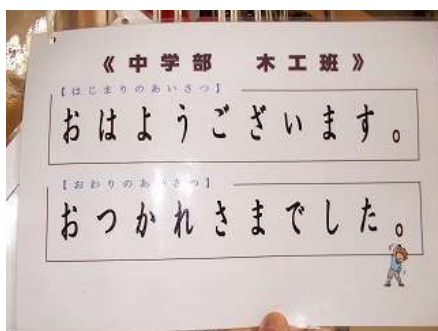


図 3-8 「あいさつのルール」
(教室入口に掲示→意識づけ)



図 3-9 「道具使用のルール」
(使用道具に貼り付けて、
教員が声がけ→確認作業)



図 3-10 「日常生活のルール」
(教師による提示・声がけ→
習慣化)



図 3-11 「聞く姿勢を『手形』で」
話を聞く時に、手を置く場所
を示しています。手を置く位置
を明確にすることで、聞く姿勢
をとることができます。

＜特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果＞

ルールは、集団生活に規律を与え、みんなが過ごしやすいするためにあります。

ところが、**自閉症**のある児童生徒は、その場の雰囲気や暗黙のルールを読み取ることが困難なために、時に場違いで突飛とも思える行動をとってしまうことがあります。

また、**ADHD（注意欠陥多動性障害）**の児童生徒は、衝動性が高いという特性から、「授業中に出し抜けにしゃべる」など気が付いた時にはルールをはみ出ていることがあります。

いずれも、事前にルールを明確に示すことで曖昧さを排し、「その場・その時」に何をすればよいのかはっきりと自覚を促すことで、適切な行動を取りやすくなります。そのためには一度決めたルールは、徹底させることが大切で、児童生徒の安心・安全につながります。

4 生活の見通し

児童生徒が主体的に判断し、意欲を持って行動するためには、生活に見通しが持てることが重要です。「これから何をすればいいのか」「自分は今、何に向かっているのか」を視覚的にわかりやすく示すことが大切になります。

また、「提出物などの忘れ物はないか」など、重要な事項を記録したり確かめたりすることも大切な生活の力です。一日のスケジュールや一週間の予定などを自己管理し、生活の見通しを持たせるための工夫やアイデアを示します。

1 一日の予定

学期ごとに時間割が決められていても、学校行事等でその日の朝に、急な変更を余儀なくされることがあります。

そこで、朝のうちに、一時間ごとの教科、授業を行う場所を児童の目に付きやすい**黒板脇に表示**しておくことで一日の生活の流れに見通しを持たせることができます（図4-1）。

一つ一つの各教科のカードに磁石を貼っておけば、取り外しも簡単で、いちいち書く手間がいりません。

磁石付きのホワイトボードの活用も有効です。取り外しができるため、黒板を使用する際は、ホワイトボードごと別の場所へ動かすことも可能です。

一日の見通しが持てるために、休み時間のうちに次の時間の準備をすることもでき、授業への取り組みもスムーズになります。



図4-1「黒板脇に取り付けられる
磁石付きのホワイトボード」



図4-2「収納ケース」

一つ一つのパーツを収納する半透明のケース。

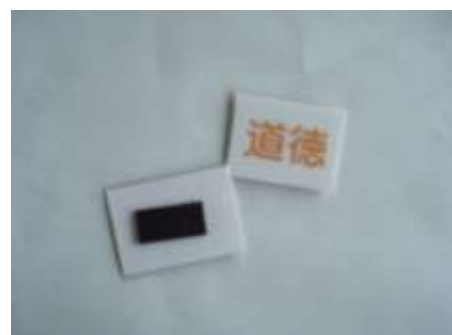


図4-3「予定のパーツ」

裏に磁石を付けておけば、取り外しが簡単。各パーツはラミネートしておけば丈夫で、毎年使えます。

2 カレンダーの活用

9月						
日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14 応援練習	15
16	17	18	19	20	21 応援合戦	22
23	24	25 学年練習	26	27 予行	28	29 運動会

力を合わせてがんばろう、3組！

図 4-4 「カレンダーの活用」

3 メモ帳やノート、手帳の活用

メモ帳やノート、ビジネス手帳を活用することが考えられます。見通しを持たせ、忘れ物を防ぐ効果が期待できます。手帳に予定を書き込むだけでなく、頻繁に活用することで便利さを実感できることが重要です。

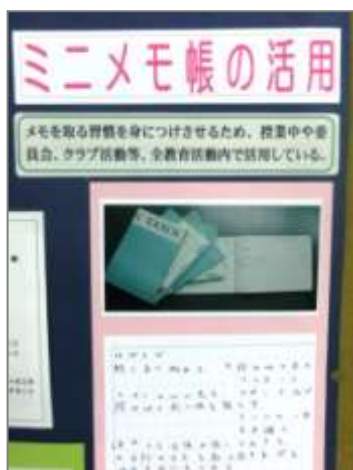


図 4-5 「ミニメモ帳（小）」

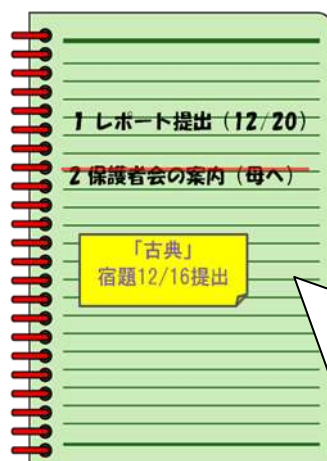


図 4-6 「ノートの活用」

- ・ ノートにメモを書き込むことから始めます。
- ・ 初めは「重要な事項」のみ。
- ・ 終わったら、赤線 で消す。記録が残るので、後日、「遂行したのか、しなかったのか」など確認できます。
- ・ 赤線 を引くことで、達成感を得やすく、励みにも。
- ・ 筆記が苦手な児童生徒には、メモを記した付箋紙を個別に渡すことも必要な支援です。

<ユニバーサルデザインの視点>

「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→時間を意識し段取りよく行動するには、時間の見通しを持つことが必要になります。その意識を高め、必要に応じて確認できるように、視覚的に情報を整理して提供したいものです。

応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 一日の流れ

落ち着いた生活を送る上で、学校生活に見通しを持たせることは大切です。一日の流れと活動の場所を写真で示し、一目で理解できる工夫をします（図 4-7, 図 4-8）。こうした工夫は、教員の指示の軽減や児童生徒の不安を減らすためにも必要です。



図 4-7「スケジュール表（黒板掲示タイプ）」



図 4-8「スケジュールボード」

2 カレンダーの発展・応用



図 4-9「時間の流れを実感できるカレンダー」

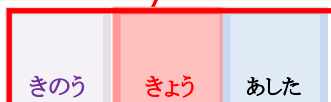
(1) 差込式の日付カード

カレンダーのセルがビニールのポケットになっており、そこ予定を書き込んだカードを差し込む。

予定の日に、日一日と向かっていることを実感しやすいように、帰りの会でカードを抜いていく。

(2) 「昨日・今日・明日」の枠

言葉の使用と合わせて、日が進むことを実感しやすいようにする工夫のひとつ。枠を上からはり、一日ごとにずらして使う。



<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

自閉症のある児童生徒は、これから起こることの予測がつかない状況や急な予定変更に対して不安を感じやすく、時に混乱するなど、大きなストレスを感じます。そうした不安やストレスを軽減し、生活の見通しを持たせるためには、「事前の予告」をすることが重要になります。その際に、言葉による指示だけではなく、スケジュール表や行動の手順表、板書や写真などのように「視覚的」に示すことがポイントです。

5 授業の見通し

授業のめあてや流れを明示することで、見通しを持って授業に臨むことができ、主体的な学習が期待できます。

学習活動の始まりと終わりを明確に示し、いつまでに何をするのか、どこまでやれば終わりのかなど、具体的に示すことがポイントです。

1 授業のめあてや流れを視覚化する

(1) 授業のめあてや流れを示す

黒板の端や小黒板、ホワイトボードなどに授業のめあてや流れを掲示します。本時の課題は何か、今は何をしているのか、次に何をするのかなど流れが分かると安心できます（図 5-1）。

(2) 「今、流れのどこにいるのか」を示す

【→】や【いま】や【おわったら】などのマークを活用します。

また、黒板に教科書のページを示したり、学習活動を示すマークを活用したりすると授業の見通しが持ちやすくなります（図 5-2）。



図 5-1「授業の流れの掲示（中：技術）」



図 5-2「学習活動を示すマークを活用した黒板（小：算数）」

<ユニバーサルデザインの視点>

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→児童生徒の学習への意欲や努力を持続させるためには、目標や目的を目立たせ、時間の見通しが持てるための工夫が大切になります。

2 作業終了を予告するアラームによる時間表示（中：技術）

生徒は、作業に熱中してしまうと時間を忘れてしまうことがあります。また、途中で作業を終わらせることはなかなかできません。

そこで作業5分前になったらアラームを鳴らすことを予告します。そうすると生徒は、切りのいいところで作業を終わるようにしたり、少しペースを上げたりします。また、5分後にすぐやめられるような作業内容に切り替えたりして、作業終了時刻には、ほぼ全員終われるようになります（図5-3）。



図5-3「作業終了を予告するアラーム」

教師からの「早く終わりにしなさい」という余計な指示もほとんど必要ありません。慣れてくると、終了アラームの合図で片付けや掃除を自発的に取り組みます。



3 個人作業進度表

個人作業進度表は、今どこまで作業が進んでいるか確認するものです。

例えば、木工でいうと設計（4時間）、けがき（4時間）、加工（4時間）、組み立て（4時間）、仕上げ（2時間）と計画を立て、クラス名簿の上段に作業工程を記入します。

木工室に作業進度表を掲示しておき、生徒は各作業が終了したら●印をつけます。生徒は、今どこまで作業が進んでいるのか、あとどれくらいの時間があるのか、次に何をすればいいのか確認できます（図5-4）。

	氏 名	設計		けがき		加工		組立て		仕上げ
		10/4	10/11	10/18	10/25	11/1	11/8	11/15	11/29	12/6
1		●	●	●	●	●	●			
2		●	●	●	●					
3		●	●	●	●	●	●	●		
4		●	●	●	●	●				
5		●	●	●	●	●	●			
6		●	●	●	●	●				

図5-4「進捗状況が見える作業進度表」

教師も全体的な進度も確認でき、特に遅れている生徒に対して具体的な個別の支援が容易になります。



4 授業プリントやノートを活用

児童生徒に配布するプリントや授業ノートには、授業の見通しを持たせる効果があります。

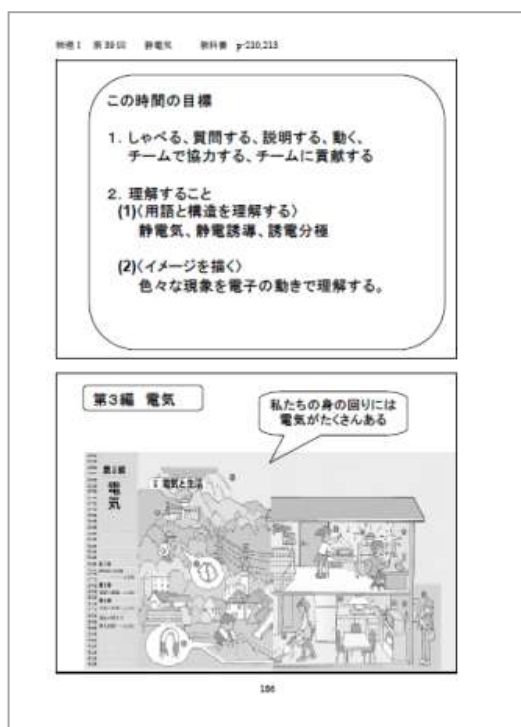


図 5-5「次時の予告（高：物理）」

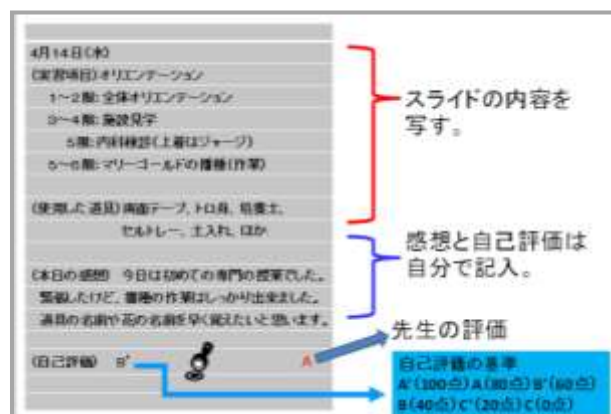


図 5-6「学習記録ノートの活用（特：作業学習）」

学習に効果的なポイントは、繰り返し活用する習慣をつけることです。

記入することが目的になるのではなく、忘れたら手帳を見返す習慣をつけることが大切です。生徒が「使って便利！」と実感できるようにしましょう。

次回の授業で使用するプリント資料を配布し、内容を予告します。

生徒の興味・関心を引き出し、見通しと意欲を持たせて授業に臨むことができます。

教科書のページも記すことで、予習もしやすくなります。

5 年間指導計画やシラバスの活用 ～授業の長・中期的な見通し～

年間、単元、単位時間など、長期的及び短期的な観点から授業の見通しを伝えていくことは、生徒側の学ぶ準備をしやすくなります。年間指導計画を示す、シラバスを有効活用するなどといったことが具体的な策としてあげられます。

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

自閉症のある児童生徒は、相手の話す意図や要点を正確につかむことが苦手です。また、これから起こることの予測がつかないと不安に感じやすく、学習にうまく取りかかれないことがあります。そのため、授業のめあてや流れを“授業の前”にはっきりと示すと安心して授業に取り組めます。

ADHD（注意欠陥多動性障害）の特性の一つに「不注意」があります。不注意による指示や説明の聞き漏らしのために「今、やるべきこと」を見失ってしまい、授業についていけなくなることがあります。そこで、「授業の流れと“今”」がわかる工夫はADHDの児童生徒にとっては、大変に有効な支援となります。

1 学習活動を視覚的に示す

授業の流れ、活動の手順をイラストや写真、実物など視覚的に示します。導入の説明だけに使用するのではなく、活動の途中に児童生徒が自分でやり方を確認したり、授業の振り返りに使用したりと繰り返し活用することがコツです。



図 5-7 「活動の手順をイラストで示す」

2 学習の流れを個別に示す

ホワイトボードを活用し、授業の流れを自分で確認しながら学習を進めます。

写真やイラストカードを用いるとより効果的です。

終えた課題のカードを外していくことで、見通しと達成感が得られます。



図 5-8 「個別の予定表」



図 5-9 「イラスト入り」

3 時計やタイマーの活用

活動の終わりを示すため、時計に目印をつけて読みやすく工夫したり、タイマーを活用したりします。

タイマーは、残り時間が「量」として把握できるタイプもあります。



図 5-10 「残り時間が“見える”タイマー」

6 授業の組み立て

授業を展開する上で配慮したい点として、①教科の特性に応じた一定の型があること、②活動にメリハリをつけること、③活動の区切りを明確にし、複数の活動を同時に行わないことなどが考えられます。

1 一定の型があり、活動にメリハリのある授業の構成

(1) 型のある授業（小：算数）

単元が変わると授業の見通しがもてなくなる児童がいます。

そこで、教科の特性に応じて授業に一定のパターンを作ります。

特に、低学年では集中できる時間に限度があり、45分の授業を10～15分の活動を組み合わせて構成すると、じっと座っていることが苦手な児童も授業に参加しやすくなります。

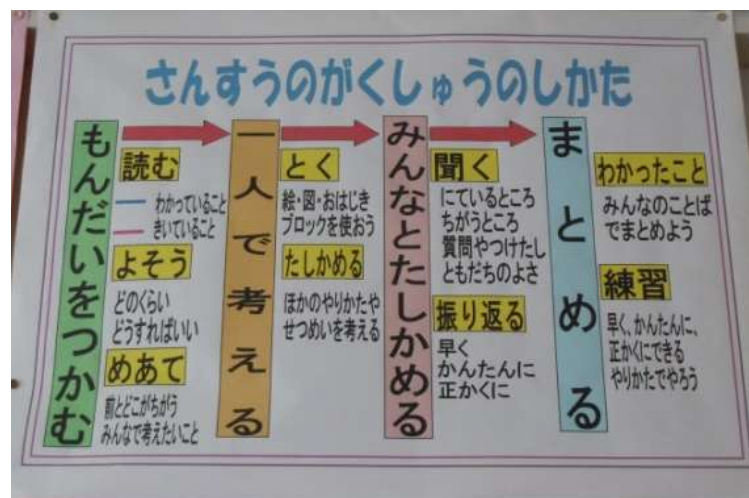


図 6-1「毎回、一定の流れで進む授業のスタイル（小：算数）」

(2) 型のある授業（高：物理）

65 分の授業を3つの段階に分けて実施。

- 1 説明(15 分)」
- 2 問題演習(35分)
- 3 振り返り(15 分)

生徒の主体的な学習や自発的な行動変容を実現するための授業プロセスであり、教師の役割の設定もできる。

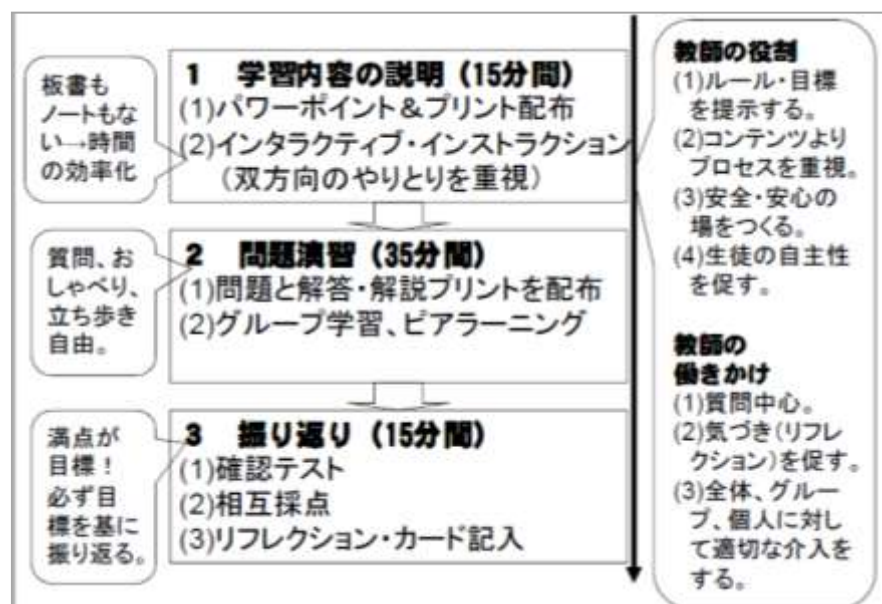


図 6-2「一定の流れで進む授業のスタイル（高：物理）」

(3) 型のある授業 ～小テスト～

授業に小テストを取り入れることも工夫の一つです。

授業の最初に復習テスト、最後に確認テストなど一定のパターンがあることで、生徒は授業の見通しをつけやすくなるだけでなく、それに向けて、主体的に学習に備える習慣が定着します。

2 「聞く活動」と「他の活動」は、時間を区別する

多くの児童生徒は、同時に2つ以上の活動をすることは困難です。特に、説明を聞きながら板書をノートに書き写すことは、大人が感じているよりも難しいものです。

そこで、授業では「説明を聞く場面」と「ノートをとる場面」を区別することが大切です。説明を始める前に、ノートを書き写す時間を与えることを予告しておくといよいでしょう。

また、児童生徒に音読や計算、作業などの個別の活動に取り組ませている最中は、基本的に全体への指示は控えます。やむを得ず補足説明をする場合は、机間指導の途中に教室の後ろから話し始めるのではなく、黒板の前の定位置に立ち、いったん活動を中断させてから指示を出します。

<ユニバーサルデザインの視点>

「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→授業そのものを構造化すること。一定の型があることで授業の見通しを持ちやすく、主体的に授業に取り組むことができ、わかりやすさにつながります。

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

自閉症のある児童生徒は、新しい場面や不慣れな状況に置かれた時に、状況に応じて「どのようにふるまったらいい」のかわからずに、多くの不安を感じてしまいます。

例えば「いつもと同じ道を通らないと気がすまない」「着替えに“融通の利かない”一定の手順がある」などの「こだわり」や儀式的とも思えるパターン行動があることが知られています。それは、その場その場の状況判断が苦手という障害特性からくるものです。

このような特性があるため、授業の流れや手順に一定の型があると、この先は何をすればいいのか見通しが持ちやすく、安心して授業に臨めます。

応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 課題ボックスの活用

1時間の学習の流れが分かり、全体を把握できるように、カラーボックスを使った課題ボックスを作成しました（図6-3）。

1つのカゴに1つの教材を入れておきます。児童がカゴを自分で取り出し、課題に取り組みます（図6-4）。課題が終わると、カゴの向きを逆にすることで「おわり」が表示され、学習の進み具合が確認できます。また、児童の主体的な学習への取り組みを引き出すことができます。



図6-3「課題ボックス」

カラーボックスの棚をそれぞれ2段に区切ること、6つの収納スペースができました。カゴと学習活動が1対1対応しているので、見通しを持って取り組みます。

自分から課題ボックスに教材を取りに行きます。

上の段から順番に取り組みます。



図6-4「課題ボックスを活用して実際に取り組む様子」

2 学習の流れ ～動機付けを高め達成感の得られる展開の工夫～

見通しと意欲を持って取り組めるような展開となるようにします。最後は必ず「できた！」と達成感が持てるようにすることが大切です。

授業の展開を、「導入課題」「主要課題」「作業課題」「終了課題」とモジュール化しています。

展 開	内 容
導入課題	得意な課題や容易にできる課題。
主要課題	認知や情緒の発達を引き上げる課題や個別の指導計画で設定した主要課題。
作業課題	主要課題を応用させ、実生活に生かし、将来に役立つような技能的スキルを取り入れた課題。
終了課題	得意な課題やできる課題。満足感を持って授業を終了できるようにします。

図6-5「学習課題の展開例」

7 板書の工夫

板書の目的は、視覚に訴え、思考を深めることにあります。そのままでは消えてしまう言葉のやりとりを板書の形に整理することで、児童生徒の思考の拠り所となります。

ポイントとして、①「めあて」が明示してある、②授業の全体像と流れが視覚的に把握しやすい、③今、何を学習しているのか明確となっている、④適時確認でき、振り返りができる、⑤見やすい、などが挙げられます。

1 分かりやすい板書



図 7-1 「道徳（小）」

- ・イラストを用いることで場面がイメージしやすい。
- ・心情を表す言葉に ♥ マークを付けました。



図 7-2 「学級会（小）」

- ・「課題」や「めあて」が簡潔・明快に示されています。
- ・話し合う時間を視覚的に提示しています。決められた時間の中で効率的な話し合いを進めるための配慮の一つになります。



図 7-3 「技術（中）」

- ・作業の留意点やポイントの掲示と本時の「課題」「手順」等がバランス良く配置されています。
- ・生徒が作業の最中に必要に応じて適時、確認できます。

2 表札やマークの活用

授業の展開を表す表札やマーク等の掲示物を効果的に活用することで見やすくなり、理解が促されます。



図 7-4 「算数（小）」

・本時の「めあて」が赤チョークの枠で囲まれ強調されています。それと同時に「課題」の表札（マーク）も併用し、多様な情報の提示となっています。

・内容ごとに「課題」「問題」「予想」「自分の考え」の表札（マーク）が効果的に使われ、「全体と今」が把握できます。

〈学習活動を示すマーク（例）〉

めあて

例題

話し合い

発表

まとめ



ノートに書き写す箇所を示す

〈教科書や資料を示すマーク（例）〉

教 p. 35



〈注意を促すマーク（例）〉



注意深く聞きましょう！
（静かにしましょう）

図 7-5 「マークの例」

3 板書は「残す」が原則

一度書いた板書は、途中ではできるだけ消さないのが原則です。本時の「めあて」や重要な文章は、必ず残しておきます。

しかし、どうしても消さなければならない場合は、黒板を半分に区切り、必ず半分は残すようにします。特に書き写すことが遅い児童生徒には、必要な配慮です。

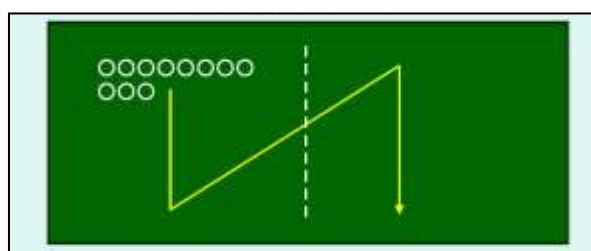


図 7-6 「黒板を区切り、半分は残す」

4 ホワイトボードの活用

ホワイトボードや小黒板を有効に活用します。特にホワイトボードは、見るべき箇所が目立つため、定義やまとめを整理するのに有効に提示できます。

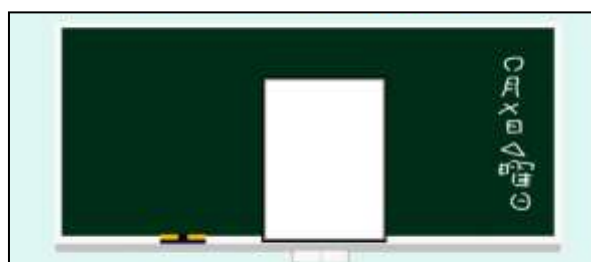


図 7-7 「ホワイトボード（小黒板）の活用」

5 チョークの色

誰でも識別しやすい配色で構成し、色以外の情報も加える工夫をしましょう。

チョークは、白と黄を主体に使います。基本は白、重要語句は黄とすると良いでしょう。

あえて、他の色を使う場合は、アンダーライン、囲みをつけるなどの色以外の情報を加えます。強調や採点、枠など補助的に使用するように心掛けます。

○識別しやすい色	× 識別しにくい色
・白と黄は、 見えやすい	・赤・緑・茶・青は、 見えにくい
・基本は白、 黄は重要語句に	・できるだけ避ける

図 7-8 「分かりやすいチョークの色」

～色覚にかかる指導のあり方～

学校に在籍する男子の5%、女子の0.2%に「色覚異常」があるとされています。

現在、学校における児童生徒等の定期健康診断の必須項目から色覚検査は削除されていますが、「色の見分けが困難な児童生徒がいるかもしれない」という前提で、適切な対応が求められています。

1. 板書

- ・板書は明るさが均一になるように照明を工夫します。
- ・黒板は常にきれいな状態に保ちます。
- ・白と黄のチョークを主体に使います。
- ・あえて、白と黄以外の色チョークを使用する場合には、アンダーラインや囲みをつけるなどの色以外の情報を加えます。

2. 掲示物・スライド・OHP・コンピュータ

- ・グラフ・図表は、なるべく少ない種類の色で構成し、形、大きさ、模様、明暗などの色以外の情報を加えます。
- ・文字と背景の色には、わかりやすい組合せの色を使用し、明暗のコントラストがはっきりわかるようにします。

3. 地図

- ・地図に使用されている色分けはことばで説明します。

4. 採点・添削

- ・細字の赤ペン・ボールペンは避け、色鉛筆などの太字の朱色を使用します。

5. 実験・実習

- (1) 化学反応：色の変化の程度が判断できるように、文字で表現するなど工夫します。
- (2) 観察・表現：植物の観察などでは、花などの位置と色を具体的に示します。

6. 造形的な表現活動

- ・図画工作などでは個々の見え方や感じ方を大切にし、創造的能力を高めるようにします。

7. 教科・科目の評価・評価

- ・評価・評価は、指導過程全体にわたって総合的に行い、児童生徒の学習意欲を高めるようにします。

〈文部科学省「色覚に関する指導の資料」から抜粋〉

6 様々なメディアの活用

板書の他に、パソコンソフトを活用したプロジェクターや実物投影機、VTRなどICT機器を使用し図解すると効果的です。

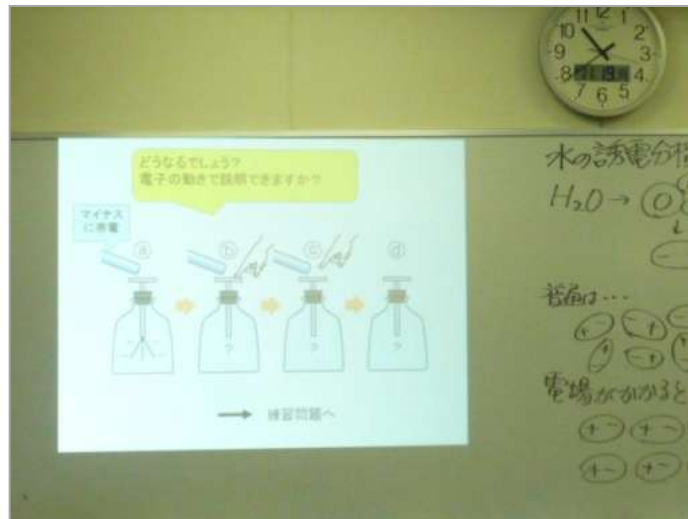


図 7-9 「プロジェクター」

書画カメラで良い例と悪い例を撮り、大型テレビに表示します。そこでなぜ良いのか、なぜ悪いのか考えることができます。

また、書画カメラの拡大機能を使い、のこぎりの刃を拡大して表示し、刃の観察をすることができます（図 7-10）。

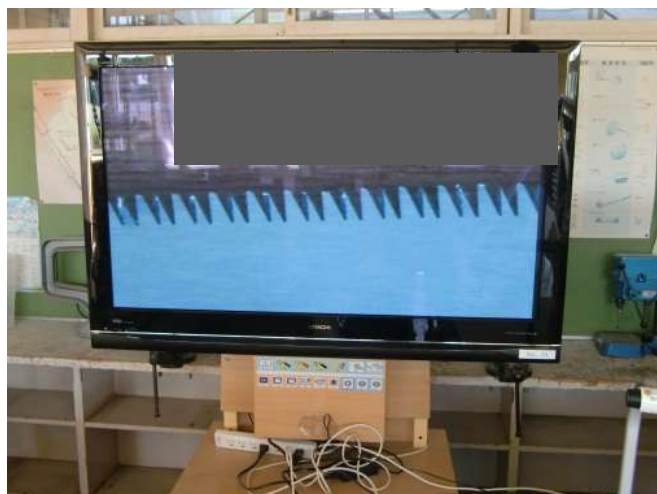


図 7-10 「実物投影機」

<ユニバーサルデザインの視点>

「①全ての児童生徒が参加できる授業」

「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→話し言葉だけでなく視覚情報を適切に添えることが重要となります。黒板はそのための基本ツールです。黒板以外にもICT機器を効果的に活用するとよいでしょう。

応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 パネルシアターとプロジェクターの活用

ここでは、板書の代わりに活用する視覚的に提示する方法について取り上げます。

一つは、板書代わりとしてのパネルシアターの活用です。場所を選ばず使用でき、活用の自由度も高く、工夫の仕方次第では黒板の補助的な活用ができます(図 7-11)。

もう一つは、スクリーン設置が難しい教室でプロジェクターを使用する場合には、白模造紙等をスクリーンに代用できます(図 7-12)。



図 7-11 「パネルシアター」



図 7-12 「プロジェクター」

～視聴覚教材やICT教材の効果的な活用～

自閉症児の中には、テレビのCMの一節の台詞やメロディをすぐ覚えて口にする児童生徒がいます。テレビやビデオは、彼らにとって効果的な教材と言えそうです。

では、テレビやビデオのどのような特徴が効果的に働いたのでしょうか。

1) 注意を向ける範囲が限定されているため注目しやすい

- ・画面で区切られているため、「どこ」を見るのか明確になる。
 - ・映像も音も同じ方向から届くので集中しやすい。
- (360度どの方向から飛んでくるか分からない授業中の音声は注意を払いにくい)

2) 映像と音声の調和

- ・特徴的で覚えやすい映像と音(声、メロディー、ナレーション)が一体化している。

3) 繰り返し

- ・重要なフレーズを繰り返し目に耳にする。

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

自閉症の認知特性に「視覚優位」があります。これは、話し言葉による音声情報よりも、文字や絵、写真などの視覚情報のほうが記憶に残りやすく理解しやすいというものです。

また、ワーキングメモリの働きが弱い児童生徒にとって、視覚情報は記憶や思考の助けになります。ワーキングメモリとは、情報を処理する際に使われる記憶のことです。例えば、教師の話を理解するには、聞きながらその内容を少しの時間覚え、頭の中で整理する必要があります。また、暗算では、それぞれの桁の数を足しながら、繰り上がりの数を覚えておく必要があります。このように記憶や思考などの認知的な活動を行う際に、消えてなくなる音声情報だけではなく、“残る”視覚情報を提示することは、有効な支援となるのです。

8 集中・注目のさせ方

聞き漏らしを無くし、学習に集中させるためには、注意を喚起し、児童生徒自らが対象に意識を向けることが大切です。

それには、不注意な児童生徒にその都度、個別に注意を促すのではなく、何より本人の「聞く構え」を育てることが重要になります。

具体的には、①注意を促す指示や合図が明確であること、②ルール化すること、③自ら意識が向けられた時を逃さずにほめること、④授業そのものが魅力的であること、などが挙げられます。

1 注意を促す指示や合図が明確であること

(1) 注意の喚起

児童生徒の注意を引きつけるには、以下の4点に留意しましょう。

- ① 注意を喚起し、② 視線を引きつけ、③ 一旦、手を止めさせ、④ 姿勢を正す



- ① 「はい、注目」
- ② 「顔を上げて、先生の方を向きます」
- ③ 「鉛筆を置いて、手をひざに置きます」
- ④ 「背筋ピンと伸ばしましょう」

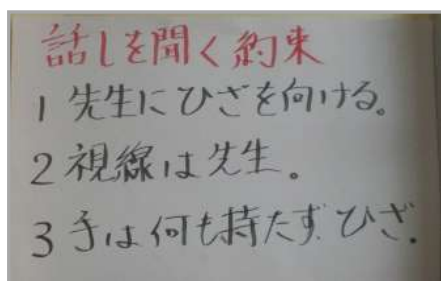


図 8-1 掲示「話を聞く約束」



図 8-2 「話は『聞く構え』ができてから」

<ユニバーサルデザインの視点>

「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→一度に複数の情報処理は誰にとっても優しいものではありません。今、重要となる情報源に児童生徒自ら注意を向けることで集中して、情報がキャッチできるのです。

（２）場面や教科ごとの工夫

ア 教室一般

机の上に余計な物があると集中力が欠け、注目の妨げになる可能性があります。話を聞く構えを作る環境設定として、**不必要な物は机の上に置かず**に片付けさせることです。

イ 理科室や技術室、家庭科室などの特別教室

一つのテーブルにグループで座る特別教室の場合、教師の話聞くときは、何も手に持たせず、教師にひざを向けさせます。こうすることによって、先生の話を中心して聞くことができます。

ウ 体育や学年集会

話を聞く約束として、体育座り（ひざを抱えて座る）をして、つま先を話している相手に向けさせます（図 8-3）。



図 8-3 「話を聞く姿勢」

（３）一斉指示は「同じ立ち位置」で話す

一斉指示を出す場合、必ず同じ立ち位置で話をするようにします。



机間指導の最中に教室後方から補足・追加の指示を出すことは避けましょう。

児童生徒にとって、誰に向けて話し掛けているのか分かりにくく、自分から注意を向ける構えが作りにくくなるからです。結果、聞き逃しが多くなります。

指導が積み重なると、教師が教壇の定位置に立つだけで児童生徒は、「話を聞く場面だ」と理解し、教室が静まるようになります。

２ ルール化する

注意・集中が必要な場面で児童生徒自らの判断で「聞く構え」を作り、その時に適切な行動ができるようにする手立てとして「ルール化」があります（p. 00 「３ ルールの確立」参照）。

**聞く時は聞く
書く時は書く**

- ・ 教師の話聞く時は、聞くことに専念する（その間は、板書を取らない）。
- ・ 板書が終わったら、筆記用具を置く（それまでは次の説明に入らない）。

３ 自らの気づきを育てる ～意識が向けられた時を逃さずにほめる～

必要な時に自分から対象に意識を向けることができる。これは、とても大切な指導です。

環境設定だけでなく、教師の関わりがポイントです。気づく状況を整え、「できた時」を逃さずにほめることです（図 8-4）。

授業開始の挨拶の時、いつまでもお喋りが止まらないA君



先生：「うるさい！ 静かにしなさい！ 何度言ったら分かるの！」（叱）

先生「はい、鉛筆を置いて、先生に顔を向けましょう」（注意を喚起）

児童：（まだ数名が、お喋りを続けている）

先生「……（沈黙、全員が注目するまで待つ）」（児童の気づきを待つ）

「C君、黙ってしっかり前を向いているね！」（できている児童を指摘）

「Bさんもいい姿勢ですね。背筋がピンと伸びている！」

A君：（次第に静まっていく雰囲気とほめられる友だちに、ようやくここで気づく）

先生「おっ、A君も集中できているね！」（できたことをほめる）



図 8-4 「気づきを促す関わり方（例）」

4 授業そのものが魅力的であること

集中しやすい環境を整備や視聴覚に訴える教材の有効活用は、授業のユニバーサルデザインにおいて大切な要素です。

しかし、最も大切なのは授業そのものが魅力的で、児童生徒が面白いと感じられることです。そして、「分かった」「できた」という手応えが得られること。これこそが本当に授業のユニバーサルデザインといえるでしょう。

授業に興味を持たせ、児童生徒の授業への参加を促すポイントは、「10 参加の促進」の項を参照してください。

～沈黙もメリハリの一つ～

教師の声がずっと流れている教室。あるいは「ハイ、ハイ」という挙手をしながらアピールをする声が絶え間ない授業。一見「活気ある授業」にも思えますが、果たしてそうでしょうか。視点を変えると「メリハリの無い授業」とも考えられるのではないのでしょうか。

例えば「3分間黙って作業します」とか「3分経ちました。できた人は黙って手を挙げなさい」など、静かに行動させ沈黙の時間を確保した上で、分かったことや自分の意見を明確に話させます。そうすることで、授業中の「音」に静と動のメリハリが出ます。

話を「聞く」ことを重視するには、そのコントラストとして音が消える「沈黙の時間」があることも必要です。「静」が確保できるからこそ、元気に答える場面、「動」としての教師の話がより引き立つのです。

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

ADHD（注意欠陥多動性障害）は、「多動性」「衝動性」「不注意」の3つを主な特性です。症状の現れ方には、3つのサブタイプがあります。

- ①多動性・衝動性と不注意を伴う「混合型」、②多動が目立たない「不注意優勢型」、③じっとしていられない「多動・衝動性優勢型」です。

①と③の多動性の傾向のある児童生徒には、授業の始まりに姿勢を正すあるいは教科書ノート等の学習用具を隣席同士で確認するなど「体の動きを伴う指示」を出すことも効果的です。これらのことは学習のルールとして、学級内の児童生徒に明確に伝えておく必要があります。

すべてのタイプに、「聞き漏らし」や「取りこぼし」などの行動上の問題が現れやすいのですが、そのことを「叱責」するのはかえって逆効果です。注意を促す効果的な指示や合図を決めておき、注目させ、出来たことをほめ、強化することが大切です。言葉の指示だけでなく、板書、身振り、その他の多角的な情報をあわせて伝えるとより効果的です。

また、当たり前に行っていることでも、評価されなくなると次第にその行動は減ってしまうので、出来ていることは適宜ほめて、継続させることが大切です。特に自ら注意が向けられた時を逃さずにほめることが大切です。そのような状況を意図的に作り成功体験と称賛される体験を出来るだけ多く体験させたいものです。

応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 姿勢を整える

手型を机上に貼ることで、手の置き場所をはっきり示すことができます。「～をやめなさい」や「手を止めなさい」といった指示よりも「手を机に置きなさい」の方が、児童生徒にとって具体的で行動に移しやすい指示と言えます。



図 8-5 「手を置いて、注意を向ける」

2 注目を促す教材の提示と教師のポジショニング

「パペット」などの人形を活用することも、子供の注意を引きつける有効な手段の一つです。その良さは、①キャラクターの親しみやすさ、②動きと声で視覚・聴覚の両方に働きかけられる、③児童生徒と教師の間に教材（パペット）を位置することで、児童生徒の視線が教材に正しく向けられているか確認できる、などが挙げられます。

特に③は、共同注意がアイコンタクトの段階から受動・応答的な段階の児童にとって、視線の共有を促す最適な教師のポジショニングと言えます。



図 8-6 「パペットで視線を引きつける」

3 興味のある教材・活動

児童の興味に基づいたデザインに教材をアレンジすることで意欲を引き出します（図 8-7）。電子黒板はプロジェクターと異なり、直接画面に触れて操作できるメリットがあります。



図 8-7 「興味に基づいた教材づくり」



図 8-8 「電子黒板の活用」

～共同注意～

共同注意（joint attention）とは、大人と子供の両者が同じものに注意を向けて、心の交流を深めている状態を指します。例えば、子供が絵本の猫を「ニャンニャン」といって指さし、大人が「ニャンニャンだね。かわいいね」など応答する場面がこれにあたります。

共同注意は、意図や情動、コミュニケーションなどの発達の基盤となります。自閉症の児童の指さしが乏しいのは、この共同注意が困難であるためと考えられます。

共同注意の発達は、①対人的なアイコンタクトの成立、②指さしや声かけに応答して大人が見ている対象に子供の視線を合わせる、③子供が自分から他者と注意を共有するための、自発的な指さしや物の提示ができるようになる、という段階をたどります。

9 指示の出し方

記憶に残りやすい指示は、①話の前に注意を喚起すること、②指示する内容が明確で具体的であること、③聞く側にとって要点を整理しやすいこと、④いつまで集中して聞いていればいいのか終わりが見通せること、などが挙げられます。

そのためには、①「しっかり」「ちゃんと」などの曖昧な言い回しは避け避け、②明示性の高い具体的な表現を用い、③視覚的な情報を活用し、③「1つめ…、2つめ…」のように列挙法の活用、などがポイントとなります。

1 指示の出し方の原則

指示や説明の仕方の原則を示します（図 9-1）。

（1）注意の喚起

詳しくは「8 集中・注目のさせ方」を参照してください。

（2）予告

話す内容について予告します。児童生徒の興味・関心を引き付けるためです。

それには、話す内容と自分との関連性や価値等について触れることです。

「～について大切な話をします」

「聞き漏らして、後で自分が困らないように」

などの一言をそえるだけでも効果的です。

（3）列挙法の活用

「話は、3点あります。1つ…、2つ…、3つ…。」のように列挙法を用いると、話の「全体と今」が分かりやすくなります。また、「1点目は、明日の持ち物についてです」のように話の一つ一つに表札（インデックス）を付けると、児童生徒は話を整理しながら聞くことができます。

（4）質問は後で受ける

「あっ、先生それって…」のように話の途中で急にしゃべり出す児童生徒がいます。話に無関係な無駄話ではなく、むしろ強い興味を示し、疑問が湧いてきたからこそ「もっと聞きたい」と思ったからでしょう。

その場合、話の前に「質問は後で受けます。まずは、最後まで話を聞きましょう」と告げます。そうすることで、出し抜けにしゃべる行動を押さえるだけでなく、その児童生徒にとっても質問したいことを整理しながら聞く態度を育てる大切な機会にもなり得ます。



図 9-1 「指示の出し方」

2 曖昧な表現は避け、明示性の高い表現で具体的に伝える

「ちゃんと」「しっかり」「はっきり」「丁寧に」という表現は、曖昧で明示性が低い表現（図 9-2）と言えます。

明示性とは、「見ただけで分かる性質」を指します。明示性が低い表現は、聞いた人が「一見して判断ができず、解釈が必要となる」ため、話し手の教師と聞き手の児童生徒との間に誤解や行き違いが生じやすくなります。

「ちゃんと掃除をなさい」では、具体的などのようなやり方を求めているのか伝えていないこととなります。具体的な内容や程度を明確に示しましょう（図 9-3）。



図 9-2「明示性の低い表現」

「しっかり」が示す内容を明示

程度を明示

- × 「しっかり掃除なさい！」
- 「掃除は、黒板を任せます。やることは4つ。
①黒板(に書かれている字など)を消す、
②黒板を雑巾で水拭きにする、
③黒板の溝を拭く、
④黒板消しをクリーナーにかける、です」
- 「拭いたあとが残らないようにします。」

図 9-3「明示性の高い表現」

3 肯定的な表現で表す

「～するな」のような否定的な表現は避け、肯定的な表現で伝えるようにします。

「廊下を走るな」よりも「廊下は歩きましょう」と表す方が、何をすればいいのか具体的な行動レベルで明示的に表現しています（図 9-4）。

- ×「～しない」 → ○「～する」
×「廊下を走らない」
○「廊下は歩きましょう」
- ×「～できなかったら、～しない」
→ ○「～したら、～しよう」
×「これができなければ、休み時間は遊べないよ！」
○「これが早く終わったら、休み時間にたくさん遊ぼう！」

図 9-4「肯定的な表現」

4 視覚情報も添える

音声情報は、そのまま流れて消えてしまい、その場にとどまってくれません。

不注意や短期記憶が苦手な児童生徒にとっては、聞いた内容を即時に整理し、記憶にとどめることが困難です。

そこで、言葉で話す内容を黒板にメモ程度に書き加えながら説明すると、聞き逃しを減らすことができます（図 9-5）。



図 9-5「視覚情報も添える」

<ユニバーサルデザインの視点>

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→教師自身が最も重要な学習環境であり、言語環境を整理することは児童生徒の「わかりやすさ」の基本です。

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 視覚化

耳からの聴覚情報だけではなく、目で確認できる視覚情報を活用します。

授業内容の図示化（power point を使った視覚化）です。一枚のスライドで複数の授業内容や工程を図示し、ノートやメモ帳等に貼り付けておくことで指示を減らし、分からないために活動できなくなる状況を減らすための工夫です。

図 9-6、図 9-7 は、花壇苗の植え方についての資料です。細かく指示するよりも一目で分かる工夫のように工夫しました。

なお、情報を視覚化すればすべてよしというのではなく、児童生徒個々にとって受け入れやすい情報にカスタマイズすることを忘れないようにしましょう。

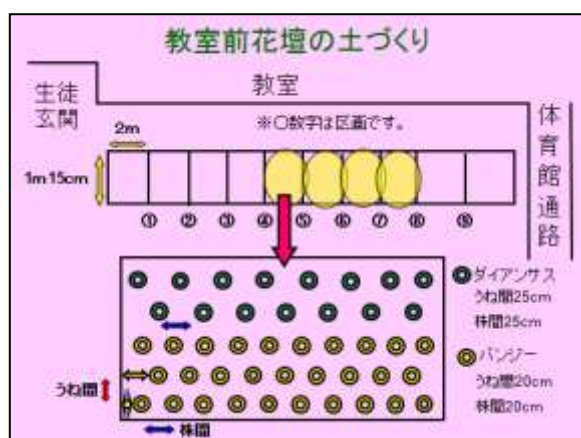


図 9-6 「花壇の植え方①」

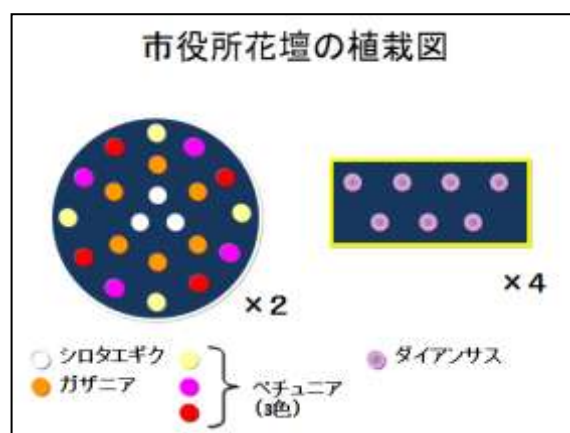


図 9-7 「花壇の植え方②」

＜特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果＞

自閉症のある児童生徒は、「場の空気」を読むことが苦手です。例えば、「きちんと片付けて」という指示は、場面によって『どうふるまう』と『きちんと』するのかわからないことが多く、言われて困ってしまうことがあります。

ADHD（注意欠陥多動性障害）の児童生徒は、一度に複数のことを考えたりするので、指示を分類したり、優先順位をつけたり、段取りを考えたりすることが苦手ですぐに実行できないことがあります。また、次から次へと指示を出されると、何が何だかさっぱりわからなくなって、結局、何一つ実行できないことがあります。

そういう児童生徒には、どれから先に手をつけて、次にどれ、といった具体的な指示を与え、見通しを持って順番に行動していくことを手助けしてあげることが必要です。また、グループ活動などで作業をするときには、「〇〇さんは△△担当ね」と役割分担をしてあげるとわかりやすくなります。

10 参加の促進

教科教育の中で培われてきた「わかる授業」の工夫の中には、ユニバーサルデザインの視点が多く含まれています。

学習活動を活発にし、授業への参加を促進するには、①学習へのモチベーションを高めること、②間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べること、③多様な学習スタイルがあること、④学習のポイントをつかめる教材の工夫、⑤参加のための支援・援助などがあります。

1 学習へのモチベーションを高める

いうまでもなく主体的な学びには、児童生徒の学習へのモチベーションを高めることが重要です。それには、①児童生徒の既存の知識や体験、興味・関心を活かす、②目的やめあてが明確であること、③自分との関連性や価値を実感できる課題の設定などが大切です。

（１）児童生徒の興味・関心を活かす

児童生徒の既存の知識や体験、興味を活かして教材化することで児童生徒は意欲的に学習に参加できます。

小学校6年の算数「場合の数」の授業です（図 10-1）。修学旅行の鎌倉でのグループ行動を思い起こさせ、問題を設定しました。学習意欲と思考に具体性を持たせる工夫の一つです。

【問題】

鎌倉の鶴岡八幡宮、建長寺、銭洗弁財天、大仏の4カ所を見学します。

見学する順序は、全部で何通りありますか。



図 10-1 「修学旅行を題材にした算数の教材」

（２）目的や「めあて」の明確化

児童生徒が「活動や学習の意図」を十分に理解した上で参加できるようにします。図 10-2 は、小学校での「学級会」の授業です。掲示物を活用し、目的やめあてが分かりやすく示しています。



課 題	クラスのアルバムを作ろう
めあて	楽しかったことやがんばったことを思い出して話し合おう。
決まっていること	・ クラスで1さつ作る。 ・ 8 ページ作る。はんごとに1 ページ。
話し合うこと	どんな中身にするか。

図 10-2 「目的やめあてが明確な授業」

（３）自分との関連性や価値を実感できる課題の設定

学習する内容が自分にとって「関係がある」「身近だ」「役立つ」と実感できると、児童生徒は積極的に学習に取り組めます。

2 間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べること

(1)「おしえてカード」「ヒントカード」の活用（小学校）



表 10-3 「カードの活用」

カードの種類	使い方
おしえてカード おしえて！	分からなくて教えてもらいたい時に机の上に置きます。 先生や教えたい友だちがすぐに教えてくれます。
ヒントカード ヒント！	自分で調べたい時に机の上におきます。 教室後方のヒントコーナーで調べることができます。

授業中は、児童生徒にとって様々な疑問や「分からないこと」があります。質問したくてもできない児童生徒もいます。そこで、全員に「おしえてカード」と「ヒントカード」を持たせます（表 10-3）。

カードがあることで、分からない時には教えてもらえるという**安心感**が生まれ、**不安を軽減**することができます。

また、気になることがあった時に、カードを置くことで席を離れて調べることができるので、じっとして学習することが苦手な児童には適した支援です。

(2)「お助けシート」「ヒントシート」

既に学習した内容を忘れてしまい、次のステップに進めない児童生徒は、少なくありません。

そこで、公式などの既習事項を忘れてしまった時、自分から確かめられるように「ヒントシート」を用意します。必要な児童生徒は誰でも使ってよいことにします。

学習の遅れがちな児童生徒にとっては、ヒントシートを見ながら、繰り返し取り組めるので学習の定着を図ることができます（図 10-4、図 10-5）。

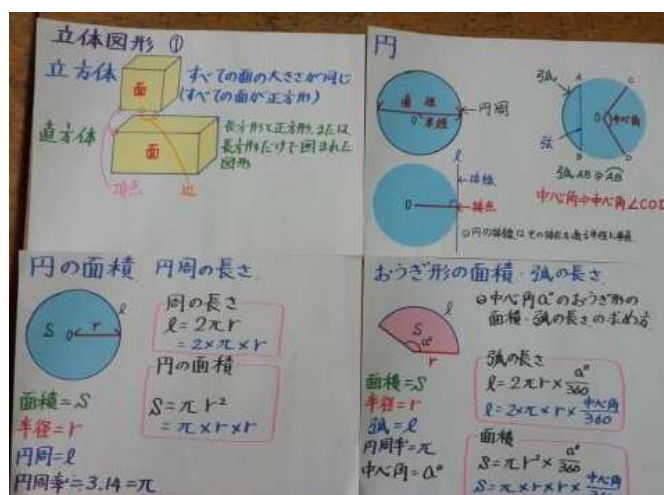


図 10-4 数学「面積と体積の求め方」

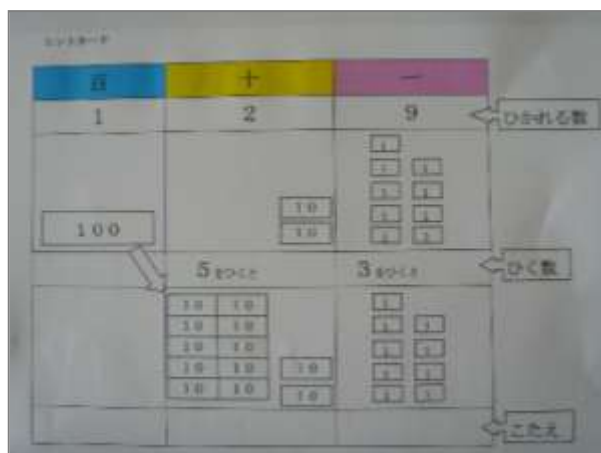
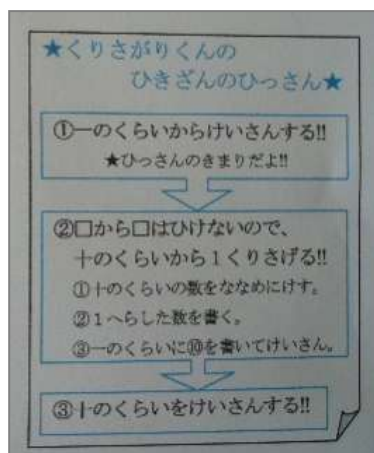


図 10-5 ヒントシート「算数：繰り下がりのある筆算」

3 多様な学習スタイル

児童生徒の個性は、様々であるように、学びのスタイルも様々です。教師からの一方的で画一的な指導にならないように、多様な学習スタイルを状況に応じて活用できるようにしたいものです。ワンウェイ・コミュニケーションではなく、ツーウェイ・コミュニケーションを心掛けましょう。

ここでは、集団の形態別による学習スタイルについて取り上げます。

（１）机間指導 ～一斉指導と個別指導の組み合わせ～

机間指導は、児童生徒個々の学習状況を確認、個に応じて指導・助言できる重要な機会です。個々への指導が適時できるように、つまづきが予想される課題に対して個別教材や支援グッズを準備しておくことが大切です。

（２）学び合い ～ペア学習、グループ学習～

2人一組のペア学習、班ごとのグループ学習、グループ学習を組み合わせた協調学習など、児童生徒同士の学び合いを適切に組み入れることで授業にメリハリが生まれるとともに、考える力や伝える力を高めあうことができます。

また、一斉指導の授業スタイルの中では児童生徒個人ではなかなか自覚しにくい「間違い」や「分からなかったこと」への気づき、正解に向けての「発見」が得られることも期待できます。



座席は、2人一組で並んでおり、例題の答え合わせなど、生徒同士がペアになって学ぶ機会を普段の授業の中に取り入れている。

図 10-5 ペア学習「高：古典」

<ユニバーサルデザインの視点>

「②多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業」

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

「⑤間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる授業」

→この項目は、授業UDの7原則の全ての要素が含まれます。特に②④⑤の視点での工夫が望まれます。

4 教材教具の工夫

教科の指導目標を達成するために様々な教材教具が工夫されています。それらは、児童生徒にとって学ぶポイントや重要な事項を具体的に分かりやすく教えてくれるものです。

(1) プリント教材「作文の書き方」

作文の書き方の指導でもたくさんの指導項目があります。それらを分かりやすく整理、構造化したワークシート（①～③）に沿って学習を進めていきます。

- ① 作文指導 1 「誤りやすい表現に留意する」
- ② 作文指導 2 「文章の構成を考える」
- ・ 起承転結の構成、三段落構成の意見文
- ③ 作文指導 3 「いろいろ表現方法を考える」
- ・ 語順や使う言葉の工夫、文末表現の工夫

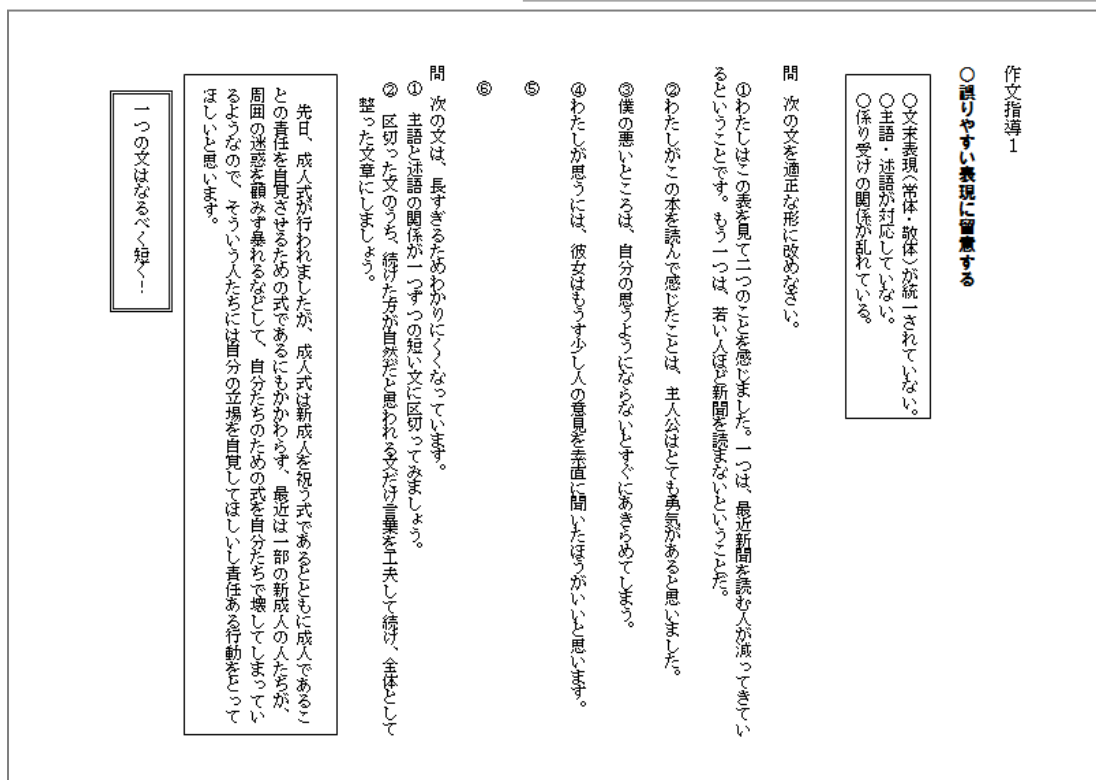


図 10-6 自作教材「作文の書き方」

（２）手本や補助具の活用（中：技術）

材料にのこぎりで切る線を書いたり、釘やねじ穴の中心に印をつけたりする作業を「けがき」といいます。ミリ単位の精密な作業なので生徒にとって不安があります。

そこで厚紙で作った「型紙」を補助具として用意しておきます。「型紙」は、材料にきちんと合わせれば間違えずに「けがき」の線が引けます。

活用のポイントは、あくまでも、さしがねの使い方の技能を身に付けさせることが目標です。そのことを踏まえた上で補助具を活用します。自力でできる生徒は、確認のために活用します。

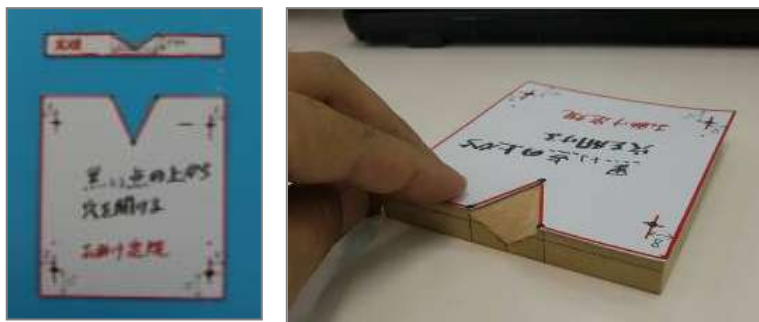


図 10-7 補助具「型紙」

5 テストへの取組

(1) 解答用紙の工夫

中学校の定期試験になると、問題用紙と解答用紙が別々の形式になることがほとんどです。

目の動きが滑らかでなかったり不注意の傾向があったりする児童生徒は、問題と解答の欄の配列が異なっていると、解答の記入がズレてしまう場合があります（図10-8）。

正答が分かっているが、得点に反映されないのです。

問題用紙と解答用紙は、空間的に対応させるとケアレスミスを防ぎます。



図 10-8「問題用紙と解答用紙の様式をそろえる」

(2) うっかりミスを防ぐ「受け方マニュアル」

うっかりミスが多い、テスト中に気が散って集中できない、時間配分が上手くできずにやり残してしまうなどの理由で、学力はありながら、実力が発揮できない生徒がいます。

そこで、要領の良いテストの受け方を身に付け、ミスを起こしやすい自分の癖を知り、同じ間違いを繰り返さないために「テストの受け方マニュアル（図10-9）」を活用するとよいでしょう。

テストの受け方マニュアル

- ① 配られたらまず、名前を書く。
- ② 問題用紙の枚数、解答用紙、裏面がないか確認する。
- ③ 問題を最初から最後までひと通り見て、全体の量と概要をつかむ。
- ④ できる問題、分かりそうな問題から始める（分からない問題は後回し）。
- ⑤ 問題の番号と解答用紙の番号を照らし合わせる。
- ⑥ 記号問題は、すべて答える。
- ⑦ 選択問題は、いくつ選ぶのか確認する。
- ⑧ 途中で残り時間を確かめる。
- ⑨ 最後までできたら、見直しは2回行う。

（「名前の記入」「解答欄のズレ」「問われていることに対応しているか」）

図 10-9「テストの受け方マニュアル」

～ 大学入試センター試験 身体障害者等に係る受験特別措置 ～

大学入試センター試験では、受験に際して、障害等のために特別な措置を希望する志願者に対して、申請に基づき、審査の上、受験特別措置を行っています。

平成23年度から「発達障害」もその対象に加わりました。措置事項として、

①試験時間の延長（1.3倍）、②チェック解答、③拡大文字、④注意事項等の文書による伝達、⑤別室の設定、⑥リスニングにおけるヘッドホンの使用等があります。

いずれも、継続的な学習への参加を保障する必要不可欠な支援や配慮です。



応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 自己選択・自己決定の場面を積極的に取り入れる

知的障害のある児童生徒の教育では、学習のモチベーションを高める工夫を凝らします。受身になりがちな学習に臨む姿勢をより主体的なものにするための工夫として、「自分で選び、自分で決める」とことと「体験を通して考える」を指導に取り入れています。

図 10-10 は、生活単元学習「デザートを作ろう！」の単元最初の授業の様子です。何を作るのか決めるところから、自己選択・自己決定を取り入れています。まず教師が用意した 10 種類のデザートを試食し、自分の作りたいデザートを選び、自分達で決めました。

最初に具体的な「できあがり」が分かることで、目標と意欲を持って学習に取り組むことができます。



図 10-10 「作りたいデザートを選ぶ」

2 コミュニケーション・カード

言葉による理解や表出が難しい児童生徒のコミュニケーションを促進するために、このカードを使います。このカードは、児童生徒の日常生活に基づいて様々なカードを作成し、児童生徒の言葉の理解と意思の発信のために利用します。

写真は、単語レベルですが、担任の名前(顔)や物に関するものなどを作成することで、二語文、三語文になります。



図 10-11 「様々なコミュニケーション・カード」

＜特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果＞

自閉症のある児童生徒の中には、不安のない状況でも突然不安に陥りやすいことがあります。そんな時に、すぐに支援を求められ手助けしてもらえるHELPカードがあると安心できます。更に、間違いが許される学級は居心地のよい学級となり落ち着いて授業に参加できるようになります。

自閉症のある児童生徒は、特定分野に強い興味があり知識が豊富な場合があります。また、ADHD（注意欠陥多動性障害）の児童生徒は、好きなことに集中し続ける特性があります。これらの児童生徒の興味や好きなことを授業の導入に取り入れることは学習意欲が高まり、力を最大限に発揮してくれます。

話したり聞いたりすることが苦手なLD（学習障害）の児童生徒は、伝える相手を誰にすればよいかわからないことがあります。そんな時に、ペア学習やグループ学習を取り入れると、伝える相手を意識しやすくなります。また、相手から自分に向けられていると意識しやすいことから学習理解を深めることになります。

11 個人差への配慮

学級には、たくさんの個性を持った児童生徒がおり、いろいろな能力差や得意・不得意などの個人差があることを前提とした学級経営や授業づくりが望まれます。

それは決して「特別扱い」という発想ではなく、必要であれば「誰でも受けることのできる支援」と考えたいものです。

1 児童生徒個々の能力や適性に応じた課題の設定

児童生徒個々の能力や適性を踏まえた上で、学習課題や役割、達成度を設定します。「全て同じように」と考えるのではなく、柔軟な対応が求められます。

- ①板書を書き写すことに時間や労力が掛かってしまう。
→板書の内容が書かれているプリントを個別に用意する。
- ②「文章の読み取り」「感想発表」など自分の考えを発表するのが苦手。
→授業中の指名は、「音読」や「漢字」などの得意な内容にする。
- ③係活動は「司会・進行」など状況把握が求められる活動が苦手。
→「黒板消し係」などのように、何時、どこで、どのようにすればよいのか分かやすく、取り組みやすい係を任せる。

図 11-1 「能力や適性に応じた課題設定（例）」

2 学習進度の違いへの配慮

（1）下学年の内容を扱う時の配慮

学習の到達度や進度に個人差があるのを前提とした教材化に配慮します。

例えば、漢字学習の定着を図るために下学年の漢字に取り組む場合、下学年のドリルやワークをそのまま使うことは避けます。「級」で表示するなど、劣等感を抱かせないようにします（図 11-2）。

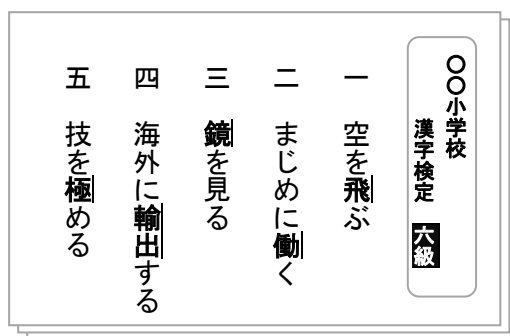


図 11-2 「『級』で表す」

（2）課題への取組が早い子と遅い子への配慮

児童生徒が練習問題に取り組むと、「早くできる」「時間が掛かる」など個人差が出るものです。

早くできた児童生徒には、チャレンジ学習として発展的な問題や知的好奇心を満足させるような問題を用意します。

時間のかかる児童生徒には、学習に取り組みやすくする配慮として、ヒントカードやお助けシートなどを用意しておきます。必要なら誰でも児童生徒は自由に使ってよいことにしておくと、抵抗感が少なく、自分で選択して使えます。

3 自分で選べる教材教具

漢字や作文、計算の学習の際に、マス目や罫線から文字がはみ出してしまいう児童がいます。

そのような時にその児童にとって最適なマスの大きさを自分で選べるように、大中小のマス目が印刷されたプリントを用意します。

教師の一方的な判断で他の児童とは別の大きいマス目を使うようにすると「自分だけ特別扱い」されたと感じる児童もいます。いくら個々の児童に適した教材教具を課しても、かえって自己肯定感を下げってしまうことも考えられます。

自分で判断し、自分で選べるルールが学級に浸透しているとそうした心配はなくなります。

漢字学習。学年相応のマス目では、上手に書けない児童への対応

or

・他の子よりマス目の大きいノートを渡した。
・一人だけ異なる。
・教師が判断。

・大・中・小のマス目の印刷されたプリントを3種類用意。
・クラス全員が自分の好きなマス目を選べるようにした。
・自分の判断。

図 11-3 「自分で判断し選べるプリント」

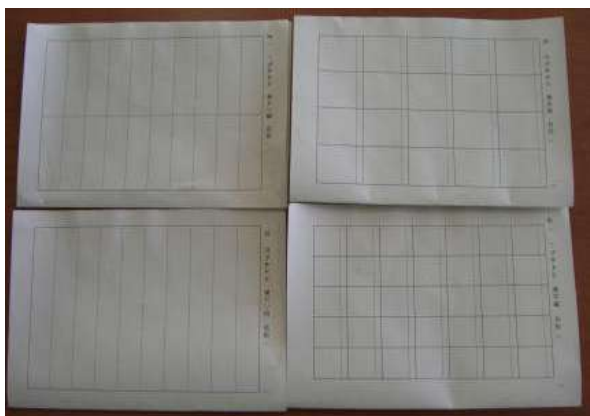


図 11-4 「様々な大きさの漢字プリント」



図 11-5 「選べる原稿用紙」

～補習の意図～

個人差への配慮のためには、生徒個々の学習状況を把握することがスタートとなります。その方法は、机間指導や小テスト、提出物の確認など様々な方法があります。そうした実態を把握した上で課題を与えたり補習を行ったりといった「個に応じた指導」が行われます。その際に配慮する点は、「出来ない生徒への罰則」的な学習活動にならないようにすることです。

学習目標の到達のための個別的な支援・配慮であることを理解させた上で補習を課すこと、その目的に対して適切な教材を与えることがポイントとなります。



<ユニバーサルデザインの視点>

「②多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業」

「⑥現実的に発揮することが可能な力で達成感が得られる授業」

「⑦必要な学習活動に十分に取り組める課題設定がなされている授業」

→この項目は、授業UDの7原則の全ての要素が含まれます。特に②⑥⑦の視点での工夫が望まれます。

4 読みがたどたどしい児童生徒への個別的な支援

音読がたどたどしい児童生徒がいます。理由は、いくつか考えられますが、その一つに、滑らかに目を動かすことが苦手な場合があります。そのため目だけでは途中で追えなくなってしまうたり、改行の際にまた同じ行に戻ってしまったりしてしまいます。

その場合、しおりを使ったり指で文字を追ったりすると読みやすくなります（図 11-6）。

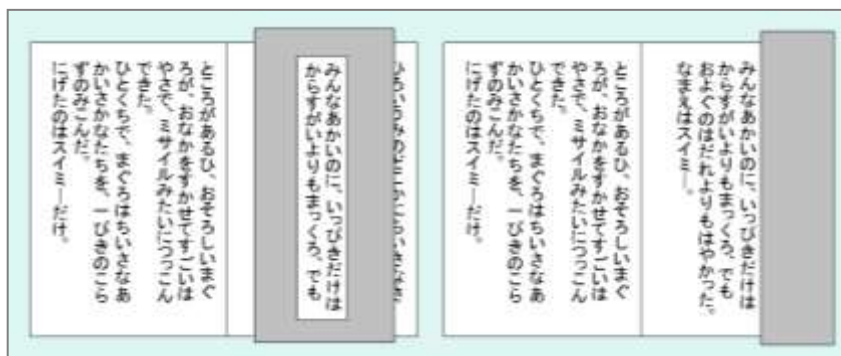


図 11-6 「しおりを使う」



図 11-7 「一行が長いと読みにくい」

また、一行の文字数が多いと読みにくくなります。

一行の文字数を減らして二段組にしたり、行間を開けたりすると見やすくなります。

拡大コピーをするだけでも読みやすくなります（図 11-7）。

1行は短く、
文字間を開ける。
拡大コピーもOK！

5 書くことが苦手な児童生徒への支援

書くことが苦手な児童生徒の特性として、①注意を向けられる範囲が狭い、②聞いたことや見たものを一度に覚えられる量が少ない、③眼球を滑らかに動かすことが苦手なために見ることに時間と労力が掛かる、などの理由が考えられます。

そこで、説明を聞く時間と書く時間をはっきり分ける、記入する量の少ないプリントを用意するといった工夫で並行した作業を少なくすると、書くことに集中しやすくなり、学習をより身に付けやすくなります。

応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成 ～個別が前提～

特別支援学級や特別支援学校で学ぶ児童生徒の障害の程度や教育的ニーズは、一人一人異なります。そこで、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、指導の充実を図ります。

個別の教育支援計画とは、学校と他の機関との連携を図るための長期的な視点に立った計画をいいます。埼玉県では、「教育支援プランA」を作成しています。

個別の指導計画とは、児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応して、指導目標や指導内容・方法を盛り込んだ指導計画をいいます。埼玉県では、「教育支援プランB」を作成しています。集団で行われる授業でも児童生徒個々の学習のねらいや配慮を明確にして指導に当たります。

2 得意なことを伸ばす「分業化」

得意なことを伸ばす。そのための一つの方策として「分業化」があります。

分業化の効果には、自己肯定感の向上の他に、周囲の信頼や組織の一員とし必要とされる社会性や責任感の向上も期待できます（図 11-8）。

また、学級の係活動は、児童生徒がクラスの一員として取り組みやすい活動を割り当てます。活動の内容を分かりやすくするため写真で示します（図 11-9）。



図 11-8「作業の分業化」



図 11-9「係活動」

3 教材教具の工夫

補助具の活用によって、出来なかった作業が出来るようになり、大きな自信につながります。

児童生徒の「困り感」を把握し、解決する工夫が大切です。
（例：木工作業（すのこ作り）で使用する補助具）



図 11-10「補助具の活用」

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

教材や教具の工夫が「難しい授業」を「わかる授業」にします。また、児童生徒の得意なところに目を向けることでみんなが楽しい学校生活を送ることになります。

学習における能力差には個別の対応が必要です。集中できる時間が短かったり、取組に時間がかかったり、線や円がうまく描けなかったり、マスや行から字がはみ出したりするなど、大きな個人差はあるのが自然です。そのときに、習熟度に応じたプリントや大きさの異なるマスのプリントを何種類か用意したり個に応じた補助具を活用したりすることで、だれもが取り組みやすい「わかる授業」になっていくと言えます。

また、児童生徒個々の得意・不得意は異なり、一つの作業を取り上げてみてもみんなが同じペースで同じ成果を出せるとは限りません。作業を分業化して一人一人の得意なところを取り上げて取り組ませたり、スモールステップで成功を積み重ねたりしていくことが本人の意欲と自信につながり、学校生活が楽しくなっていくと言えます。

12 学級モラルの形成

いくら学習に有効な手立てであっても、個別的な対応を嫌がり受け入れたがらない児童生徒がいます。それは、自分だけ「特別扱い」されるという思いがそうさせるのです。

個人差への配慮が学級に自然なことで受け入れられるには、①日頃からお互いの個性を認める風土が培われており、②児童生徒が「価値の多様さ」に気づけることが不可欠になります。

1 共生の心と絆の育成

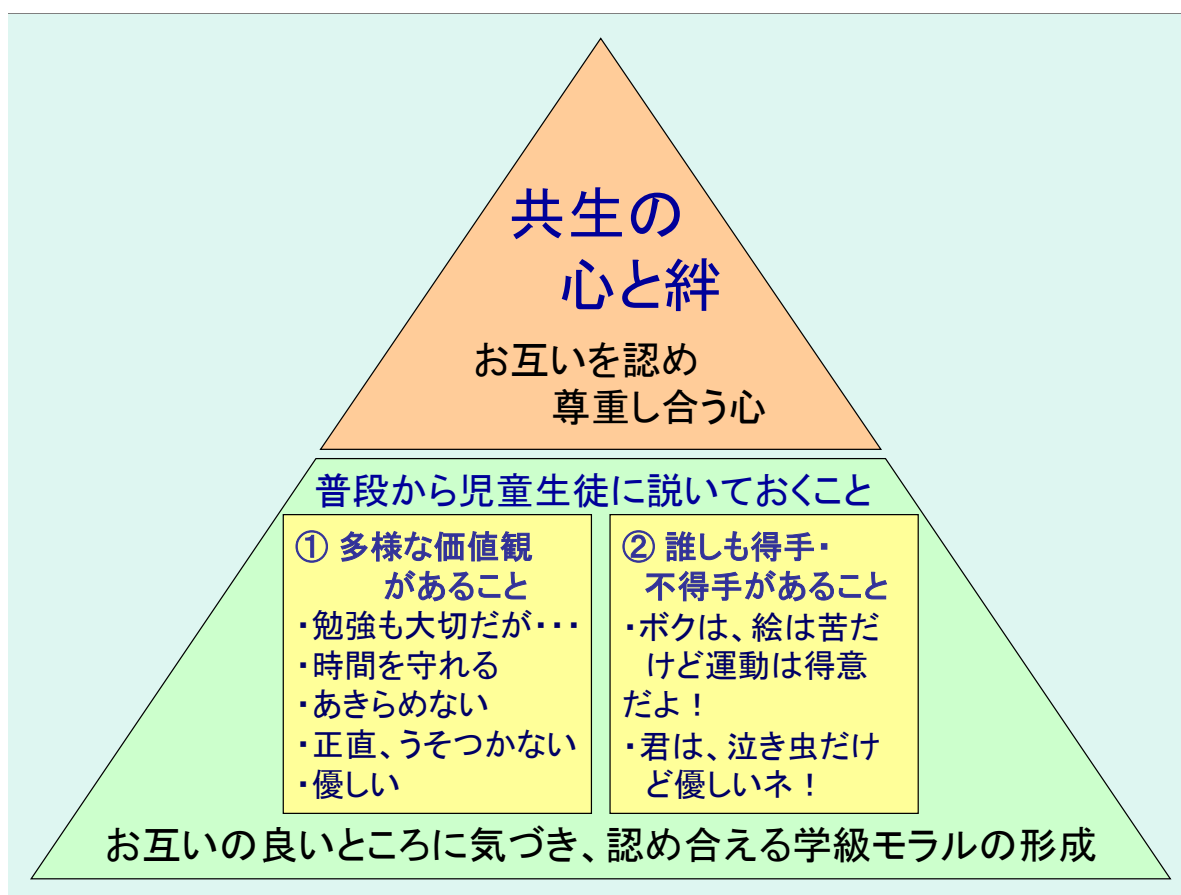


図 12-1 「共生の心と絆の育成」

<ユニバーサルデザインの視点>

「①全ての児童生徒が参加できる授業」

→学びの共同体としての意識を培うことであり、授業UDが有効に機能するための前提となります。

2 人権集会

個人差への配慮が自然なこととして周りの児童生徒に受け入れられることは大切です。このような様々な個人差について理解を深める機会をつくることも必要です。

例えば、「人権集会」を企画し、「いろいろな人がいる」ことや「友だちとの関わり方」について学んだり、友だちの良さも見つけたりすることもできます。

また、様々な苦手さを抱え悩む児童生徒にとって、友だちからの理解によって自分自身を肯定的に受けとめ、自信を持った前向きな生活へとつながります。



図 12-2 「人権集会」

自分や友だちの良いところをたくさん見つけることは大切です。見つけられたときにはすぐに「すごいね」「えらいね」など温かな言葉がけが必要です。

3 学級通信

学級の担任は、日頃から自分の学級経営方針や考えを家庭に伝え理解を得ることが大切です。

家庭への伝達手段の中で、学級担任がその都度タイムリーに全家庭に向けて発信できるものが学級通信です。様々な課題を持ちながらもそういった児童生徒の良さや頑張りを意図的に伝えることで、保護者の学校や教師への理解が深まります。

あなたの周りにはたくさんの方のことを気づかせてくれる素敵な友だちがたくさんいます。みんな同じ場所にいて、同じものを見て、同じ学級通信を読んでいます。

環境は、どの子にも平等に与えられているものです。ただ、そこから大切なことを気づける人もいれば気づけても自分自身に生かせない人もいます。同じものを見て感じ方が違う人もいます。それでいいんです。

友だちの色々な気づきや考え方、感じ方に触れて「へえ～、友だちってそんな風に感じていたんだ。私はそんな風には思わなかったな。」「そっか、そういう考え方もあるな。」そうやって、たくさんの人の多様な考えや気づきに触れながら、次に何かしら事柄にぶつかった時に、それまでの自分の考えと少し違う考えや気づきを持って、そのことに立ち向かっていければそれで・・・。

そうやって「人間の幅」って広がっていくものなのではないかな？と思います。その幅の広げ方も、スピードも、やっぱり人それぞれでいいんじゃないかな・・・。

図 12-3 小学校 6 年生の学級通信から

1 お互いのがんばりを認め合う

学級内のみならず、モラルの形成には経験を重ねることで深まることが多く、学校生活においては、クラス単位、学年単位、学部単位で行事を設定し、コミュニケーションを図ることが周囲を理解し、モラルの形成、醸成を深める契機となります。

写真は、中学部3年生・図工の発表会の様子です。事あるごとに発表会の機会を設け、コミュニケーションの場としています。顕著に集団が変化する取り組みではありませんが、こうした地道な交流が、モラルの形成につながっていきます。



図 12-4 発表会でお互いの頑張りを称えあう

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

日頃の生活の中で、苦手さを自覚していたり、そのことを悩んでいたりと、そのことが原因で周囲と壁ができてしまったりする児童生徒がいます。

個別の課題に応じたプリントなどを用意しても、周囲の児童生徒と同じプリントでないことがわかるとプリントの交換を要求したり意欲をなくしたりすることがあります。また、1人ではいるときには素直に話を聞けるのに大勢の中で個別に話をするすると拒絶するような態度をとることもあります。

本人に対しての支援が集団の中であからさまであったり、周囲への指導が押しつけになっていたりすると、本人に対しての周囲の関わり方が遠慮気味になって良好な関係が築きづらくなります。本人もそのような雰囲気は敏感に察するものです。

Ⅱ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた 授業づくりの実際

1 小学校・6学年・外国語活動の実践

「Hi friend Lesson 8 夢宣言をしよう」

実践の概要

本学級には、「分からない」と思った途端に学習意欲が低下し活動に取り組もうとしなくなる、注意・集中が持続せず私語や椅子、机をがたがたと揺らすなど落ち着きに欠ける、動作がゆっくりで周囲のペースに合わせることが難しい、自分の感情をうまくコントロールできないといったさまざまな課題を抱えた児童が在籍している。外国語活動の時間は、課題を抱えた児童の主だった行動が比較的現れやすい授業の一つである。

1 単元について

(1) 外国語活動について

昨年度より外国語活動が本格実施となったが、日本語とは大きく異なる英語の発音に対して、慣れ親しむまでには至っていないのが現状である。また、新学習指導要領では、『体験的に「話すこと」「聞くこと」』を重視しているため、外国語活動の授業の多くが英語の歌やゲームといった活動が中心になる。

(2) 本単元の意図

外国語活動で取り上げるゲームは子供たちにとって一時的に楽しいという感覚が持てるものの、達成感が生まれにくかったり、感動が残りにくかったりするなど、表面的な学びになっているのではないかと感じられることもある。また、児童にとって馴染みのない外国語を使っている活動は、英語の発音が聞き取りにくい様々な課題が現れてくる。

そこで今回、この外国語活動の授業を通して、表面的な楽しさだけではなく、外国との交流の機会ととらえ深く考える機会としたい。

本単元「夢宣言をしよう」では、具体的に社会科「世界の中の日本」の単元の中で学習する「日本の果たす役割」や「ユニセフの活動」について学習を深める場であったり、国語「平和について考える」をテーマにして意見文を書くという学習の中で自分の考えを深めていく学習にもつながっていくものである。外国語活動だけでなく社会科、国語といった他教科との関連をふまえた授業を構成することで、様々な角度から世界へ目を向け世界の抱える問題について自分の考えを深めていくことができるものと考えた。さらに、ボスニア・ヘルツェゴビナの子供たちとの間接的な交流を通して様々な環境に置かれている同世代の世界の子供たちの話を聞き自分なりの考えを深め、今の自分の生活環境や考え方、将来への夢を再度問い直すきっかけとしたいと考えた。

(3) 本単元の目標

- ・積極的に自分の夢について交流しようとする。
- ・どのような職業につきたいかを訪ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。
- ・世界には様々な夢を持つ同年代の子供がいることを知り、英語と日本語での職業を表す語の成り立ちを通して言葉の面白さに気づく。

2 本時の学習指導の実践

(1) 本時の目標

- ・夢をたずねる表現や答え方(What do you want to be? I want to be~.)の言い方に慣れ親しむ。
- ・世界には、様々な夢を持つ同年代の子供がいることを知る。

(2) 展開

段階	活動内容	担任	外国語活動サポーター	ユニバーサルの視点
課題の把握	1 挨拶 ・ 始まりの挨拶 ・ 今日の天気 ・ 今日は何月何日何曜日 ・ 今日の気持ち 2 復習 America/china	C:授業の開始の合図 Let's start our English class.	今日の天気 How is the wether today? 今日の日時 What's date is it today? 今日の気分 How are you?	(6) 授業の組み立て ・はじめと最後の挨拶を毎時間同じとし見通しを持てるようにする。 (10)

	/Japan/India /France/Greece/ Brazil/Spain /Australia/Egypt /Spain Bosnia and Herzegovina 3 新出表現の学習 who am I? (私は誰でしょう?) 4 Who am I? ゲームをする。 新出表現の学習 What do you want to be? 5 自分の夢を友達に発表する。 ・ペア学習 ・グループ学習等	児童と共に問に答える What country? Who am I? 写真を見せる。 What country? Who am I? 例) 1 I am a boy. 2 I live in Australia 3 I want to be a musician. 4 Who am I?	児童と共に復唱 America/china/Japan/ India/France/Greece/ Brazil/Spain/Australia/ Egypt/Spain /Bosnia and Herzegovina 国旗を写真のそばに貼る。	参加の促進 ・前時の復習から入ること 参加しようとする意欲を持たせる。 (10) 参加の促進 ・同じ英語のフレーズをクイズ形式にするなど変化を持たせていきながら英語の音に慣らしていく。 (10) 参加の促進 ・学習形態を変えることで、発表が苦手な児童の参加を促す。
問題の解決	6 ボスニアの子供たちの夢について聞く。 7 ボスニアの子供たちが自分の国で夢を描けるようにするにはどうしたらいいか考えカードに書く。	外国語活動サポーターとの役割演技 What do you want to be? Why?	I don't have dream. I want to escape from country. 前時で使った挿絵を使いながら理由を説明する。	(10) 参加の促進 TT で役割演技をすることで、イメージを持たせやすくする。
まとめ	8 自分の考えを発表する。 9 挨拶	Let's finish this class		(10) 参加の促進 ・はじめと最後の挨拶を毎時間同じとし見通しを持てるようにする。

3 ユニバーサルデザインの視点

(1) 授業の見通し

○授業の始まりと終わりの挨拶を毎時間同じとし、安心して授業に取り組める時間を確保し授業への参加意欲を高める。

授業の始めに毎時間挨拶、気分、日時、天気の違いなど、基本的な英語を取り入れて、英語を苦手とする児童でも、前向きな気持ちで授業に望むことができる。また、はじめと終わりの挨拶を英語の指示で行うことで、英語が分からなくても他の児童の動きを真似することでの一連の動作を行うことができる。さらに毎時間の繰り返しで、動きとともに英語の指示の理解につなげることができる。

(2) 参加の促進

○前時の復習から入ること参加しようとする意欲を持たせる。

週1時間の英語は、1週間たつと学んだことも忘れやすい。そこで、前時の復習を取り入れることで英語の発音に慣れ親しむことや児童の「英語が分からない。」という不安を軽減し授業への参加意欲を高めることができる。

○第1時で作成した将来の夢を記入したカードを手がかりにする。

自分の夢を、絵や言葉でカードに表現することで、自分の中に抱く夢をあらかじめ明確なものにしておくことができる。また、外国語活動は、英語ではなく絵や言葉（日本語）で表現してもよいという安心感が、英語への抵抗を少なくし授業への参加を促すことにつながる。発表するさいにカードを手掛かりにすることで自分が話した英語が相手に伝わらなくても話していることを理解してもらうことができ、「理解してもらえた。」という経験が「また英語で話してみよう。」という意欲にも繋がる。また、英語の言い方を覚えることが難しい児童は、カタ

カナでカードにメモしておく等自分なりの手がかりを残しより自信を持って発表できるようになる。

○変化を持たせながら英語の表現に慣らしていく。

英語のフレーズの単調な反復練習だけでは、児童の授業への参加意欲も下がってしまう。例えば「who am I game (私は誰でしょうゲーム)」の中で、写真の手掛かりを見せながら「who am I (私はだれ?) ?」という同じフレーズをクイズ形式で繰り返し問いかけていくことで、「先生の言っていることは、こういうことなのかな?」と知的好奇心を喚起させ、楽しみながら英語のフレーズも耳に慣らしていくことができる。

(3) 個人差への配慮

○個人差に応じた発表の場を与えることで、全員が達成感を味わえるようにする。

自分が書いた「夢カード」をもとに、自分の夢を隣の席の児童に語る。人前で発表することが苦手な児童に1対1で発表する場を与えることで自信を持たせることができる。1対1のペア活動に慣れたあと、それぞれの児童の実態に応じた指令をカードの裏にあらかじめ書いておき、例えば「授業を参観している〇〇先生に自分の夢を語りましょう。」「男の子2名に語りましょう。」といったレベルアップのための活動に取り組む。

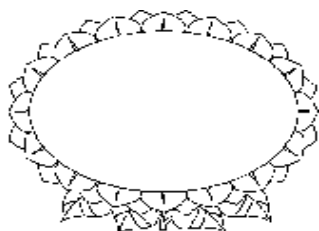


ペア活動



レベルアップの為の活動

自分の考えをカードに書く場面では、うまく言葉で表現できない児童に対しては、好きな色を選んで塗ってもよいという提案もする。自信を持って自分の思いを表現できる場を設定し安心して授業に取り組めるようにする。



自分の考えを書くカード
*色をぬってもよい

(4) 参加の促進

○児童の想像を広げやすくするために写真や挿絵を用いる。

聞きなれない英語での説明は児童にとって理解することが難しいため、手掛かりとなる写真や挿絵を使用することにより、効果的に理解を促すことができる。



想像を広げるための
地図の模型



手掛かりと
なる写真や
興味をひく
地雷の模型

4 成功へのポイント

(1) 授業の基盤となる学級作り

外国語活動は、週1回1時間で英語の発音は耳慣れないものも多く、聞いて理解することも、発表することも児童にとっては自信が持ちづらく不安も大きい。したがって、自分の発表を真剣に聞いてくれる友達の存在や、間違いを「大丈夫だよ。」と優しく受け止めてくれる学級の雰囲気や日々の学級経営の中で育てておくことが重要になる。安心が保証されている中であれば授業に対しても意欲的に参加できるものと考えられる。

(2) どの子にもスポットライトが当たる場を保证する

本時の授業では、どの活動においても、前時の復習やその子の実態に応じた発表の場、方法を設定している。1時間の授業の中で、「この部分だったら自信を持って参加できる」「この発表形態だったら発表できる」「自分の考えは文で表現できないけれど色でなら表現できる」等、その子なりのスポットライトの当たる場を保证していくことで、どの子も安心して授業に望むことができる。

(3) 機会と時期をとらえ学級にあった授業を組み立てる

本時の授業は、今年度出会った人や学校行事をちょうど良いタイミングで外国語活動の授業の中に取り上げたものである。児童の実体験を外国語活動に盛り込むことで、より実感の伴った理解へとつなげることができた。これは、外国語活動で重要であると言われる状況設定やロールプレイといった疑似体験よりもはるかに児童の心に響くものであり、理解を深めることにつなげることができる。

(4) 振り返りの場を設定することで、学んだことを積み上げていく

本時の授業内容のベースとなる基本的な価値観は日々の教師の語り、学級通信、掲示物等にできるだけ多く触れることで育っていくと考える。



(5) 思いを共有できる先生と授業を作り上げることで2倍のアイデアと工夫がふくらむ

今回は、TTという形で授業を行った。担任の思いに賛同してくださる先生と授業を作り上げることで、一人ではなかなか思いつかないアイデアや工夫が次々と出てきて授業を作り上げる楽しさも味わうことができる。

(6) 教室にあるものの全てが教材

教室にあるもののすべてが児童の学びの環境の一つと考えると、担任は毎日、毎時間児童の学びを支える大切な環境の一つとなる。

その時間、授業に使える人、教材、環境をどう融合させていくか児童にとって最大の環境要因である担任の果たす大事な役割の一つである。

(7) 「外国語活動の授業はこうあるべき」という考えから「児童の学びのためにこうあるべき」という視点を持つ

『できるだけ英語を使って児童に英語をインプットしていく。』といった、外国語活動の「こうあるべき」授業スタイルだけが一人歩きをしてしまい児童本来の「英語って楽しい。」「もっと英語を学びたい。」という児童本来の素直な気持ちを封じ込めてしまっていないだろうか。まずは、「子供たちがどうやったら外国語が楽しく学べるか」「学びたいと思えるか」を見失わないようにすることが大切である。

(8) 学んだことが何かしらの成果となることで『学ぶ喜び』へとつなげていく

個々の児童の学んだ成果は、1時間の授業であられるものではない。授業はもちろんのこと学校行事や休み時間での友達や先生とのやりとり等、毎日繰り返される学校生活の中で、そして学校だけでなく家庭生活の中で相互に絡み合って育まれていくものである。1時間の授業の中で、学んだ成果があらわれなくても1ヶ月先、1年先、数年先に花開くこともある。

授業の中で学んだことが後に成果となって現れたり、別な形で花開く経験を持てることで学んだ実感や学ぶことの価値を見出すことができる。そのことが自分をさらに成長させ続けるための『学ぶ喜び』にもつなげていくことができるものだと考える。

2 小学校・6学年・算数の実践 「場合の数」

実践の概要

本学級の児童は、明るく活発で意欲的な児童が多いが、学力や学習意欲の差があり、学習形態や問題提示の方法に十分な配慮や工夫が必要である。問題に対して興味を持つと、自分の力でなんとか解決しようと頑張る姿勢が表れ、さらに考える見通しが立つと、多様な考えで取り組むことができる。しかし、見通しや考える手立てが見つからないと意欲が低下し、すぐに学習を放棄してしまう児童もいる。そのため、学習の仕方を理解させるときや自力解決時のおきにおいては、個人指導やヒントカードの利用など、一人一人を生かした手立てや工夫を考えることが必要である。

問題解決学習の過程においては、グループでの活動を取り入れた授業を多くしているため、互いに教えたり、教わったりする活動に慣れてきた。そのなかで授業の流れを理解し、自分の考えをノートに書くことや問題に取り組もうとする態度が少しずつ身に付いてきている。しかし授業における学び方や自分の考えを表現することには、まだ不十分なところが多く、一人一人が自信を持って取り組めるように、授業の流れや算数的活動を工夫していく必要がある。そこで、ユニバーサルデザインの視点から授業を考えることで、分かる授業の楽しさが見え、クラス全員が安心して授業に参加できると思われ、本時の授業を実践した。

1 単元（題材）について

(1) 算数について

本単元では、順列や組み合わせについての場合の数を求める問題を扱う。起こり得る場合は一見複雑多様に見えても、特定のものに注目したり特定のものを固定して他を変化させるようにしたりすると、整然と調べ上げることができる。この要領を学習し、組織的に考察する手法を会得することが本単元ねらいである。

(2) 本単元の意図

順序を調べるために、最初は思いつくままに列挙することが考えられるが、それでは、落ちや重なりが起きるかもしれない。そこでどうしたら確実に、起こり得るすべての場合を数え上げることができるかを考えるようにする。

(3) 本単元の目標

具体的な事柄について、起こり得る場合を順序よく整理して調べることができるようにし、筋道立てて考えを進めていこうとする態度を身につける。

2 本時の学習指導の実際

(1) 本時の目標

- ・ 順列について、落ちや重なりのないように調べる方法を考え、その方法を理解する。

(2) 展開

過程	学 習 活 動	予想される児童の反応（・）指導上の留意点（○）評価（★） ユニバーサルデザインの視点（◆）	時間																												
問題をつかむ	1 問題を知る。 ・ 何通りあるのか予想する。	鎌倉の鶴岡八幡宮、建長寺、銭洗弁財天、大仏の4カ所を見学します。 見学する順序は、全部で何通りありますか。 ○鎌倉のグループ行動を思い起こし、見学する順序を考える意欲を持てるようにする。 ○どんな順序があるのか、考え予想できるようにする。 ・ 鶴岡八幡宮 ⇨ 建長寺 ⇨ 銭洗弁財天 ⇨ 大仏 ・ 4通り・12通り・24通り ◆前方の棚に目隠しカーテンを使用し、黒板の問題に集中できるようにする。（視点2） ◆身近な題材を使った教材で興味関心を高める。（視点7）	7分																												
一人で考える	2 課題をつかむ。 3 見通しを立てる。 4 課題を解決する。 <table border="1" data-bbox="225 1032 513 1370"> <tr><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td></tr> <tr><td>A</td><td>B</td><td>C</td><td>D</td></tr> <tr><td>A</td><td>B</td><td>D</td><td>C</td></tr> <tr><td>A</td><td>C</td><td>B</td><td>D</td></tr> <tr><td>A</td><td>C</td><td>D</td><td>B</td></tr> <tr><td>A</td><td>D</td><td>B</td><td>C</td></tr> <tr><td>A</td><td>D</td><td>C</td><td>B</td></tr> </table>	1	2	3	4	A	B	C	D	A	B	D	C	A	C	B	D	A	C	D	B	A	D	B	C	A	D	C	B	4つの場所を見学する順序を落ちや重なりがなく全部調べる方法を考えよう。 ○どのように調べればよいのか考えるようにする。 ○思いつくままに書くと全部かどうかかわりにくいことに気づくように促す。 ・ 表にして、書き出してみる。 ・ 図を考える。 ・ 1番目に行く場所を決めて考える。 ・ 場所の名前を記号を使って表す。（視点6） ◆何を考え、何を求めていくのか見通しが立てられる。 ○下記のような記号で表すことに統一する。 鶴岡八幡宮 …… A 建長寺 …… B 銭洗弁財天 …… C 大仏 …… D ・ 表にして考える。 ・ 図にまとめてみる。 ・ Aを1番目にするると6通りの順序ができる。 ○どうしてそう考えたか、友達にわかりやすく説明できるように考えをノートにまとめるようにする。 ◆ワークシート、ヒントカードを活用し、図や表にまとめられるようにする。（視点10） ◆個別の補助具の活用で調べる活動をわかりやすくする。（視点11） ★順列について、落ちや重なりがないように工夫して順序よく調べようとしている。【関】	15分
1	2	3	4																												
A	B	C	D																												
A	B	D	C																												
A	C	B	D																												
A	C	D	B																												
A	D	B	C																												
A	D	C	B																												
みんなとたしかめる	5 調べたことを発表し、検討する。	○グループの中で各自の考えを発表して、グループで検討して説明するようにする。 ・ 1番目を決めて、順に書いたら、整理できた。 ・ 1番目にくるのが4つあるので、それぞれ同じ表や図が書けた。 6通りが4つできたから $6 \times 4 = 24$ 答え24通り ○表と図を比べて、合っているところや違うところを見つけそれぞれのよさに気づくように促す。 ・ 表は同じ記号が並んでいるが、図は記号が少なくて見やすい。 ・ 表は、結果がわかりやすい。（何通りの結果） ○表や図のよさをデジタル教材で確認する。 ◆デジタル教材を使用して、表や図の書き方の確認と落ちや重なりなく調べられることを確かめる。（視点7） ★順列について、落ちや重なりがないように、記号化したり、図や表を用いたりして、順序よく筋道を立てて考え、調べていく。【考】	15分																												
まとめる	6 本時のまとめをする。 7 振り返りカードで、今日の学習の振り返りをする。	○落ちや重なりなく調べる方法をまとめる。 1番目を決めて、図や表で順番に考えれば、落ちや重なりがなく調べられる。 ○今日の学習で、わかったことを書き、自己評価を行う。	8分																												

3 ユニバーサルデザインの視点

(2) 教室環境②「刺激への配慮」

- ・黒板周りをすっきり、前方の掲示板上に目隠しカーテンを使用し、黒板に集中しやすくする。

(6) 授業の組み立て

- ・算数の授業の流れは、基本パターンで進めていく。



問題をつかむ（読む、課題把握、見通し）

意欲を高める問題提示の工夫



一人で考える（解く、確かめる・他の方法を考える、説明）



見通しを立てて解決方法を考える

みんなと確かめる（聞く、課題を振り返る）



多様な方法からよりよい方法を選ぶ

まとめる（わかったこと、練習問題）

- ・一斉指導とグループ学習の組み合わせにする。

（個人の考えをグループで生かす）

(7) 板書の工夫

- ・身近な題材を使った教材で興味を引きつける。
- ・「問題」「課題」等学習カードを提示して、今何をするのか分かるようにする。
- ・チョークの色分けをする。
- ・問題文、課題文、まとめは色の枠で囲むなど、ポイントの表示をする。
- ・授業の展開が見通せるようにする。
- ・見やすい表や図を掲示する。



(11) 個人差への配慮

- ・個別の補助具の活用
（表や図にうまく表せない児童に対して、便利カードを利用）



(10) 参加の促進

表を書いて調べよう

○1番目をAとすると、2番目はBかCかDになります。2番目をBとすると、3番目はCかDになります。このように考えて下の表を完成させましょう。

1	2	3	4
A	B	C	
A	B		
A	C	B	
A	C		
A	D	B	
A	D		

○1番目をAとする順序は、全部で

通り

図をかいて調べよう

○1番目をAとして考える。

```

graph LR
    A((A)) --- B((B))
    A --- C((C))
    A --- D((D))
    B --- B1((B))
    B --- B2((C))
    B --- B3((D))
    C --- C1((B))
    C --- C2((C))
    C --- C3((D))
    D --- D1((B))
    D --- D2((C))
    D --- D3((D))
    
```

○1番目をBにする場合、Cにする場合、Dにする場合をかいてみよう。

○1番目がBの場合、Cの場合、Dの場合のときを表にしてみましょう。

1	2	3	4
B			
B			
B			
B			
B			

1	2	3	4
C			
C			
C			
C			
C			

1	2	3	4
D			
D			
D			
D			
D			

全部で

通り

ヒントカード

- ・ワークシート、ヒントカードを活用し、自分の考えを整理する。
- ・机間指導（全体説明と個別説明）
- ・活躍できる場や活動の用意（グループの中で発表や話し合い、発表のしかたカードを利用）

4 成功へのポイント

児童が「わかった！できた！」と顔を輝かせて取り組むことができると、また次への意欲に繋がっていくと考えられる。一人でも多くの児童に笑顔で授業へ取り組んでほしいため4つのポイントをまとめた。

(1) 児童の実態把握

クラス全体の児童の傾向や実態を把握することはもちろんだが、個別の実態も必ず把握し、その児童を授業のどこで生かしていくのか、どのような手立てが意欲的に繋がるのかを、授業の流れとともに考えると、効果的な教具や場の設定が思い浮かんでくる。

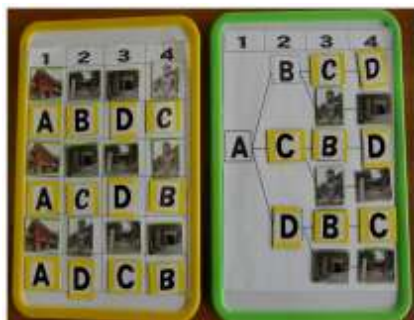
(2) 授業の組み立て（授業の流れ、板書計画）



授業は、流れがパターン化していると、児童が安心して取り組むことができる。授業の流れを教室に掲示して児童が覚えられるようにするとよい。考える手段（図や表、数直線、計算、立式、言葉の使用）の習慣化やデジタル教材の活用も効果的である。

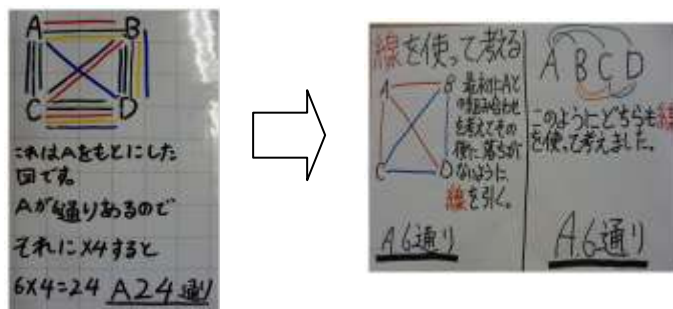
板書計画は、1時間の授業が一目で分かるようにする。また、ノートに写しやすい工夫を取り入れることで児童のノート視写も丁寧になる。

(3) 個人差への配慮



「場合の数」の単元では、表や図は作れても、それを実際に順序よく書こうとするとわからなくなってしまう児童が多い。そこで、ホワイトボードとマグネットの絵カードや記号カードを活用する。これによって、書いたり消したりの手間がはぶけ、容易くでき、意欲も増してくる。

(4) 活躍できる場作り



考えの発表では、グループでの活動を取り入れ、書く人、発表する人の役割分担をしたり、「発表の仕方マニュアル」をあらかじめ作ることも安心できる授業を促す。

発表ボードを残せるようにしていくと、次時へも繋がっていく。

場合の数の考え方 ⇨ 左の考えを組み合わせに生かす。

3 中学校・1学年・技術・家庭科の実践 「生活に役立つ小物をつくろう」

実践の概要

①ユニバーサルデザインを取り入れた意図・ねらい

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業が、意欲につながり、分かりやすく基礎・基本の定着につなげるため、次の点に重点をおいて実践した。

ア 作業しやすい教室レイアウト（作業時間の確保・安全確保・安心感）

イ 視覚に訴え、間違えにくい補助教具及び工具の工夫（意欲喚起・安心感・基礎基本の定着）

②学級の概要

物づくりに対する興味・関心は高く、作業が丁寧で積極的である。しかし、数名の生徒は、授業の内容が理解できず、全体の進度より遅れたりするので個別指導、また有効にユニバーサルデザインの視点を活用した授業実践が必要である。

1 単元（題材）について

(1) 生徒観

男子16名、女子15名計31名で構成されている本学級は、真面目で活発に授業に取り組むことのできる学級であり、全体的に落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っている。ほとんどの生徒は、小学校の授業でげんこのやのこぎり等の木工具を使った経験はあるが、正確な知識と技能は身につけておらず、上手に使えないのが現状である。しかし、「がんばろう」「手作りの物を作りたい」という物づくりに対する興味・関心は高く、積極的に活動している姿が多く見られる。ただ数名の生徒は、全体の進度より早く進みすぎて時間をもてあましたり、大幅に進度が遅れたりするので個別指導も必要になってくる。

(2) 教材観

木材は、加工用素材として古くから使われてきた材料である。特に我が国では木材資源が豊富であった為に、住的要求を満たす有力な材料の一つであった。従って建築・建具・家具・食器という流れの中で、日常生活に密着したものとして今日に到っている。このため生徒に製作品の設計の指導をする場合にも、生活経験を生かしながら、木の美しさ、木の丈夫な構造、木の強さを理解させながら指導することができる。また、安全に対する知識も十分に指導していきたい。

(3) 指導観

授業が終わった時、生徒が満足感を味わい、「また、次もがんばろう」という意欲を持てるようにするためには、生徒が主体的に活動できるように工夫しなければならない。それが生徒の自己実現につながると考える。そのためには、生徒が前向きに、粘り強く考え、判断し試み、発見し、表現する力をつけることが必要であると考え。そこで授業の中に生徒が自ら考え、判断する自己決定の場面を多く設定する。また、一人一人のおもいが作品に生きるように常にこころがけたい。

(4) 本単元の目標

・身の回りを整理する物を製作することを通して、①ものづくりの基礎的、基本的な知識（知識）や②技術を習得（技能）させるとともに、③技術を適切に評価し活用する能力（関心）を育成する。

2 本時の学習指導

(1) 本時の目標

- ・材料に適した切断方法について知り、正しく適切にのこぎり引きができる。

(2) 展開

学習過程	生徒の活動	時間	教師の働きかけ	評価と指導の工夫 〈評価の観点〉(評価方法)	資料等
				◆ユニバーサルデザインの視点 ★評価規準 ◎十分満足できる ○おおむね満足できる △努力を要する生徒への手立て	
学習課題への意欲付け	・正しいのこぎり引きについての確認する。 ・安全についての確認をする。 ・正確な部品の大切さを知る。	5 5	・前時の学習内容を確認するように促す。 ・正確な部品の仕上がりによってできばえが違いうことを伝える。 ・本時の学習課題を提示する。	・のこぎり引きの意欲につながるように留意する。 ・部品の正確な加工で組み立てた時のできばえが変わる事を良い例、悪い例を表示し、気づくようにする。 ◆実物標本・大型テレビによる提示方法	大型テレビ 書画カメラ 工具箱 標本
	学習課題 けがき線に沿ってまっすぐ直角に切断しよう その4				
課題発見と解決	・各自、正しくのこぎり引きを行う。 (固定の仕方・姿勢・視線・刃の選択・切り込み角度・切り始め・途中・切り終り・安全) ・切断面をさしがねで検査する。 ・木工やすりで修正する。	35	・正しい方法でのこぎり引きの指示をする。 (固定の仕方・姿勢・視線・刃の選択・切り込み角度・切り始め・途中・切り終り・安全) ・部品の点検及び修正を指示する。 ・生徒の観察をしながら指導及び支援をする。 ・安全面には十分配慮する。	◆作業時間を十分確保する ◆安全で作業しやすい木工室の空間 ◆ヒントカードを黒板に掲示する ◆切り込み角度がわかるように刃わたりに線を引く ◆工作椅子の向きを間違えないように椅子に表示 ★正しい方法で正確にのこぎり引きができる。 〈技能〉 (板の点検・観察) ◎けがき線に沿ってまっすぐで、直角に切断できる。 ○おおむね正しい方法でまっすぐ直角に切断できる。 △アドバイス、師範、ヒントカード ◆作業終了5分前アラーム ◆作業終了アラーム	さしがね クランプ ヒントカード 既習掲示物 のこぎり
まとめ	・班毎に後片付け ・本時の学習を振り返る。	5	・班毎に片付けの指示を出す。 ・本時の振り返りを行う	◆作業、後片付けしやすい教室レイアウト ◆後片付け管理しやすい工具箱	掃除機

3 ユニバーサルデザインの視点

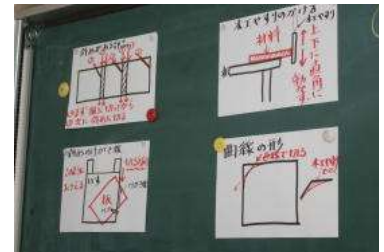
(1) 導入の工夫 (ICT の活用) 【視点 6】

書画カメラで組み立ての良い例と悪い例を撮り大型テレビに表示する。そこでなぜ良いのか、なぜ悪いのか考えることで、部品の正確さが大切なことに気づかせる。



(2) ヒントカード 【視点 10】

自分で既習事項の内容に戻れるように既習事項 (ヒントカード) を掲示した。写真のように既習事項の掲示物を作成し、補助教材として使用した。頭の中で物事を整理することが苦手な生徒へは視覚的に資料を提示することで理解することができる。



(3) 安全で作業しやすい木工室のレイアウト 【視点 1】

快適な学習空間を作ってあげることが、生徒たちにとって学習能率を上げるのにとっても大切である。「せまくて作業しづらい」「危ない」などトラブルがないように教室のレイアウトを工夫し、また、安全管理、生徒の観察が容易にできるようにした。

のこぎりを使用する授業では、黒板側の前半分をのこぎりの作業場所、後ろ半分を生徒が座る工作机にした。のこぎりの作業場所には、工作椅子を各班 2 個ずつ用意し、各班の作業する位置を指定した。さらに、のこぎり作業をしている生徒の向きが全員黒板の方を向いて作業をするように指示した。こうすると作業場所の確保ができ、また安全に安心して作業ができ、さらに清掃もスムーズにでき、きれいに早く終わることができる。



(4) 工具の整理整頓・管理 【視点 1】

技能教科では、様々な工具が使用される。生徒が使いやすくまた、管理しやすいような工夫が必要である。工具は班毎に 1 つの工具箱に収め、班の人数に適した数量を用意した。また、各工具を工具箱のどこに収めればよいのかわかるように、はめ込み式にした。こうすると、片づけが苦手な生徒への対応ができ、また、片付け時間の短縮につながり、作業時間の確保ができる。



※工道具の基本セット【工具箱は半透明のプラスチック性 (中が見える・積める)】

・のこぎり (2) ・げんのう (2) ・きり (2) ・かんな (2) ・木づち (1) ・木工やすり (2)

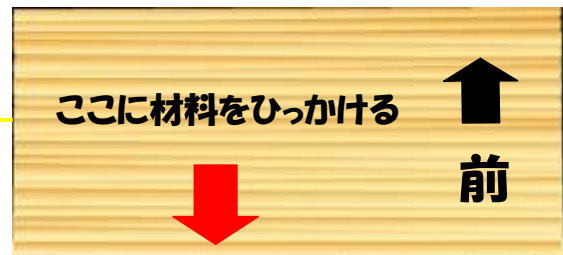
(5) アラームによる時間報告 【視点 5】

生徒は、作業に熱中してしまうと時間を忘れてしまうことから、授業では前もって生徒に作業終了 5 分前と作業終了時刻の 2 回アラームを鳴らすことにしている。そうすると生徒は、切りのよいところで作業を終わるようにしたり、少しペースを上げたりする。また、5 分後すぐやめられるような作業内容に切り替えたりして、作業終了時刻には、ほぼ全員終われるようになる。教師からの「早く終わりにしなさい」という余計な指示もほとんどなく、慣れてくると終了アラームが鳴ると自然に片付けや掃除を始めることができる。



(6) わかりやすく、間違えにくい補助教具・工具の工夫【視点10、11】

① 工作椅子の工夫→椅子の向きや材料の固定の仕方を表示した。



② のこぎりの工夫→のこぎりの切り込み角度がわかるように刃わたり線を引いた。



4 成功へのポイント

(1) 場の構造化を常に考え、生徒が活動しやすく配慮する。いつも決まった場所に工具があり、決まった場所で作業をするなど、動作をパターン化することが大切である。床にしるしを書くなどの工夫も生徒の動線を整理することができる。

(2) のこぎり引きの姿勢と切り込み角度を指導するには工夫が必要である。のこぎりの切り込み角度が分かるように赤マジックで線を引き。木材との摩擦でマジックが、少しずつ消えていくので、たまに重ね書きをする必要があることと、切り口に多少マジックの色が付いてしまうことがこれからの改善点である。

また、書画カメラで自分がのこぎり引きしている姿を映すことによって、切り込み角度が正しいか、切っている姿勢が正しいかを確認することができる。

(3) アラームによる時間報告は、作業内容によっては聞こえない場合がある。げんのうを使った大きな音が出る場合は、それに負けない大きな音の合図が必要になる。

(4) 大型テレビは、必要のないときはOFFにしておく。視覚に入る情報量が多くなり、かえって混乱を招く恐れがある。ヒントカードにおいても学習進度によって整理し、いつまでも黒板に掲示しておかないように留意する。教室側面に掲示すると良い。

<大型テレビと書画カメラを使った発展例>

書画カメラは、かなりズームアップが可能。のこぎりの刃の観察や半田付け作業の手順など細かい部分を生徒に見せる事ができる。



書画カメラによる
のこぎりの刃の観察



4 高等学校・古典の実践

「漢文：史記『項羽と劉邦』」

実践の概要

漢文についての学習は、中学校時の学習量にも差がみられる中で、1年次に書き下しの基礎と故事成語に触れた程度である。今年度から教科担当となったが、当初から、授業では2人1組等で考えさせたり相談させたりする活動を展開し、生徒もそのスタイルに馴染みつつある。漢文の学習にもそれを活かしながら、視覚、聴覚や個人差への配慮を取り入れることで、少し長い漢文に触れながら漢文を読む力の向上をはかっておきたいと考えた。

3年間クラス替えない外国語学科2年生の出席番号前半クラスで、生徒同士は気心が通じており、学習環境としてルールとリレーションは定着している。文系大学を希望する生徒が多いと思われるが、古典が受験科目に必要なかどうかの見極めはまだできていない。古典文法の定着には個人差があるものの、授業の取り組みは意欲的である。

1 単元（題材）について

(1) 単元観

「史記」、特に「項羽本紀」は「史記」の中でも最もよく知られ親しまれてきたものである。項羽と劉邦を中心に多彩な人物が登場し、劇的な描写や巧みな人間像の表現、見事な構成など、簡潔で力強くかつ美しい表現を味わうことができる。生徒が物語として話の展開を楽しみながら、漢文の学びについて積み重ねていくことができる教材である。

(2) 本単元の意図

1学期から2学期前半までは、古典文法を中心に1年次の復習の上に基礎的な事項の確認を行った。古文の読解によりやく慣れ始めたところである。2学期末は学校行事と定期考査までの授業数との兼ね合いから漢文に取り組むことになり、漢文学習初学者の教材として「史記」（鴻門之会）を選んだ。書き下し文、現代語訳、基本句法、読解を行うのに適している。一方で、生徒にとって長文の漢文に触れるのは初めてであるため、やや抵抗感を持つ生徒がいると考えられた。そこで、きちんと訓読できることが大切だと考え、教科書ではなくA3用紙を縦方向で3分割し白文、口語訳、ポイントの整理を1枚に収めたプリント、書き下し文（ひらがな）プリントを使用して、生徒の漢文への苦手意識を和らげながら着実に理解を深める（わかる）ことを意図した。

(3) 本単元の目標

- ・長文の漢文を正確に音読することができるようになる。
- ・漢文の句法に注意しながら正確に現代語訳できる。
- ・文脈をたどり、登場人物の関係や主人公項羽の心情や性格を理解する。
- ・『史記』の文章の優れた表現を味わう。

2 本時の学習指導の実際

(1) 本時の目標

- ・書き下し文のルールに従って、白文に訓点を施すことができるようになる。

(2) 展開

過程	ねらい	学習活動	留意事項（◆UDの視点）	評価
導入 5分	漢文学習のモチベーションアップ	プリント類の確認	◆本時のめあてと授業の流れについて説明（視点②⑧⑨）	観察
展開 42分	音読で漢文のリズムになれる。	音読活動 （個人→2人1組） ①のみ	音読後に、「ヲ、ニ」の2つの助詞に留意。	観察
	訓点の基礎を確認する。	白文に訓点をつける。 （個人→2人1組）	◆（視点⑤⑥⑦⑨⑩） ・鉛筆での記入。正解を赤ペンで記入。 ・返り点の基礎、書き下しのルールを確認。 ・正解率が低い場合は解説の時間を割り、なぜ間違えたのか気づかせ、弱点を強化。	プリント 観察
	訓点の基礎を確認	②～白文に訓点をつける。 （個人→2人1組）	同上	プリント 観察
	書き下し文を作る。	①～書き下し文を作る。 （個人→2人1組）	◆（視点⑧⑨⑩⑪⑫） ・書き下しの5ルールを参照。 （書かない字／助動詞・助詞） ・正解率が低い場合は解説の時間を割り、なぜ間違えたのか気づかせ、弱点を強化。	プリント 観察
	語句、要点を正確に理解しているか確認する。	語句や句法について説明を聞き、メモを取る。	◆語句や助動詞、句法の説明を板書。 （視点⑦） ・必要な箇所は口語訳を参照。	プリント
まとめ 3分	本文の理解をより定着を促す。	書き下しのルールや、内容把握に関する質問を口頭で行い、要点を押さえているかを確認。	生徒の状況に応じて、全員一斉に答えたり、正解と思われるものに挙手。	観察

3 ユニバーサルデザインの視点

(1) 穏やかな声で授業を行う（視点②⑧⑨）

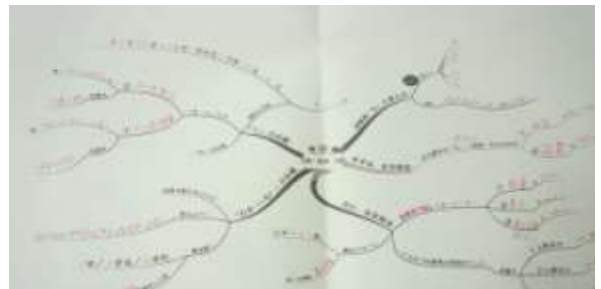
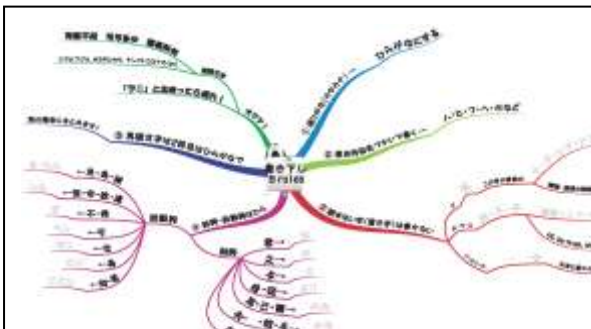
授業では抑揚は大切にしますが、不必要な大声や怒声は出さない。指示する時は「近くに寄って」「穏やかな声で」「静かに言う」ことに気をつけている。生徒を指名する際も基本的には「くん、さん」を付ける。これは、生徒を尊重するとともに、活動への参加を促す意味でも有効だと思う。これらのことの意図については、年度当初の授業開始時にいくつかのエピソードと主に生徒に説明している。



(2) 生徒が「わかる」ことに焦点をあてる（視点⑤⑥⑦⑨⑩）

生徒がその時間の授業内容をその時間に「わかる」ことをゴールの1つと考えている。そのためのわかりやすく伝える技術について、「分かりやすい…技術」シリーズ（講談社ブルーバックス、藤沢晃治著）の中から「ゴールを先に示す」「生徒をみる」「情報を分ける」「欲張らない」「イメージの多用」「一区切りを小さく」などを参考にしている。

また、授業内容の整理や記憶のツールとしてマインドマップを活用している。これは、複数の参考書に掲載されている内容を、1枚の用紙に整理できる点と色で強調することで暗記が容易くなるという点で効果が高い。多くの生徒にとって、「わかる」と「使う」ことを繋ぐよいブリッジになっている。



左は、今回の授業の前に書き下し文のルールを5つにまとめたマインドマップ。右は、暗記すべきポイントを空欄（または薄く印刷）にして生徒に配布したもので、生徒には赤ペンで記入（またはなぞり書き）させる。赤ペンと赤シートで暗記する生徒の文化を活用した。

(3) 視覚、聴覚の活用とペアでの学習（視点⑧⑨⑩⑪⑫）

教科書に記載されている訓読文を書き下し文にしていく展開に取り組むと、考えるのではなく板書を写す活動に偏りがちになることがある。

生徒が漢文と向き合う時間を確保するために、漢文学習の個人差に配慮しつつ、一人ひとりの生徒が考える時間を多く設けることを意図した。耳から入る書き下し文の音読と目から入る白文の照合、ひらがなで書かれた書き下し文から語句の読みや訓点（返り点、送り仮名）の類推、2人1組での類推、照合などを、プリントを使って行った。

このペア学習はわからないことや疑問に思ったことを確認できるだけでなく、教え合うことで自分の理解を高める効果もある。さらには教師への質問につながり、わからないままにしま



い効果もある。

4 成功へのポイント

※実施する上でのポイント

授業開始にあたって、口頭でその授業時間の使い方を最初に提示するようにしている。授業の終わりに、ここまでやった、できたと振り返ることもある。また、指示にあたっては、「見て（板書でヒントや解法のプロセスを共有する際）」、「考えて（自分で問題に取り組ませる際）」、「書いてみて（2人1組で相談させる前／とりあえず書かせることはとても大切）」のようにシンプルな方法がよい。簡単な指示でも、1人の教師の指示に生徒全員が従うムードは授業のルール確立に欠かせない要素だと考える。

「わかる」ことに焦点をあて、「できる」に繋げていくことを念頭に授業を組み立てているが、その前提に「楽しさ」を位置づけている。マインドマップは見て楽しいものだし、場面のイメージ化やイラストなど視覚的な工夫を生徒たちは好む。学びのエンジンを回すための工夫を脱線しすぎに留意しつつ自分自身も楽しんでいる。この点は教師と生徒、生徒同士のリレーション形成に大いに役立っていると思う。

以上のように、ルールとリレーションを成立させることは、恥ずかしさや不安を取り除く効果がある。ひいては授業内外での教師への質問や生徒同士の気兼ねないペア学習を容易なものにしていると考える。

プリント教材は、こうした授業構成を成立させるためのツールだと考える。

※応用・発展例

研究授業のアンケートで、「生徒の言葉を拾い、全体に繋げる配慮があった。落ちこぼれがいないと感じた」「生徒が喋りたくなるタイミングが無い。一人でじっくり考える時間が確保されていて良い」「漢文の授業でここまで生徒に考えさせるという視点がよい」「2人組から4人組へと発展させてもよいのでは」という感想があった。

研修会のように投影機を用いて、アニメーションを適度に取り入れたプレゼンテーション形式で授業を行える環境があれば、生徒とのかかわり、生徒の活動、時間の使い方や解法のプロセスの共有などに更なる創意工夫が可能になると思う。協調学習や授業のユニバーサルデザイン化などの実践に今後も学び続けたい。

※生徒の様子

漢文単元の1時間目の授業であり、生徒にも戸惑いがあったようだ。同学年の他クラスでも1時間目は同じ進度でしか授業を展開できなかった。しかし、どのクラスも、次第にひらがなの書き下し文を見て（聞いて）白文に訓点を施していく作業はスムーズにできるようになり、刺激や量の点でも漢文の授業のリズム感やペースは共有されていった。

同時に、それでも漢文が苦手な生徒の存在が浮き上がり始めたので、やや難解な箇所は板書説明で再確認したり授業中に個別に声かけしたりすることなどで個別の配慮を行った。

書き下し文の読解は、文章自体が難解ではないし古文での授業で慣れ親しんできた形式であったこともあって、ストーリーの面白さを味わうことができたようだ。

5 高等学校・体育の実践

「長距離走」

実践の概要

①ユニバーサルデザインを取り入れた意図・ねらい

長距離走は、多くの学校が長距離走大会などといった学校行事とリンクさせて行っているが、球技などと比べると、生徒のモチベーションを保ちづらい単元である。また、授業運営は決められた距離を決められた回数だけ走らせることに主眼がいてしまいがちになりやすい。さらに、長距離走を避けるための欠席や見学が多く出てしまう学校では「足りない分は補習走で走らせ、走りきらなかったら欠点」などといった指導になりがちである。

このような現状を改善するためには、長距離走の単元の「正の特性」ともいえる、自己のタイムの向上から体力を実感する、仲間と競い合うなどといった部分を引き出すことが必要であると考え、ユニバーサルデザインの視点を取り入れることにより生徒が前向きに取り組める授業作りを目指すことをねらいとした。

②学級の概要

体育委員中心にまとまりのある授業のできるクラスであり、球技などは前向きに取り組むことのできるクラスである。しかし、長距離走に関しては体型や健康面などの問題により走力の劣る生徒や、全力を出し切れない生徒、2人以上で歩いてしまう可能性のある生徒などは存在している。

1 単元（題材）について

(1) 長距離走の指導について

毎年11月中旬に行われるマラソン大会（男子13km、女子11km）に向けて、9月から週1回を目安に計10回、男子が約5km、女子が約4kmを走っている。体育科内共通の平均タイムによる5段階での評価規準が決まっており、それをもとに個人差に応じて目標を設定して授業に取り組むことができるようになっている。長距離走のねらいとしては、走力の向上だけでなく、持久力の向上による心肺機能の向上、さらには精神的な面をも鍛えることなどもあげられる。

(2) 本単元の意図

マラソン大会に向けて体力の向上を図り大会での完走を目指すこととともに、苦しい長距離走を一生懸命走ることによって精神面体力面両面からの成長を促すことも意図している。

(3) 本単元の目標

評価規準では、男子が約5kmを36分以内、女子が約4kmを33分以内で走ることを目標としている。さらに、各自が自分の能力を高めてよりよいタイムを目指して体力向上を図っている。さらに、10回という決められた回数をやり切ることも、目標の一つといえる。

2 本時の学習指導の実際

(1) 本時の目標

- ・マラソン大会前（今年度）最後の授業なので、自分のベストタイムを目指して走る。
- ・同じ目標の仲間と競い合い、高めあえるような走りをする。

(2) 展開

過程	学習活動・予想される反応	指導上の留意点（◆UDの視点）	評価
導入 10分	整列・準備運動・補強運動・挨拶・出欠確認 （体育委員主導で主体的に行う） ルール「つるまない、歩かない」の確認 各自の目標に応じてハチマキを選択する。 36分以内＝赤 31分以内＝黄 28分以内＝緑 24分以内＝青 （能力とは見合わない色を選択するかもしれないので、その際には声かけをする）	通常の授業と同じ型式なので、出来る限り体育委員に任せて質の向上を図る。出欠確認および、説明時は必ず静かにしてから進める。（◆2, 3, 5, 6, 8, 9, 12） 「つるまない、歩かない」は生徒たちに声を出させて意識付けする。（◆3, 5, 10） 評価規準の説明には大きめの色分けした表を用いる。（◆1, 3） できるだけハチマキは生徒たちが主体的に選んだと思えるように声かけをする。（◆6, 10, 11）	観察
展開 36分	赤（ハチマキの色）からスタートする。 5分後に黄、その3分後に緑、その4分後に青といったように、目標タイムに合わせた時差スタートをする。 （生徒たちは、能力の近い生徒と競い合いながら走る） ゴールしたら時差スタートを差し引いたタイムを報告する。	タイムを読み上げるのではなく、大きなタイマーを使用し視覚によってラップタイムが確認できるようにする。（◆1） 計算が苦手な生徒のために、ハチマキをつけたストップウォッチを各色別に動かしておく。（◆1, 11） 逆走をしながら、健康観察や取り組みの観察、さらには声かけを行い意識の向上をはかる。（◆9, 10, 12）	観察 タイム
まとめ 4分	整列・整理運動・まとめ （ゴール後は散らばってしまう生徒が多いが体育委員の声かけで順次集合し整理運動までできるように期待したい。）	走った後の集合はなかなか難しいが、出来る限り体育委員の声かけで集まり、整理運動ができるように働きかける。（◆2, 3, 5, 9, 10, 12） 著しくタイムが向上した生徒や、ゴールがトップだった生徒（目標タイムにくらべて速かった生徒）を名前を挙げて評価する。（◆10, 11）	観察

3 ユニバーサルデザインの視点

(1) 時差スタートの活用（視点6，10，11）

生徒の目標や能力に応じて、目標タイムを決める。目標タイムに応じて色を変えたハチマキを身につけ目標タイムを明確にする。ハチマキの色（目標タイム）は生徒に主体的に選択させる。24分以内を目指すものが青、28分以内が緑、31分以内が黄、36分以内が赤とする。目標タイムの遅いものから時差スタートさせゴールがそろうようにする。

ア 能力の近い生徒と一斉スタートするため、競いやすくペースもつかみやすい。

イ 遅い生徒が遅れていく絶望感を感じず、逆に追われてくる緊張感があるため能力を発揮しやすい。さらに目標タイムを大幅に上回ることができれば、トップでゴールすることもできるので意欲が向上する。

ウ 走力のある生徒も手抜きをすると間に合わなくなるため全力を出し切ることができる。



外周男子評価選手		
順位	タイム	1周あたり
5	~23'59	4分48秒以内
4	24'00 ~27'59	5分36秒以内
3	28'00 ~30'59	6分12秒以内
2	31'00 ~35'59	7分12秒以内
1	36'00 ~	

(2) 大きめのタイマーと評価規準の掲示（視点1，3）

大きめのタイマーを掲示することにより、読み上げるよりも生徒に分かりやすくなる。また、評価規準を掲示することにより、評価を上げたいという欲求を促し意欲の向上につなげる。



(3) 逆走しながら指導をする。（視点8，9）

最初の組（一番遅い生徒）をスタートさせた時から生徒とは反対回りで外周を走りながら、タイムを読み上げたり、声をかけて励ましたり、健康観察を行う。逆回りをすることにより

1周あたり2回生徒と顔を合わせることができる。また、一緒に走ることにより、「がんばれ」など言葉かけをした時に、生徒が一体感を感じてくれるので効果が高い。さらに、校舎の裏側を走っている生徒の指導や健康観察も行うことができる。



(4) 主体的で規律ある準備運動と話を聞く態度の習慣化（視点2，3，5，6，8，9）

準備運動をそろえて声を行うこと、出席確認や指示を静かに聞く習慣をつけることにより、落ち着いた気持ちで授業に取り組み、指示を聞き洩らすことが減ることにより、楽しく安全に授業に参加することができる。



(5) 合言葉は「歩かない、つるまない」

（視点3，9，10）

これを徹底するだけで私語をしながら歩く生徒はいなくなる。結果的に全員が自分の能力を出し切る形で走るようになる。

4 成功へのポイント

(1) 実施する上でのポイント

実施するにあたっての最大のポイントは、日常の授業から最低限の授業規律が確立されており、教員と生徒の「教える者、教わる者」の関係ができあがっていることである。ハチマキの色を選ぶときに、能力の高い生徒が手を抜くために遅いタイム設定を選ぶ、友人と一緒に走りたい（最悪の場合しゃべりたい、歩きたい）などといった理由で選ぶなどしてしまうと、本来の趣旨から外れて意味のないものになってしまう。あくまでも、一生懸命取り組みやすくするための工夫である。体育の授業に限らず、どんな指導の手法であってもこの基本の部分があってこそのことであると考えている。

(2) 応用・発展例

- ア 個人カードの活用：毎回の目標タイムと実際のタイムを記録する個人カードを活用することにより、生徒自身の自分のタイムに関する興味を引き出すことができる。
- イ タイムの細分化：今回の授業では評価規準をもとにタイムわけをしたが、2分あるいは1分刻みの時差スタートを行い細分化することにより、さらに個人の能力に合わせることができる。ただし、施設や生徒の能力の問題などもあるので、状況に応じて運営に無理のない範囲でのグループ分けがベストではないかと考えている。
- ウ 問題点、改善点：大きめのタイマーがグループの数だけ用意できればより生徒からタイムが分かりやすくなる（費用などの面から現実的には厳しいかもしれない）。高い目標設定でスタートしたものの、途中で腹痛など体調不良を起こしてしまった場合に、ゆっくり走っていると授業時間内に決められた周回数を走りきれなくなってしまう。
※手を抜くためや友人と一緒に走るためのグループ分けになってしまうと逆効果。

(3) 生徒の様子

全10時間の長距離走の単元のうち、5時間目からこの時差スタートを導入した。結果として、5、6時間目（時差スタート導入後2時間）において73.5%（34人中25人）の生徒が自己ベストを更新した。特に、最も取り組みが安定せず、準備運動、服装の、さらに長距離走における授業態度に大きな課題を抱えていた生徒Aのタイムの変容が最も顕著であった。

※時差スタート導入前の平均タイム〈34分30秒〉→導入後〈29分15秒〉

Aは最初の時差スタートでは目標36分以内である赤ハチマキのグループで走った。しかし、2回目からは自ら31分以内である黄ハチマキを選び、その後自己ベストを出した次の授業で28分以内の緑ハチマキを選択したものの大幅に遅れてしまい、それからは黄ハチマキをしてそのグループの先頭を切って走っていた。

さらに、1年次では健康面の不安から長距離走の授業を欠席や見学しがちであった生徒は、検証授業の際に、参観者のインタビューに対して、「時差スタートのおかげで追いかけるプレッシャーもあり速く走れるようになったので良かった」と話していた。また、各グループのお互いの競争意識が明確になり、上位層（青ハチマキ）の生徒たちは、毎回の授業がマラソン大会のような雰囲気で行うことができた。

ハチマキの色を選ぶ時には、生徒同士がお互いの色に興味を持ち始め、能力のわりに低いグループに入ろうとしている生徒に対しては、生徒同士で指摘しあい適切なグループへと引き込むような場面も見られた。

結果として、検証授業後のアンケートでは、時差スタート導入後に関して、「導入前よりとても頑張れるようになった」「導入前より頑張れるようになった」を選んだ生徒が100%であった。以上のように非常に幅広い生徒に対して効果的であった。



6 特別支援学校・小学部・教科別の指導「図画工作」の実践 「紙でいろいろなものを作ろう」

実践の概要

学級に在籍する児童は、2年生5名である。自閉的傾向のある児童が3名、ダウン症児が1名、知的障害を主たる障害とする児童が1名である。簡単な会話や、音声での指示理解ができる児童から、視覚的な支援や身体的支援を必要とする児童まで、多様な実態がみられる。作業面についても、感触遊びを楽しむ児童から、紙やセロハンテープを使って自分で工作ができる児童まで実態に大きな差がある。

このような幅広い実態差がある学級集団で行う授業において、一人一人に対し、より教育的効果の高い実践を行うため、今回示されたユニバーサルデザインの12の視点を取り入れることとした。また普段何気なく行っていた支援等を、改めて視点の項目ごとに振り返る場になるとも考えた。そして検証授業を通し、多くの目でユニバーサルデザインの視点を取り入れる有用性を確認することで、よりよい授業づくりのための取り組みの一つとすることをねらいとした。

1 題材について

(1) 題材観

本題材で使用する色画用紙、折り紙は、切ったり貼ったりして加工しやすく、児童にも身近な素材であり、授業の中で扱うことに抵抗が少ないと思われる。一方で、紙を使った工作は単調な作業の繰り返ししか、複雑な工程が必要になるか、という二極化しがちな面がみられ、児童が自信を持って取り組みつつも興味を引くという題材設定に課題があった。

そこで紙を丸め、型に入れるという工程は継続しつつ、できあがりの作品が異なるというアプローチで題材に迫ることとした。つまり自信や見通しを持って取り組める工程は残しつつ、新たな作品づくりで意欲を引き出すという工夫である。また、紙を丸める工程についても、児童の実態に合わせ、折り紙を丸めるといったかたちや袋に入れるという作業に変更し、できあがる作品名や扱う素材は同じにしつつも個人差に配慮するようにした。

(2) 指導観

本題材では、興味に応じた作品設定や、完成型や使い方が分かりやすい教材を準備することで、学習に向かう時間や集中力を伸ばしていきたいと考えた。また、非常に幅のある児童の実態に合わせた指導を行うため、「紙」を扱うという枠の中で各々に適した課題を設定しつつ、教員が最後に共通のパーツを渡すことで、同じ題材の作品が仕上がるようにした。

児童が楽しみながら意欲的に取り組める活動を設定することで、自然ときまりを意識し、身に付けられるようにしていきたい。そして活動を通して、日常生活場面でもきまりや約束を守ったり、教員の指示を受け入れ行動したりできる態度の下地をつくっていくとともに、手指の操作性の基礎やものをつくる楽しさ、鑑賞の態度を育てていくことをねらいとした。

(3) 本題材の目標

- ・紙を様々に加工し、作品を仕上げる。
- ・見通しを持ち、最後まで作品づくりに取り組む。

2 本時の学習指導の実際

(1) 本時の目標

- ・紙を丸めたりつなげたりして、作品を仕上げる。
- ・最後まで作品づくりに取り組む。

(2) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点と手立て (◆ユニバーサルデザインの視点)	備考
導入 5分	○集合・あいさつをする。 ○本時の内容を知る 「見本ビデオ」を見る。	・T1は児童が十分注目できているか確認し、挨拶を行う。 ◆テレビで教員の制作の様子を映し、工程を分かりやすく伝える。【視点5、6、8、9】 ◆映像の中で手順表も同時に示し、制作の手がかりとなるようにする。【視点5、6、8、9】	・デジタルカメラ ・テレビ ・ケーブル ・手順表
展開 5分 5分 5分 5分 5分 5分	○制作の隊形に移動する。 ○きょうりゅうを作る。 1) 紙を切る。 2) 紙を丸める。 3) きょうりゅうの型に入れる。 4) 紙同士をホチキスでとめる。 5) 頭、手足、尾のパーツをつける。	◆ついたてと机の移動で学習に臨みやすい場の環境を整える。【視点1、2】 ◆切る枚数、切る回数、扱うはさみ等を変えることにより、それぞれに合った活動を行う。【視点10、11】 ・紙を入れる区切られた箱を用意し、何個作ればいいのか、視覚的に分かりやすく示す。 ・「できました」の報告を促し、それを受けて型を渡すようにする。 ◆紙の丸め方、筒状の紙を作る数、セロテープを予め切っておくか自分で切るかの変更によって、それぞれに合った活動を行う。【視点10、11】 ◆丸めた紙は区切られた箱の中に入れていく。箱が全部埋まるまで行う。【視点5、6、8、10、11】 ◆恐竜の胴体部になる型に、丸い印をみながら紙を入れていく。【視点5、6、8、10、11】 ・ホチキスの使用は今回ねらいとしていないため、教員主導でとめていく。やりたい児童には一緒にとめるように促す。 ・とめる場所が分かりづらい場合は、見本を示したり、その場で印をつけたりする。戸惑っている時は支援し仕上げる。	・はさみ ・ばねばさみ ・色画用紙 ・折り紙 ・プラスチックケース ・紙を丸める補助具 ・丸めた紙を入れる箱 ・セロテープ ・きょうりゅうの型 ・ホチキス ・各部パーツ
まとめ 5分	○導入の隊形に移動する。 ○作品を互いに見合う。 ○あいさつをする。	・スキニシップも交えつつ、わかりやすく賞賛する。 ・T1は児童が十分注目できているか確認し、挨拶を行う。	

3 ユニバーサルデザインの視点

(1) 「見本ビデオ」を用いた、視覚的に分かりやすい導入と手順表

事前にデジタルカメラで撮影した教員の動画をテレビで流し、導入としている。図工だけでなく生活単元学習の掃除等でも、児童の注目の度合いや、その後の活動の積極性が高まった。様々な授業で扱うことで、児童が学習の場に集合するサインともなっている。また、今回の授業では合わせて手順表も示すこととした。 【視点5、6、8、9】



(2) 作り方、作る量が分かりやすい教具

紙を筒状に丸める道具は、児童が一人でも扱いやすい形に整えた。ただの筒だけであった時はのぞいたり振ったりという様子がみられたが、そのような行動はほぼみられなくなった。また、この道具が出てくると、「紙を筒状に丸めるんだ」ということが児童に意識付いてきている。

丸めた紙を入れる箱は、何個入れればいいのか分かるように区切られており、集中が途切れがちな児童も終わりまで作業に取り組むようになった。この形は、「あと〇個作ろう」という教員側の働きかけもしやすいものである。恐竜の胴体部になる“型”も、一目見てほぼやることが分かるようになっており、児童の主體的な活動を引き出すことができた。

【視点5、6、8、10、11】



ただの筒→丸める補助具へ



紙を入れる箱



恐竜の型

(3) 同じ題材、素材を扱いつつ、活動量や内容、支援具を個々に配慮した授業内容

今回は皆同じ“きょうりゅう”を作り、“紙”という素材を扱いつつも、紙を異なるものにしたり、作る量を各々に合わせ変えたりすることによって、個人差に配慮しつつ皆で同じ課題に取り組むという授業を設定することができた。また“紙を切る”という一つの活動の中でも、切る枚数、切る回数（一回で切れるように切れ目を入れておく）、扱うはさみ等を代えることによって、それぞれに合った活動が設定できるように配慮した。

【視点10、11】



完成品の恐竜（一例）

(4) ついたてや机を用いた場の構造化

学習の導入の場を基本的にすべての時間で同じにすることで、児童が活動の始まりを意識しやすい場の設定となっている。また背後に教卓や作業台を置いて場を狭めたり、ついたてで学習に必要な刺激をシャットダウンしたりすることによって、学習にスムーズに向かえるように配慮している。【視点1、2】

ついたて



4 成功へのポイント

※実施する上でのポイント

検証授業を行う前に、低学年ブロックで事前に授業を見合い、多くの意見を聞いた。また、指導案も多くの教員の目を通してよりよいものを作り上げた。教員間で協力し、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた実践を吟味していくことがポイントの一つである。

また、“12の視点”ありきではなく、児童の実態に一度立ち返ってから、改めて視点と照らし合わせていくことで、有効な授業の工夫が見えてくるが多かった。

※応用・発展例

授業研究会では、見本ビデオをさらに発展させ、流れを示したい場合は動画、よく注目してほしいところは静止画、必要に応じたズームなどを使い分けるとより良いのではないかと、という意見を頂いた。

検証授業後の実践では、丸めた紙を縦に積み重ね、緑の画用紙と組み合わせることで、“木”も作製した。最終的には、作った恐竜や木を組み合わせ、“恐竜ワールド”を作り上げた。



※児童生徒の様子

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた効果的な実践は、事前の入念な準備があつてこそ、児童たちの主体的な取り組みにつながるということが、研究会でも再確認された。

工作の得意な児童は、この題材の取り組み後、自分で紙を丸めてオリジナルの作品をつくるようになった。“個人差への配慮”の効果が良い形で表れたと考える。



7 特別支援学校・高等部・「作業学習」の実践 「紙工芸、文化祭頒布を成功させよう」

実践の概要

本校高等部の作業学習では、全学年を作業班毎に編成し、生徒の実態や課題に応じた学習に取り組んでいる。紙工芸班は1年生5名、2年生7名、3年生4名、重複学級生徒2名の計18名で、主たる障害は、知的障害に加えて自閉症や自閉的傾向、ダウン症の生徒等、状況や実態は様々である。

生徒の中には、危険認知が難しく配慮を要する生徒、言葉かけのみや、ジェスチャーで理解して活動出来る生徒、見本を見ながら地道に取り組む生徒、手を添えて次の活動にうつれる生徒など実態の幅が広い。

年度の後半になると作業工程を理解して活動できる生徒は増えるが、準備や片付けの取り組みが難しく、言葉かけを頼りに活動している状況で、学習の見通しの工夫は必要である。

そこで、ユニバーサルデザインの視点を取り入れることで、理解と活動のしやすさ、自信と見通しを持って取り組めるようにしたい。その中で自分の作業への責任・達成感が得られるよう配慮し、自信をつけ、成功体験を積み重ね、働く意欲を高めていきたい。

1 単元（題材）について

(1) 作業学習（紙工芸班）での指導について

「作業学習」は領域・教科を合わせた指導であり、知的障害教育の中心的な指導の形態の一つとして教育課程に位置づけられ、本校でも取り組んでいる。本校紙工芸班では現在、牛乳パックを再利用し、一筆せん、ポチ袋、卓上カレンダー、はがきの製作、シュレッターくずを再利用してエコポットを製作している。どの作業学習の班でも、将来の就労に向けた「働く」ための意欲・態度・知識・技能を身につけることがねらいである。

(2) 本単元の意図

毎年11月に行われる文化祭において、日頃の作業学習で生産してきた製品を保護者や地域の方々に頒布することを目標として活動を行っている。学習で作られた製品（生産物）の質や量が、文化祭頒布の成否に大きく関わると同時に、いかに「働くこと」を意欲的に捉えることができるかに関わってくる。生徒達が「達成感」「満足感」「充実感」を得るための最大の機会である。

(3) 本単元の目標

本校における作業学習では、それぞれの班の生徒の実態の幅が広く、それぞれの実態や課題に応じた作業工程に取り組んでいる。よって作業目標には個人差があるものの、本単元においては、頒布活動までに決めた製品の目標数がある。各自がその目標に向けて、意欲的に取り組むための支援が必要であり、そのためにもユニバーサルデザインの視点は重要であると考えます。

2 本時の学習指導の実際

(1) 本時の目標

- ・文化祭頒布に向けて今日作成する目標枚数を達成しよう。
- ・準備から片づけまで、最後まで責任を持って取り組もう。

(2) 展開

時間	学習活動	学習活動・予想される反応	指導上の留意点 ◆ユニバーサルデザインの視点	評価
授業開始前	目標決め	〈目標を決め、モチベーションを高めよう〉 →前回の作業を基に目標を設定することができる生徒もいるが、設定が難しい生徒も多い。言葉かけなど支援が必要。	◆黒板に目標枚数を記入することで、目標意識をより一層高める。【視点7】	・目標が設定し、意識できたか
5分	1 挨拶及び活動確認	〈今日やるべきことを確認しよう〉 →姿勢の保持が難しい生徒や、全体での言葉かけだけでは体を向けるのが難しい生徒もいる。STの声かけ等支援が必要。	◆本時の目当てと授業の流れについて、掲示物を使って説明する。【視点3、5、7】	・今日の取り組みを理解できたか
35分	2 作業	〈目標達成に向けて作業に取り組もう〉 →多くの生徒が意欲的に活動するが、作業工程に自信のない生徒や、集中力が切れてしまう生徒も出てくるため、生徒のモチベーションを持続させるような言葉かけや支援を行う。	◆手順表で自信をつける【視点4、10】 ◆黒板やホワイトボード確認で見通しを持ち、作業に取り組む。【視点5、7、8】 ◆補助具を活用し、作業に自信を持ち意欲向上を図る。【視点11】	・手順表が必要な生徒は、手順表が意識できたか ・目標を意識しながら作業に取り組めたか
10分	3 休憩	〈作業の合間に休憩をとろう〉 →休憩時間になっても作業に夢中になり、休憩を忘れてしまう生徒もいるため、言葉かけが必要。	◆タイマーを用意し、休憩時間に気づき周囲に声がけできるようにする。【視点5】	・リーダーの号令で休憩時間を意識できたか
35分	4 作業 片付け	〈目標枚数(回数)の達成に向けて作業に取り組もう〉 →多くの生徒が意欲的に活動するが、作業工程に自信のない生徒や、集中力が切れてしまう生徒も出てくるため、生徒のモチベーションを持続させるような言葉かけや支援を行う。 〈自分たちが使ったものを片付けよう〉 →役割分担を意識して作業を進めることが出来る生徒もいるが、何をすべきか戸惑っている生徒がいる場合には言葉かけが必要。	◆手順表を用意し、作業に対する自信をつける。【視点4、10】 ◆黒板やホワイトボードで目標を確認することで見通しをもつ。【視点5、7、8】 ◆個別に補助具を活用し、作業に自身を持つことで意欲向上を図る。【視点11】 ◆手順表、役割分担表を用意し、確認しながら作業を行うようにする。【視点5】	・手順どおりに進めたか ・疲れたり集中できない時、再度目標を意識しながら作業できるか ・ルールどおり自分の道具を片付け、掃除ができたか
5分	5 ファイル記入	〈今日の成果をファイルに記入しよう〉 →自分の成果を記録し、これまでの作業と比較できる生徒もいるが、記入が難しい生徒は支援しながら記録を行う。		・自分の成果を記録できたか
10分	6 成果発表	〈今日の成果を発表しよう〉 →自分自身で黒板に評価カードを貼ることで自己評価し、次の作業へのモチベーションを高める。	◆評価カードを黒板に貼る。【視点7】 ◆黒板の表に作業の成果を示し、自分たちの作業量を評価する。【視点8、12】	・自分の成果を黒板に示せたか ・自己評価し次の目標ができたか

3 ユニバーサルデザインの視点（12の視点より本時で取り組む視点）

（1）場の構造化

これまでどこに何があるか分かりにくく、今回、物品の整理整頓（掃除用具、文房具、作業材料等）をすることで、道具の置き場や活動場所が明確になり、見通しを持って取り組めるようになった。



（3）ルールの確立

作業に必要な手順書を用意した。ほとんどの生徒は、作業の流れを理解しているが、見通しの持てない生徒が積極的に参加できるように工夫した。



（7）板書の工夫

これまで名前のみを黒板に記していた。今回、板書に作業目標、作業結果、文化祭までの製作目標を加えることで、生徒はより目標意識を持つことができるようになった。また、目標が達成できたか振り返り、評価することで次回の作業への意欲を高めることをねらっている。文字の太さ、大きさ、書式も遠くから見やすいものにした。



（11）個人差への配慮

本検証で挙げた事例対象生徒をはじめ、何名かは授業の参加に配慮が必要である。そのため個人の実態に応じた、補助具の活用（失敗の減少）、すき具、計量道具の改良（作業の精度向上）、目標の設定（作業効率化）（見通しをもてる配慮）をすることで授業参加への意欲向上を図る。



4 成功へのポイント

今回の改善点①～板書の工夫①～



黒板は名前や作業班の掲示になっていましたが、最も注目を集める場所なので、班構成だけでなく①作業内容、②目標回数(個数)、③評価(成果)も分かるよう工夫しました。始まりの目標設定や終わりの成果の発表を通して作業への意欲向上を図ります。

今回の改善点②～板書の工夫②～



また、黒板のわきには、中・長期的な目標(今回は文化祭)や目標個数に対して、また、文化祭まであとどれくらいかを一目見て分かるように図示しました。意欲を継続的に引き出すため、学習成果を目で見て理解できるよう配慮しました。

今回の改善点③～手順書～



紙すき班では、複雑な工程をほとんどの生徒はしっかり覚えて作業を行っています。覚えるまでに教員の根気強い指導の成果です。そこで、今後のためにも確実に作業工程の確認し、すすめるために一目で見える手順書を用意しました。

今回の改善点④～紙すき工程の配慮～



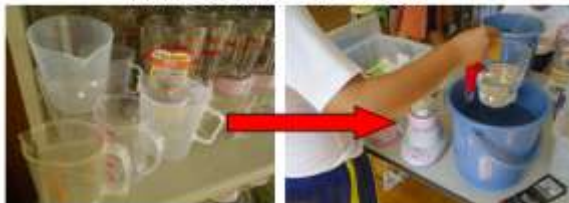
すき具は大変良く工夫されており、製品の精度向上になっています。工程の途中、すき具を水面から引き上げる時に木の上(わく)に乗せるのが難しい生徒のために、隣に予め水切り用の容器を用意して移すだけの工程にしました。

今回の改善点⑤～回数表の改善～



回数表は、生徒の意欲を高めるには有効です。そこで周囲から見えるよう配置し、確実に記録でき、かつ一目で分かるよう、埋め込み式にしました。また、教員がどこにいても回数を把握し、声掛けしやすい環境に配慮しました。

今回の改善点⑥～計量の改善～



「取り組みやすさ」を意識して、ミキサーカップに赤ラインを入れましたが難しい生徒がいました。そこで、ミキサーカップに基準を設けるのではなく、確実に適量の水を1回で入るよう計量カップに加工しました。これはミキサーに入れる水量が安定しないためです。汲みあげた時に定量になるよう水が抜ける仕組みです。

今回の検証で分かったことは、ユニバーサルデザインの視点を取り入れることで、①作業工程を構造化し効率よく作業に取り組むようになった。②一人で自信を持って取り組むことの出来る手立てとなった。③作業の見通しを高める手立て(手順表・回数表・タイマー・テープの目印など)となった。④コミュニケーション能力を高める手立て(感想発表ボード)となった。

児童生徒の「学びやすさ」「分かりやすさ」の視点に立ち、学習環境の構造的な観点から改善を試みた。特別支援学校の個に応じた支援のための学習環境を工夫は、通常の小中高等学校におけるユニバーサルデザインに応用できるものが多いと考える。児童生徒の「学び」を最大限に引き出すための環境づくりと同時にそのための指導も必要で、これをきっかけに授業改善について実践していきたい。

資料編

第 5 学年〇組 道徳学習指導案

授業者 〇〇〇〇〇小学校 〇〇 〇〇

平成 24 年〇月〇日 (〇) 第〇校時

在籍児童数 32 名 場所 5 年〇組教室

- 1 主題名 夢をもち、未来を拓く 1-(5)創意・進取

資料名 枇木(ひぎ)作りの里

—附木(つけぎ)から枇木を考案した宮島勘左衛門—

(出典 埼玉県教育委員会「道徳実践活動郷土資料集」平成 14 年 3 月)

2 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について

「1-(5)創意・進取」は、「真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。」とあり、小学校高学年で初めて登場する。そして、中学校の「真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。」(1-(4)真理愛、理想の実現)へと発展していく。

進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくするのは何のためか。それは言うまでもなく、自分の生活をよりよくするためである。いかなる時代においても、人は自己の人生を切り拓いていく積極性と力強さを持つことが大切である。そして、絶えず高い理想を求め、志をもって明るく生き生きと生きることが、人生に意欲をわかせる、自分の生涯を豊かにすることにつながる。

本項目が、「夢をもち未来を拓く子」(学校教育目標)の育成につながることを目指し、本時の授業を展開したい。

(2) 児童の実態について

本学級の児童は、全体的に受け身の姿勢の子が多い。この傾向は年々顕著になっており、その原因として「生活の豊かさ」「少子化」の影響が考えられる。

そこで、日頃の学級経営では、青少年赤十字の態度目標「気づき・考え・実行する」を積極的に取り入れている。「先見(各自が見通しをもった生活)」「必要最小限度の教師の指示」「自問清掃」などを通して、児童一人一人が自分で考えて行動できるように配慮している。

その結果、最近では、自分の考えで動く児童が増えてきた。また、人のよいことを素直に認め合える集団へと変わってきた。まだまだ失敗を恐れる傾向はあるが、現在は、学校祭りのクラスの出し物の準備を通して、アイディアを出し合いながらモノを作る楽しさを味わい始めている。

本項目で求められる、「困難に向かって、知恵を出し合い乗り越える、たくましい子ども」を、本時はもちろんのこと、これからの学校生活の中でも育てていきたい。

(3) 資料について

本資料の主人公「宮島勘左衛門」は郷土の偉人である。江戸時代末に生まれた人で、「枇木(経木)」を発明した人である。

嘉永年間に関東一円で竹が枯れてしまい、食品包装用の竹皮が手に入らない時期が続いた。農業で家族を養っていた勘左衛門は、かつての宮大工の経験を生かし、持ち前の研究心と粘り強さで「枇木(経木)」を発明する。その年月は、最初の発案から完成まで5年を要した。彼の行動を一言で表すならば、「あきらめない。」の言葉がちょうどあてはまる。

本時では、以下の3場面を中心に扱う。

- ①竹皮がなくなり、村人の困り果てた様子を見て立ち上がる勘左衛門。
- ②5年もの長い間、杣木の完成を夢見て研究し続ける、勘左衛門とその家族。
- ③完成した杣木を妻と押し戴く勘左衛門の胸の内。

郷土の偉人を扱うことで、児童が親しみをもって資料と向き合えるよう、また、郷土に誇りを持てるようにと配慮し、本時を展開したい。

3 研究の視点

(1) 導入、資料渡しの工夫

本資料は歴史的 content であるため、児童はもちろんのこと、教師でも分かりにくい。そこで、関係者の協力を得て、事前に詳しい調査を行った。その結果、本時の導入で杣木の実物を見せるほか、紙芝居形式で写真を多く使った資料渡しを試みる。

(2) 主人公の心情を追った板書の工夫

本資料は、主人公が自分自身と葛藤する content である。そのため、明確な「相手方」が存在しない、特異な資料と言える。そこで、主人公の気持ちの変化が時系列的にわかるよう、横書きの板書を試みる。

(3) 偉人を扱う際の「自分を見つめる時間」の工夫

偉人を扱う資料の一番の問題は、主人公と子どもの距離が遠いことである。児童にとって、話し合いの最後まで「他人事の話」に終始してしまう危険性がある。そこで、自分を見つめる時間では、「主人公の『熱意』を『同じ人間』としてどう思うか？」と子どもに投げかけ、少しでも主人公と自分を重ねられるように配慮した。

(4) 児童の心に残る「説話」の工夫

本時の授業を印象深くするために、授業最後の説話をゲストティーチャーにお願いした。具体的には、町内で最後の杣木職人の方に、ビデオレターの形で出演していただく。

(5) 「ユニバーサルデザインの視点」を取り入れた授業の提案

(詳細は、次項を参照。)

4 ユニバーサルデザインの視点

本校は特別支援学級設置校であると共に、本学級では支援籍児童も一緒に学習している。そこで、通常学級でも手軽に実践できそうな、「ユニバーサルデザインの視点」を意識した道徳授業を提案する。

項 目	具 体 的 な 内 容
(1) 教室環境① 「場の構造化」	・話し合い活動がしやすいように、座席を「コの字型」に 配置する。
(2) 教室環境② 「刺激への配慮」	・黒板に集中できるよう、教室前面の掲示物を必要最小限にする。 ・テレビ下の教師用本棚を目隠しし、児童が気にならないようにする。
(3) ルールの確立	・日頃の授業で「分かち合い」の形式を取り入れた、話し合いの仕方を身につけるようにする。 ＜「分かち合い」とは＞ 話し合いの方法の一つで、「傾聴」する姿勢を大切にされた方法。 ①発表者以外は黙って、うなずいて聞く。（口をはさまない） ②どうしても発表したくないときは、パスしてもよい。
(4) 生活の見通し	・一日の授業の流れを前黒板に示しておき、一日の流れをイメージできるようにしておく（本学級では「先見」と呼んでいる）。
(5) 授業の見通し	・道徳の授業の流れを簡単に図式化し、教室前方に掲示しておく。
(6) 授業の組み立て	・資料文を朗読するとき、パワーポイント等を使って、文章と場面絵を映像化して示す。
(7) 板書の工夫	・話し合いをする場面絵を最初に全て提示し、話し合いの見通しを持つようにする。 ・児童の発表を板書するとき、教師が要約した内容を、色を使って見やすく板書する。
(8) 集中・注目のさせ方	・朗読の際、パワーポイントを活用する。 ・机の上には、筆箱以外の不必要な物は置かせない。 ・作業が早く終わっても、おしゃべりしないよう促す。
(9) 指示の出し方	・教師の発問は短く、的確に出すよう心がける。
(10) 参加の促進	・ワークシートを活用し、自分の考えを自由に書くようにする。
(11) 個人差への配慮	・ワークシートが書けない児童には、教師が側に行ってヒントを与える。
(12) 学級モラルの形成	・教師は、互いの「違い」を「よさ」と感じ合える学級の 雰囲気作りを日頃から心がける。

(2) 展 開

段階	学 習 活 動 ○主な発問	予想される児童の反応	*指導上の留意点 ☆評価、◆ユニバーサルデザインの視点	時間
導入	1 包装用品の実物を見て、その歴史について知る。 2 本物の杣木を見て、その発明者が郷土の偉人であることを知る。	・今とは全然違うな。 ・昔は自然のものを使っていたんだ。 ・地元になんなすごい人がいたんだ。 ・杣木を作るのは難しそうだ。	◆本時の授業の流れを掲示しておく。 *本時の資料内容を理解しやすくするため、実物を提示して説明する。 *本時の主人公が郷土の偉人であることを児童に伝え、資料への関心を持つようにする。 ◆実物を示し、触ることで注目を促す。	3分
展開	3 資料について知る。	<主人公> 宮島勘左衛門（前校長先生のご先祖） ・勘左衛門は、幼いころから工夫して物を作ることが好き。 ・勘左衛門が附木作りをしていた嘉永の初め頃、関東一帯の竹林が原因不明で枯れてしまった。 ・かつて宮大工の経験を持つ勘左衛門は、附木から杣木を思いつく。	◆範読は紙芝居形式で行い、文章を映像化して提示する。 *場面絵以外にも内容理解のための写真等を多く提示する。 *範読の中で、難語句の説明も随時挟み込む。	10分
	4 主人公の気持ちの変化について話し合う。 ①竹の皮が手に入らなくなって頭を抱えている店の様子を聞いた勘左衛門は、どんなことをかんがえたでしょう。	・この状態を何とかしたい。 ・店の人たちを助けてやりたいな。 ・このままだと買い物の時、村中のみんなが困ってしまうだろうな。 ・附木を工夫すれば、代わりの物が作れそうだな。 ・新しい物を生み出すチャンスだ。	◆すべての場面絵をあらかじめ提示しておき、話し合いの見通しを持つように促す。 ◆児童の意見を要約して板書し、場面絵と対比することで今何をしているのか意識するように促す。 *児童には、村人の困難な状況が理解できるよう、教師が補足説明を付け加える。 *困難な状況の中から希望を見出そうとする主人公の姿を押さえた上で、次の発問につなげる。	25分

	②枇木が完成するまでの5年間、勘左衛門はどんな思いで研究していたでしょう。 ③完成した枇木を妻とおしいただく勘左衛門は、どんな顔だったでしょう。 補その時、勘左衛門はどんなことを言ったでしょう。 5 自己を見つめる。 ○勘左衛門の『熱意』を『同じ人間』としてどう思いますか？	・完成まではほど遠いなあ。でも、あきらめないぞ。 ・あきらめようか。でも、がんばらないと。 ・道具が完成したぞ。あと少しだ。 ・みんなを喜ばせよう。 ・これが完成すれば、竹の皮がなくても大丈夫。生活がもっとよくなるぞ。 ・母さんや子どもたちには申し訳ないな。 ・泣いている顔 ・喜んでいる顔 ・ほっとしている顔 ・「母さん、子どもたち、ありがとう。今まで、よくがまんしてくれたね。」 ・「今まで、努力してきてよかった。あきらめないでよかった。」 ・「早く、村のみんなの喜ぶ顔が見たいな。」 ・「これで暮らしが便利になるぞ。」 ・すばらしい！ ・あきらめないことが大切だと思った。 ・大変なことも、努力すれば乗り越えられる。 ・どんな状況でも夢や希望を持ち続けたい。	*本文には書かれていないが、「5年間」という言葉を明示することで、主人公の粘り強さに気づかせたい。 *葛藤しながらも前向きに研究に取り組む勘左衛門の心の内を、様々な視点から児童に考えるようにする。 *場面の時間的広がりから児童の思考の散漫が予想される。そこで、キーワード（短冊）を明示し、児童の思考の手助けをする。 *「 顔」という短冊を提示し、 に当てはまる言葉を考えることで主人公の気持ちに迫りたい。 *補足発問（切り返し）では、会話形式で発表し、主人公の気持ちを表現することをねらう。 *主人公の行動が自分のためだけでなく、人のため、世のために役立っていることを押さえる。 ◆実際に枇木を児童の手に持たせながら発表させることで、話し合いへの参加を促す。 *児童が偉人を自分とは別格として考えないように、「同じ人間」として考えるようにする。 ◆思考する時間、書く時間等を明確に示し、児童が書く活動に集中できるようにする。 ◆ワークシートが書けない児童には、教師が側に行ってヒントを与える。 ☆主人公の生き方から「創意・進取」について考えを深められたか。（ワークシート）	
終末	6 ゲストティーチャーのお話を聞く。（VTR）		*枇木作りの元職人の方に、逸話やねらいに沿った話をしていただく。	2分

6 事後指導

学校行事の準備において、「創意・進取」のねらいに沿った活動ができた児童を賞賛し、意識化を図る。

7 評価

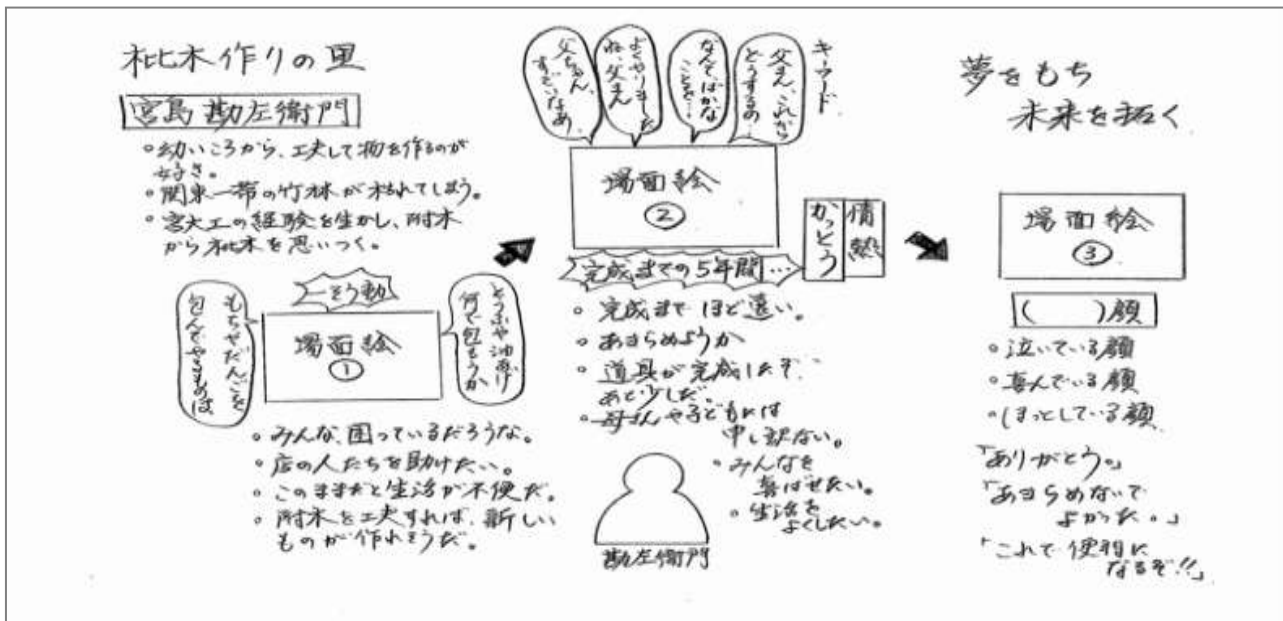
＜児童側の評価＞・主人公の立場に立って、気持ちを考えることができたか。

・友達の考えを聞いて、自分の考えを深めることができたか。

＜教師側の評価＞・一連の授業を通して、本時のねらいに迫ることができたか。

・どの児童も授業に参加しやすいよう、ユニバーサルデザインを意識した授業が展開できたか。

8 板書計画



補足資料

●資料を理解するために

「子育てに必要なのは『貧乏』と『母親の愛』である。」——これは、郷土で生まれ育った町長が、訓辞で述べられた言葉である。そして、「何もない〇〇では、人そのものが宝であり、子どもの教育に未来がかかっている。」と続く。今回の郷土資料を読み解く上で重要な鍵となるので、始めに載せておきたい。

本資料の主人公「宮島勘左衛門」は郷土の偉人である。江戸時代後半に生きた人で、「批木（ひぎ）」を発明した人である。

地元の古老は「ひげ」と呼ぶ。批木とは、木でできた食品を包む包装用品である。一般には「経木（きょうぎ）」と呼ばれ、今でも、魚屋で刺身を包むときや納豆などに使われている。木を薄く削った包装紙のような物で、高級食材を買うときでしか見られなくなった。

勘左衛門が批木を発明したきっかけは、江戸時代の嘉永年間に、関東一帯で竹林が一斉に枯れたことから始まる。当時は、2メートル近く伸びた竹の皮をはぎ取り、それで和菓子やがんもどきなどの食品を包んでいた（「竹皮」と呼ぶ）。それが手に入らなくなり、村人は皆困り果てたのである。そして、このころ農業の傍ら附木（つけぎ）を作っていた勘左衛門は、昔、江戸で宮大工をしていた経験を生かし、批木を思いついた。それは、長さ1メートル以上にもなる巨大な匏（かんな）を作り、その上に赤松の丸太を滑らせるというものであった。

試行錯誤の上、5年かけてようやく完成させた批木。貧しい農村の生活の中で、この偉業を成し遂げた勘左衛門を支えたものは何か。それは、子どもの頃から工夫して作ることが好きであったと言われている勘左衛門の持ち前の性格によるところが大きい。そして、自分の生活を、さらには人々の生活をよりよくしたと願う勘左衛門のたくましさも影響している。また、決して忘れてはならないのが、「内助の功」とも言える妻の支えである。近所の者に陰口を言われながらも発明に没頭する勘左衛門の姿は、今の子どもたちにも共感を与えるに違いない。

一般に、偉人伝は「古臭い」「美辞麗句の話」などと言われ、避けられがちではないか。しかし最近では、スポーツ選手など今、活躍している有名人の本が、子どもたちに人気があると言われている。昔話などが語られなくなった現在、実は子どもたちは理想の大人像を請い求めているとのデータもある。

私自身、道徳の勉強をしてきたものの、「偉人伝では主人公の心情を深く追求できないのでは…」との苦手意識があった。しかし、数年前に偶然この資料を発見した瞬間、いつかこの資料で授業がしたいと思い続けてきた。そして、今回、たくさんの町の人にインタビューしていくうちに、消えゆく歴史の中で人々が懸命に生き抜いた時代があったこと、そして、その上に今日の私たちの生活が成り立っていることに気づいたとき、この連綿と続く人々の営みを後世の子どもたちに伝えねばならないとの義務感が、私の心の中に芽生えてきた。

決して、この話は道徳資料として分かりやすいとは言えない。しかし、文章の一字一句に漂う郷土の香りや作者の熱い思いを子どもたちが少しでも感じ取ってくれば、そして、郷土に誇りを持ってくればとの願いを込めて、今回の研究授業を提案する。

13 枇木作りの里

附木から枇木を考案した宮島勘左衛門

「キューコン、キューコン、キューコン」

古びたわら屋根が白く見えるほど霜の深い朝、寒さをつき破るようなかん高い枇木つきの音……。静かな里のにぎやかな夜明けだ。

今から百五十年前、宮島勘左衛門は、月輪の里で農業のかたわら妻を相手に、附木作りをして細々と暮らしをたてていた。勘左衛門が附木作りをしていた嘉永の初めの頃、関東一帯の竹林が原因不明でいたるところ枯れてしまった。

「これから、がんもどきや油あげは何で包もうか。」

「もちやだんごをお客さんに包んでやるものは……。」

と、町や村の豆腐屋や菓子屋では、頭をかかえてしまった。この頃はぬれた物を包むのに、竹の皮を使用していたのだ。その猛暴の竹林がかれ果ててしまったのだから、一そう動である。附木商人の勘左衛門は、商人たちの話を聞き、

「竹の皮にかわるものが何とか作れないものかなあ。この附木の赤松からは作れないものか。」

などと、附木作りの合い間をみては、材料の赤松を手にとってつぶやいていた。若いころ、宮大工の経験がある勘左衛門は、(材料は赤松でいいだろう。大きく深く削れば、何とか竹のかわりになるのではないか。)と考え、そばにいたる妻に、枇木作りのことを話すのだっ

た。

さっそく準備に取りかかった。道具を作らなければならない。土がかなである。かんなの台作りから始めた。台木として堅そうな木をいろいろ試してみた。うまくゆかない。最後には、最も堅いと言われる檜の木を選んだ。次は、かんなの大きさが、なかなか見当もつかなかった。勘左衛門は、かんな作りに明けくれるようになってしまった。妻と二人でする附木作りには、全然手を出さなくなってしまう。収入のない日が何日も続き、育ち盛りの子どもをかえ暮らして困った妻は、

「父さん、これからどうするのですか。附木作りをしなくて……。」

と、途方にくれて、勘左衛門にとりすがった。また、

「雨が降りそうだ。父さん、今日中に妻刈りをしてしまわないと、かっただをとりこんでくださいよ。」

と、いう妻の言葉にも、勘左衛門は、いっこうに耳をかそうとしなかった。わずかばかりの農作業にも、全然手をかさなくなってしまった。ようやく、かんなの見当がつくと、刃の大きさや角度を設計し、かじやに注文した。刃が届くと、トントントンと槌で刃の出し具合はどうか、刃の角度はどうかなど、手でなでたり、目に近づけ片目でじつとその具合をながめる日が、夜も昼も何日も続いていった。附木作りをしている近所の人々は、こんな勘左衛門をみては、

「なんてばかなことを、附木を作っていればいいのに。」

「あれじゃあ、子どもがかわいそうに、おかみさんの苦勞も考えない

で、何てことを……」

と、かげで言い合っていた。しかし、勘左衛門の耳には、こんな言葉は入らなかった。三度の食事もそこそこ、仕事場へ入り、かんなをトントントン、トトン、と打っては、台木に顔を近づけ、木の一方を上げたり、横から上からじつとみつめていた。そして、木の上をすべらせる。うまく割れない。(うーん。刃の角度が)床に腰を下ろし、手を組み首をかしげていた。しばらくすると、勘左衛門は、すつくと立ち上がった。台木にはめた刃を取り出すのである。また最初から刃を打ち直すのだ。妻も家事の仕事を進めると夫のそばであれこれとかなな作りを手伝うようになった。

ついに、巨大なかんなができ上がった。たて百二十センチメートル、横三十センチメートル、厚さ十五センチメートルのものである。

「よくやりましたね。父さん。」

「父ちゃん、すごいなあ。こんなにでっかいん。」

と、妻と子どもたちもかんなを見て、びっくりした。勘左衛門は、腕を組みだまっとうなずいていた。これから最後の難門である。このかんなの上にどのようにして赤松の丸太をすべらせるかである。その日から勘左衛門夫妻は、仕事場で

「おい、かんなをもうちょっと高く、おお、高すぎる。」

「はいはい、このくらいいい。」

「ううむ、丸太がうこいてしまうな、止めないでためかな。」

来る日も来る日も、赤松の丸太をどのようにすべらせるかと、その解決に取り組んでいた。

「キューコン」

ついに、喜びの日が来た。かんなの上に直径十五センチメートル、長さ六十七センチメートルの赤松の丸太をのせ、長い棒にくくり付けた。この棒を勘左衛門は妻としっかりと二人の力ですべらせた。

「父さん、落ちたよ。ほら、あんなに大きいのが。」

妻のかん高い声、半紙ぐらいの厚さの長方形のかんなくすが落ちていた。勘左衛門は、だまって拾いあげた。ていねいに手でさすったり、においをかいだりして、一つ大きく肩で息をした。

「父さん、よかったね。いいにおい。この柔らかさなら包めますよ。だいじょうぶですよ。」

「父ちゃん、やったあ。すごいぞ。」

何ともいえない赤松のにおい。美しい木目、柔らかな手ざわり……就木である。勘左衛門は、ひげの顔をくしゃくしゃにしながら、その一枚を妻とおしただき、いつまでも喜び合っていた。

就木は、町や村の人々に貴重がられていった。その後しばらくして、月輪の里のあちこちから、キューコン、キューコンと就木つきの音が、響いてきた。



「物理」学習指導案

- 1 日時・会場 平成 24 年〇月〇日 2 時間目(10:05～11:10) 物理室
- 2 授業者 〇〇 〇〇
- 3 単元名「静電気～静電誘導と誘電分極～」
- 3 本時の目的

【態度目標】しゃべる、質問する、説明する、動く、チームで協力する、チームに貢献する

【内容目標】(1)静電気の基本概念を理解させる。

(2)特に、「静電誘導」と「誘電分極」の違いを正確に理解させる。

時間	内容	備考(意図・背景・その他)
00	学習内容の概説(15 分間) A パワーポイントとプロジェクターによるコンパクトな説明。 B 「板書・ノートなし」の説明。 【プレゼンテーション目標】 (1)内容と順序の詳細は「授業説明用プリント」通り。 (2)時間を守る。 (3)インタラクティブな説明を心がける。 (4)準備している質問(あとは臨機応変に) 「電気の現象で知っていることは何ですか？」 「教科書扉の図(スライド 4)の中で静電気を利用しているのはどれだと思いますか？」 「(スライド 10)水はどうなると思いますか？なぜですか？」 (5)演示実験が多いのでスムーズに動けるよう準備をしておく。特に「書画カメラ」の使用に注意する。	①静電気は中学校で履修している。ここでは復習から始まる。 ②静電誘導、誘電分極は初めての概念。 ③ここで使うプリントは前回の授業時に配布してある。 ④授業開始前に「次回のプリント」「前回提出のリフレクションカード」「前回提出の確認テスト」を配列して生徒が自主的に取れるようにしてある。 ⑤始業の一斉挨拶は省略。個別に挨拶をする。
15	生徒同士による問題演習(35 分間) A 目標は「確認テストで全員 100 点をとる」 B 物理室内であれば何をやっても可。 「態度目標」を重視する。 →しゃべる、質問する、説明する、動く、チームで協力する、チームに貢献する	①基本的にさほどの問題はない。いつもの雰囲気を維持することを心がける。 ②席を移動し始めた生徒がいるので、その動向には注意して、適切な介入を行い、移動の意図などを把握したい。

50	【全体目標】 態度目標を守ることを確認する。 【全体リード目標】 時間を意識させる。 【全体への介入目標】 「予定通り進んでいますか？」 「練習問題終わりますか？」等の定例介入を行う。 【グループへの介入目標】 停滞しているグループに積極的に介入する。 【個人への介入目標】 席を移動している生徒にきめ細かく介入する。	
50	確認テストと振り返り(15分間) A 「確認テスト」に取り組む。 B 交換して採点する。 C リフレクションカードを記入する。 D 「確認テスト」と「リフレクションカード」を提出して終了。 【確認テスト】 (1)練習問題から2問を確認テストとして出す (2)100点を目指させる。 (3)解答に困ったら、資料を見る事を促す (4)友達と交換して採点 (5)終わったら、リフレクションカードの記入 【リフレクションカード】 問は以下の通り。 A 態度目標を守って話し合えましたか？ B 内容目標についてわかったことは？ わからなかったことは？	①振り返りの大事さを踏まえて丁寧に参加する。 ②特に新しい単元に入ったところなので生徒の理解度、興味等を確認する。
65	C その他	

【介入目標】(1)普段通りに安全・安心の場を維持する。

(2)定例介入(※1)を維持する。

(3)最近、席が流動し始めている。チャンスを捉えて定例外介入をして、成長を促したい。

4 事後

(1)「確認テスト」と「リフレクションカード」の点検をする。

※1 「定例介入」～安全安心の場をつくり、学習を促進するための生徒への働きかけのこと。

別資料「アクティブラーニングにおける教師介入の構造」を参考にしてください。

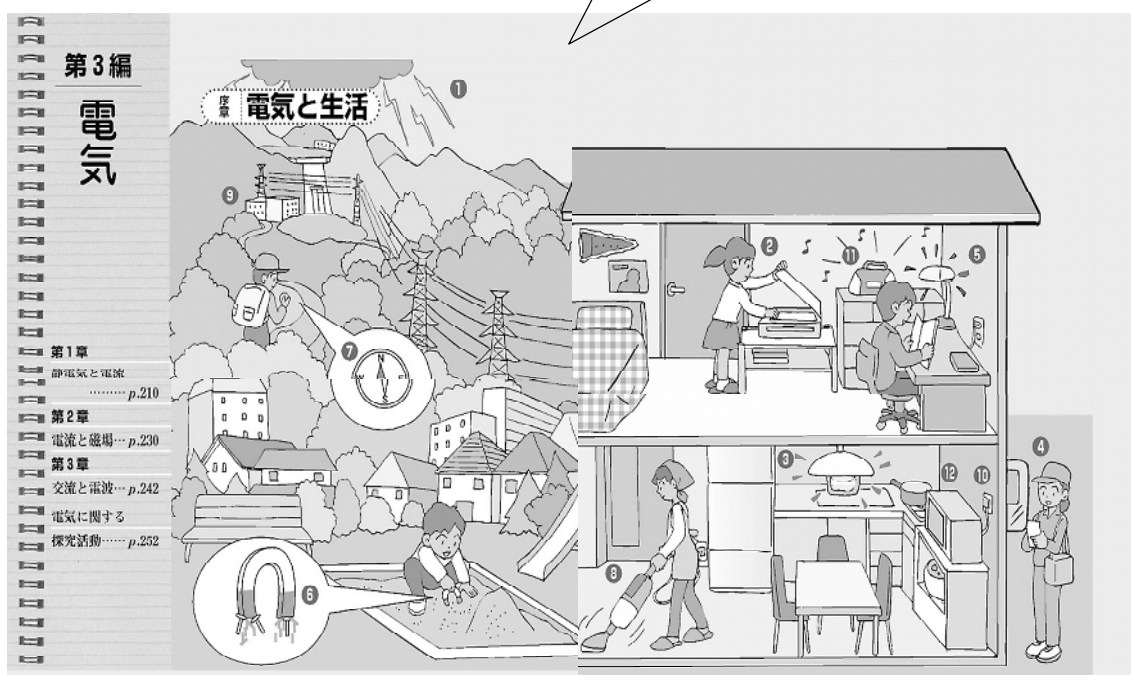
※確認テスト等の資料作成には、数研出版社発行の教科書・問題集等を引用・利用しました。

この時間の目標

1. しゃべる、質問する、説明する、動く、
チームで協力する、チームに貢献する
2. 理解すること
 - (1)〈用語と構造を理解する〉
静電気、静電誘導、誘電分極
 - (2)〈イメージを描く〉
色々な現象を電子の動きで理解する。

第3編 電気

私たちの身の回りには
電気がたくさんある



第1章 静電気と電流

A 静電気の発生

1. 帯電

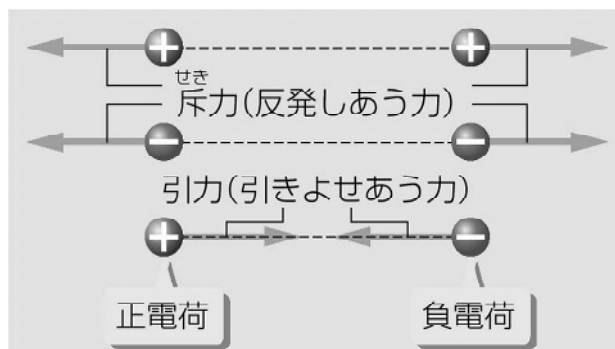
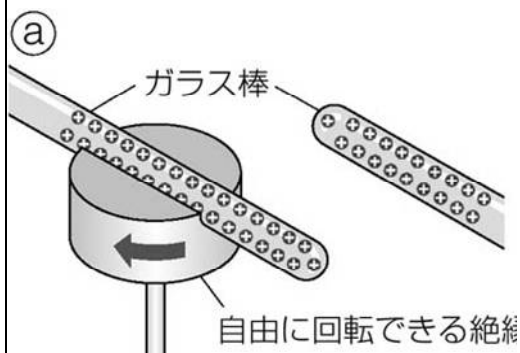
物体が電気を帯びること。

2. 電子を失った物体 → 正に帯電

電子を得た物体 → 負に帯電

3. 同種の電気 → 互いに反発する。

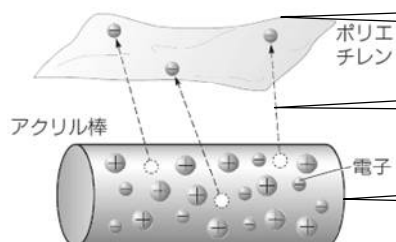
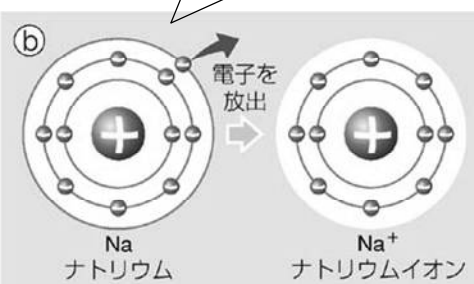
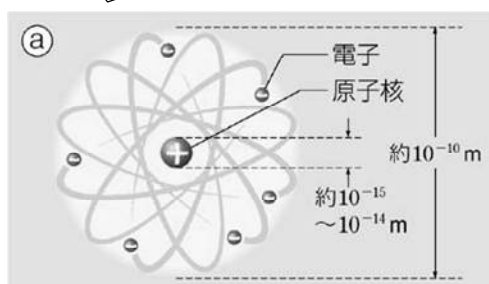
異種の電気 → 互いに引き合う。



B 物体が帯電するしくみ

原子核はプラス、電子はマイナス

電子が増減して電気を帯びた原子がイオン



電子を得て負に帯電する

動くのは電子

電子を失って正に帯電する

移動しても電気の総量は変わらない(電気量保存の法則)

※ 導体と不導体

主に金属
自由電子が多い

導体: 電気をよく通す物体

→

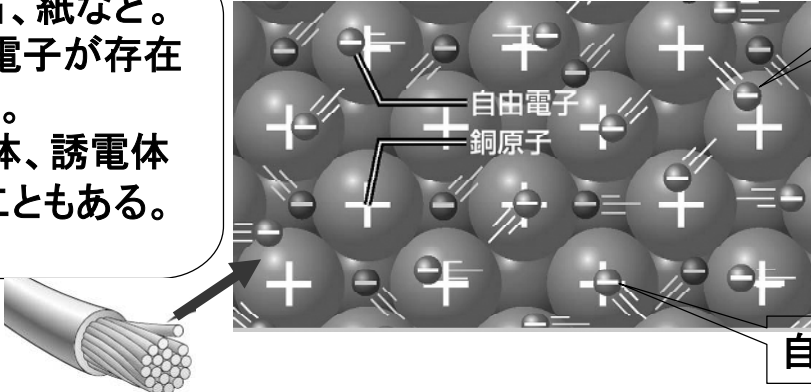
静電誘導

不導体: 電気をほとんど通さない物体

→

誘電分極

1. 木、石、紙など。
2. 自由電子が存在しない。
3. 絶縁体、誘電体と呼ぶこともある。



自由電子

自由電子

銅原子

自由電子

C 静電誘導

静電誘導

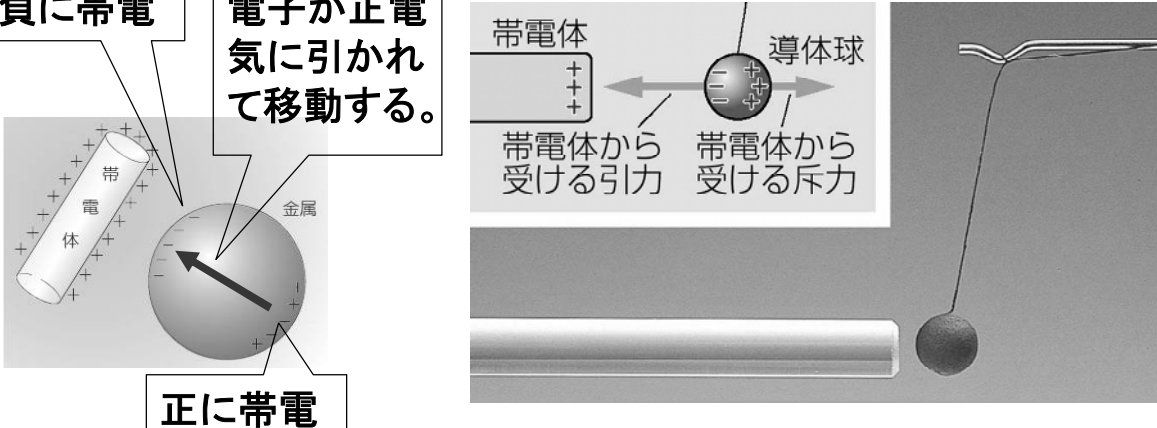
1. 導体内部で、外部の帯電体の影響により
電荷の分布に偏りが生じる現象。

2. 導体球が帯電体にひかれる理由。

負に帯電

電子が正電気に引かれて移動する。

正に帯電



D 誘電分極

1.不導体でも帯電体を近づけると引き寄せられる。

2.理由は構成粒子の中の電子の位置がずれるため。(分極)
この不導体に表れる静電誘導の現象を誘電分極という。

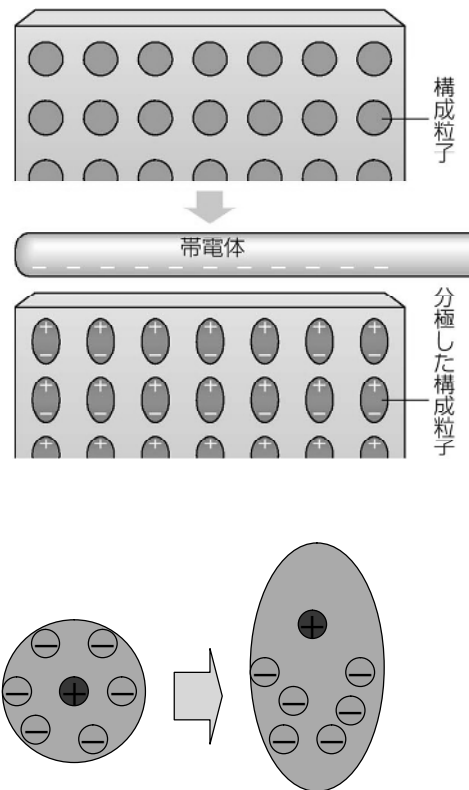


図 15 誘電分極のしくみ

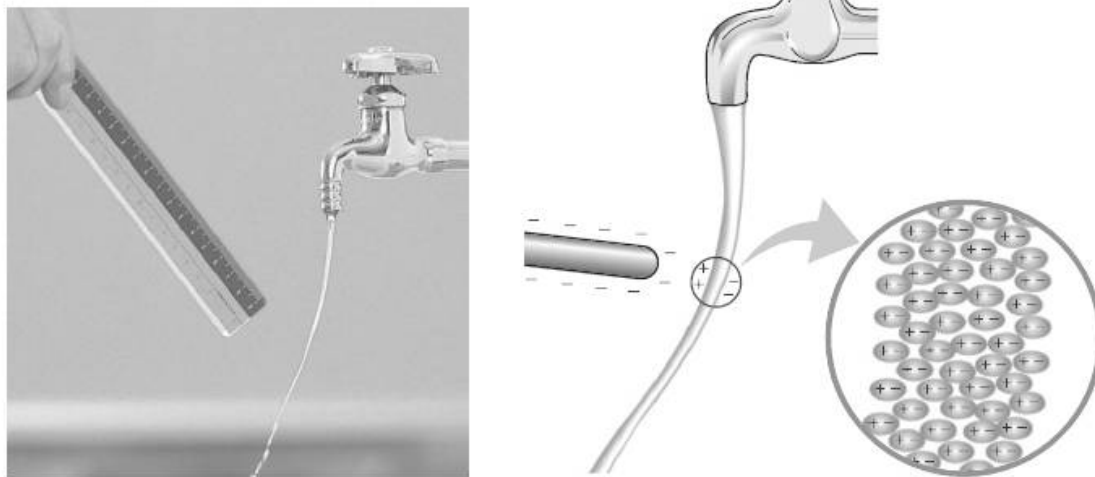
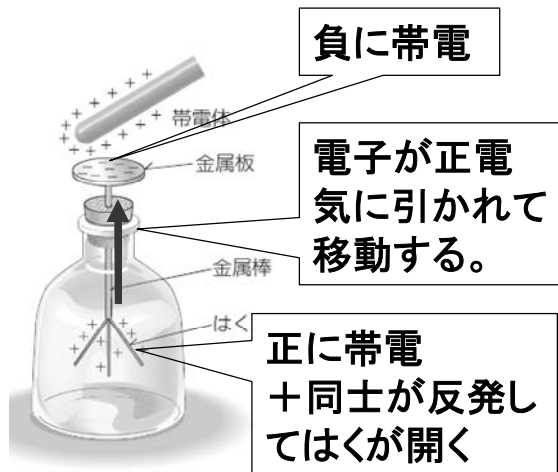


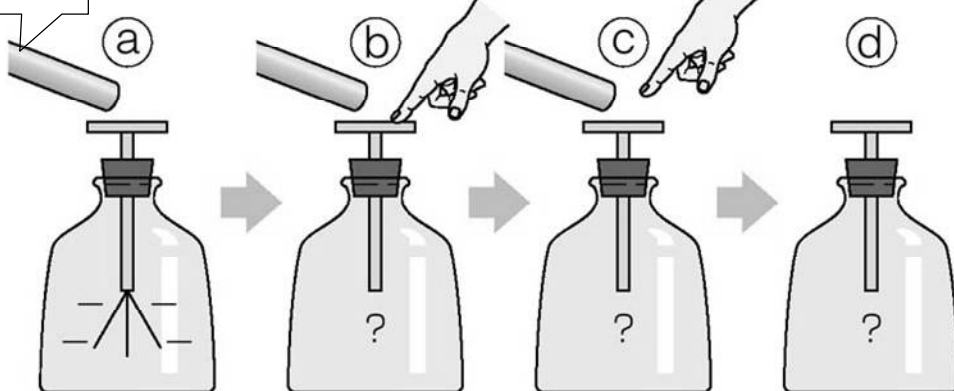
図 16 誘電分極によって帯電体に引きつけられる水道の水

はく検電器を使って静電誘導の実験をしてみよう



どうなるでしょう？
電子の動きで説明できますか？

マイナス
に帯電



→ 練習問題へ

チェックリスト できましたか？

1. ☐しゃべる、☐質問する、☐説明する、☐動く、
☐チームで協力する、☐チームに貢献する
2. 理解すること
 - (1)〈用語と構造を理解する〉
☐静電気、☐静電誘導、☐誘電分極
 - (2)〈イメージを描く〉
☐色々な現象を電子の動きで理解する。

1

アクリル棒を絹布でこすると、アクリル棒は正、絹布は(1)(ア)正 (イ)負に帯電する。これは(2)(ア)アクリル棒から絹布へ (イ)絹布からアクリル棒へ電子が移動したためである。このアクリル棒に毛皮でこすった塩化ビニル棒を近づけたら、アクリル棒と塩化ビニル棒の間には引力がはたらいた。絹布と毛皮の電気を逃がさないようにして近づけたら、絹布と毛皮の間には(3)(ア)引力 (イ)斥力(イ)斥力がはたらく。

ヒント 塩化ビニル棒は正、絹布と毛皮に帯電しているか。これより、毛皮の電荷がわかる。

2

次の 1 から 8 に適する語句を、9 には適する理由を答えよ。

アルミホイルのように電気を伝える物質を導体という。金属は導体で、その内部には 1 が存在している。一方、ガラス、プラスチック、発泡スチロールなどの物質は、通常ほとんど電気を通さないで不導体または絶縁体と呼ばれる。不導体の中では 1 がほとんどないので、電気が伝わりにくい。

絶縁された導体に帯電体を近づけると、導体内の 1 は帯電体の電荷から力を受け、導体内を移動する。その結果、導体には、帯電体に近い側に帯電体と 2 符号の電荷が誘導され、帯電体から遠い側に 3 符号の電荷が誘導される。この現象は 4 と呼ばれる。

不導体に帯電体を近づける場合でも、帯電体に近い側に帯電体と 5 符号の電荷が現れ、帯電体から遠い側に 6 符号の電荷が現れる。この現象は 7 と呼ばれる。現れる電荷は、内部の原子または分子の電荷分布の 8 によるものである。

実際に次のような実験をしてみると、導体と不導体のちがいがよくわかる。アルミホイル片と発泡スチロール片に正の帯電体を近づけると、これらはいずれも帯電体に引きよせられる。しかし、これらが帯電体に接触すると、アルミホイル片は帯電体からすぐに離れるが、発泡スチロール片は離れない。このちがいは 9 ためである。

ヒント 導体と不導体の相違点、誘電分極と静電誘導の相違点を考えよ。

3

次の文の { } 内から正しいものを選び、記号で答えよ。また、下の問いに答えよ。
(1) はく検電器がある。初め、はくは閉じていたとする。

負に帯電した棒を上部の金属板に近づけると

(a){(ア) 静電誘導 (イ) 誘電分極}により、金属板は

(b){(ア) 正 (イ) 負}に、はくは(c){(ア) 正 (イ) 負}

に帯電し、はくは

(d){(ア) 開く (イ) 閉じたままである}。

(2) 次に帯電した棒を近づけたまま、はく検電器の金属板に指を触れる。このとき、はくは

(e){(ア) 開いたままである (イ) 閉じたままである (ウ) 開く (エ) 閉じる}。

これは、はく検電器から(f){(ア) 正 (イ) 負}の電気が人体に逃げるためである。

(3) 続いて指を金属板から離し、次に棒を遠ざけた。このとき、はくは

(g){(ア) 開く (イ) 閉じる (ウ) 開いたままである (エ) 閉じたままである}。

問 この後、再び負に帯電した棒を上部の金属板に近づけると、はくはどうなるか。

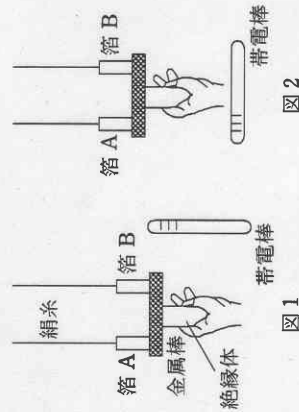
ヒント 静電誘導の現象である。自由電子(負電荷)の移動をもとに考える。

4

絹糸でつるした軽い金属の箔 A、B と絶縁体のついた金属棒が接している。図 1、図 2 も、はじめ金属箔と金属棒は帯電していない。

(1) 図 1 のように、負に帯電した棒を近づける。その後、金属棒を 2 枚の金属箔から離れた後、帯電棒を遠ざけると、2 枚の箔の間には引力がはたらいた。

このとき、A、B の電荷の正、負を答えよ。



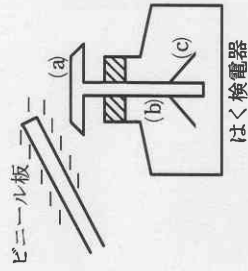
(2) 図 2 のように、帯電棒を近づけ、その後(1)と同様の操作をすると、2 枚の箔の間には反発力(斥力)がはたらいた。このとき、A、B の電荷の正、負を答えよ。

考え方 金属(導体)に帯電棒を近づけると、静電誘導により帯電体に近い側には帯電体と異種の電荷、遠い側には同種の電荷が現れる。

[5] (チャレンジ問題 法政大学 1997)

負に帯電させたビニール板を、はく検電器に近づけたところ、はくは開いた。次の各問に答えよ。

- (1) 図で正の電荷がたまる場所は (a), (b), (c) のうちのどこか。また、負の電荷のたまる場所はどこか。
- (2) ビニール板を近づけたまま、はく検電器の上部の金属板を手でさわった。このときはくは { (i) そのままである (ii) 閉じる (iii) もっと開く } のいずれかである。どれになるか。またその理由を述べよ。



- (3) 次に金属板から手を離れたあと、ビニール板を遠ざけた。このときはくはどうなるか。またその理由を述べよ。

1

解答 (1) (イ) (2) (ア) (3) (ア)

解説

指針 アクリル棒が正に帯電することから、アクリル棒と絹布に電子不足・過剰のどちらが生じているかを考える。また、アクリル棒と塩化ビニル棒の間に引力がはたらくことから、塩化ビニルが正・負どちらに帯電しているかを考える。

解説 (1) アクリル棒は正に帯電しているので電子不足の状態になっている。帯電は電子の移動によって生じるので、絹布は電子過剰の状態になり、負に帯電する。

(2) (1)からわかるように、電子の移動はアクリル棒から絹布へである。
答えは (イ)

(3) アクリル棒 (正に帯電) と塩化ビニル棒の間には引力がはたらくことから、塩化ビニル棒は負に帯電している※A。(1)と同様に考えると、毛皮は正に帯電している。したがって、絹布 (負に帯電) と毛皮の間には引力がはたらく。
答えは (ア)

←※A 引力がはたらくのは異種の電荷間である。

2

解答 (1) 自由電子 (2) 異 (3) 同 (4) 静電誘導 (5) 異 (6) 同

(7) 誘電分極 (8) 偏り

(9) アルミホイル片には自由電子があり、発泡スチロール片には自由電子がない

解説

指針 金属と不導体の相違点を考える。また、帯電体を近づけたときに起こる現象の相違点を考える。その際、帯電体から自由電子や分子 (または原子) の電荷にどんな向きの力がはたらくかを考える。

解説 (1) 金属は導体の代表で、その特徴は自由電子をもつことである。

(2), (3) 金属に帯電体 (正に帯電しているとすると) を近づけると、図 1 のように金属内の自由電子は帯電体の正の電荷に引きつけられる。その結果、金属の帯電体に近い側には負の電荷、遠い側には正の電荷が現れる。帯電体の電荷が負の場合は、金属内の自由電子は斥力を受けるので、帯電体から遠い側に負の電荷、近い側に正の電荷が現れる。いずれの場合も、帯電体に近い側に帯電体と (2) 異符号、遠い側に (3) 同符号の電荷が現れる。

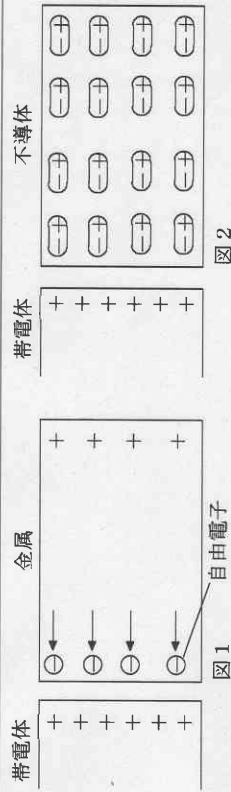


図 1

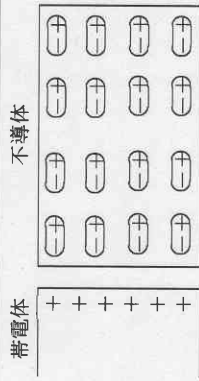


図 2

(4) 静電誘導

(5), (6) 不導体に正の帯電体を近づけた場合、分子または原子内の電荷は分子 (原子) を離れることはできないが、帯電体の電荷から力を受け、図 2 のように、分子 (原子) 内の正・負の電荷の分布に偏り※Aが生じ、帯電体に近い側に負、遠い側に正の電荷が現れる。帯電体の電荷が負の場合は、分子 (原子) 内の正・負の電荷が逆になるので、近い側に正、遠い側に負の電荷が現れる。いずれの場合も、帯電体に近い側に帯電体と (5) 異符号、遠い側に (6) 同符号の電荷が現れる。

(7) 誘電分極

(8) (5)(6)で述べたように、正・負の電荷の分布の偏り。

(9) アルミホイル片でも、発泡スチ

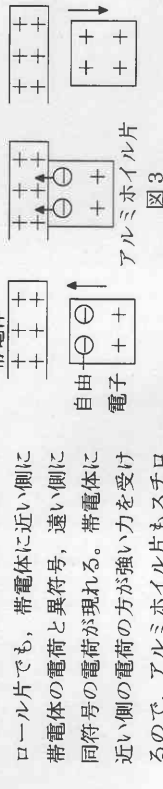


図 3

ール片も帯電体に引きよせられる。

帯電体に接触すると、図 3 のようにアルミホイル片から自由電子が帯電体に移動し、アルミホイル片は正に帯電する。したがって、正電荷どうしで反発し、アルミホイル片は帯電体から離れる。

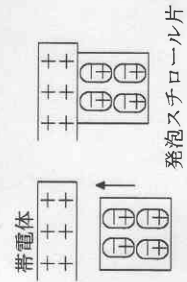


図 4

スチロール片の場合は、自由電子がないため電荷の移動がないので、図 4 のように帯電体に吸いつけられたままである。つまり、アルミホイル片には自由電子があり、発泡スチロール片には自由電子がないためである。

←※A この分布の偏りを分極という。

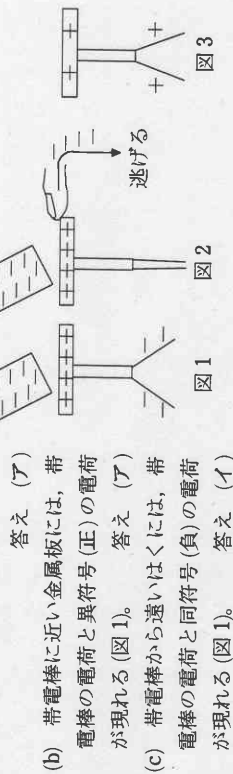
3

- 解答 (1)(a) (ア) (b) (ア) (c) (イ) (d) (ア) (2)(e) (エ) (f) (イ)
(3)(g) (ア) 問 閉じていく。

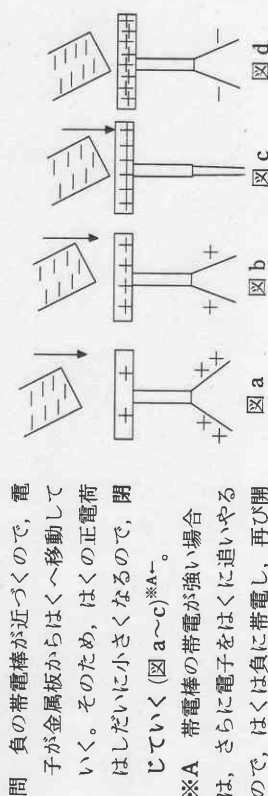
解説 指針

静電誘導では、帯電体に近い側、遠い側にどのような電荷が現れるかを考えよ。
金属板に指を触れると、遠い側の電荷はより遠くへ逃げようとする。

解説 (1) (a) 静電誘導による。



- (2) (e) はくは閉じる。理由は (f) 参照 (図 2)。
(f) はくを負に帯電させていた電子が、帯電棒からより遠ざかろうとして、人体に逃げる (図 2)。
- (3) (g) 指を金属板から離し、棒を遠ざけると、金属板の正電荷はくにも広がる (図 3)。
はくは開く (図 3)。



←※A 帯電棒の帯電が強い場合は、さらに電子をはくに追いやるので、はくは負に帯電し、再び開きはじめる (図 d)。

4

- 解答 (1) A は負, B は正 (2) A も B も負

解説

(1) 負の帯電棒を近づけると、静電誘導により帯電棒の近くは正に、遠くは負に帯電する。その状態で金属棒を離すと、箔 A は自由電子が過剰なので負に、箔 B は逆に正に帯電したままとなる。

A は負, B は正に帯電する。

(2) このときは、金属棒が正に、箔の A と B は自由電子が過剰になり負に帯電したと考えられる。この状態で金属棒を離すと、A も B も負に帯電する。

5 (チャレンジ問題 法政大学 1997)

解答 (1) 正: (a) 負: (c)

- (2) (ii), 理由: はく (c) の負電荷が静電誘導により、ビニール板からより遠くの地面へ手から人体を伝わって逃げる。正電荷はビニール板の近くの金属板 (a) に引きつけられたまま、はくには電荷がなくなり、閉じる。
- (3) 手を離れたときは閉じたままであるが、ビニール板を遠ざけるとはくは再び開く。理由: 手を放してもはくは検電器の電荷分布は変わらず、はくは閉じたままであるが、ビニール板を遠ざけると、金属板 (a) に引きつけられていた電荷が、はくは検電器全体に広がり、はくは正電荷どうしの斥力で再び開く。

解説

- (1) 静電誘導により、ビニール板に近い部分に正電荷、遠い部分に負電荷が現れるから、正電荷は (a)、負電荷は (c)
- (2) (ii) 理由: はく (c) の負電荷が静電誘導により、ビニール板からより遠くの地面へ、手から人体を伝わって逃げる。正電荷はビニール板の近くの金属板 (a) に引きつけられたまま、はくには電荷がなくなり、閉じる。
- (3) 手を離れたときは閉じたままであるが、ビニール板を遠ざけるとはくは再び開く。理由: 手を離してもはくは検電器の電荷分布は変わらず、はくは閉じたままであるが、ビニール板を遠ざけると、金属板 (a) に引きつけられていた電荷がはくは検電器全体に広がり、はくは正電荷どうしの斥力で再び開く。

1

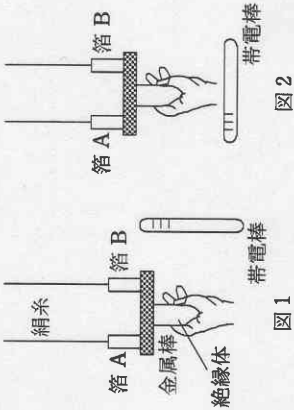
アクリル棒を絹布でこすると、アクリル棒は正、絹布は(1)(ア)正 (イ)負に帯電する。これは(2)(ア)アクリル棒から絹布へ (イ)絹布からアクリル棒へ電子が移動したためである。このアクリル棒に毛皮でこすった塩化ビニル棒を近づけたら、アクリル棒と塩化ビニル棒の間には引力がはたらいた。絹布と毛皮の電気を逃がさないようにして近づけたら、絹布と毛皮の間には(3)(ア)引力 (イ)斥力がはたらく。

2

絹糸でつるした軽い金属の箔 A、B と絶縁体のついた金属棒が接している。図 1、図 2 も、はじめ金属箔と金属棒は帯電していない。

- (1) 図 1 のように、負に帯電した棒を近づける。その後、金属棒を 2 枚の金属箔から離れた後、帯電棒を遠ざけると、2 枚の箔の間には引力がはたらいた。このとき、A、B の電荷の正、負を答えよ。

- (2) 図 2 のように、帯電棒を近づけ、その後(1)と同様の操作をすると、2 枚の箔の間には反発力(斥力)がはたらいた。このとき、A、B の電荷の正、負を答えよ。



- ◎「科学的対話力」を意識して話し合えましたか？
- (1)プリント最後のチェックリストの各項目を読んでチェックしましょう。
- (2)その上で、リフレクションカードに以下のことを書いてください。
- A 「どんな風に話し合えましたか？」
- B 「わかったこと・わからなかったこと」
- C 「感想・意見など」

中学部 2 年 生活単元学習 学習指導案

日 時 平成 2 4 年〇月〇日(〇)
 〇 : 〇〇 ~ 〇〇 : 〇〇
 場 所 〇〇教室
 指 導 者 〇〇〇〇〇 (T 1)
 〇〇〇〇〇 (T 2)

1 単元名 「オレたちの仕事をはじめよう」

2 単元設定の理由

本学年は、男子 5 名で構成されている。主たる障害は知的障害であり、自閉傾向のある生徒が 3 名いる。中には強いこだわりや情緒面において課題のある生徒もあり、授業の中で気持ちの切り替えができる活動を取り入れるといった配慮を要する。言語面については、日常会話がほぼ成立する生徒、発語は不明瞭だが会話ができる生徒、自分の要求を言葉で伝えることができる生徒、発声やカードなどを使って要求を伝えようとする生徒がいる。集団で活動する場面において、クラスをまとめたり、友だちに誘いかけたり、誘いかけに応じて行動したりするなど生徒たちだけで活動できる場面もあり、まとまりがある。しかし、一方で身だしなみや話を聞くときの姿勢、言葉遣い、手先を使った細かい作業を課題としている。

本単元では「働く」ことをテーマとした授業を展開していく。昨年度はクラスで茶屋を開き、たくさんのお客さんにおもてなしを行うことを通して「感謝・賞賛」される喜びを味わうことができた。今年度は昨年度得た経験を基盤とし、他者に依頼された仕事を行うという設定の下、活動をしていく。中学 3 年生の校内実習、高等部の現場実習といった、仕事に関する今後の学習に向けて、様々な場面・内容で働く体験する機会として本単元を設定した。仕事の内容は仕分け、袋詰め、楊枝さし作りといった 1 ~ 3 工程ほどの単純明確な作業内容である。目標の時間や個数を達成することをねらう生徒から、袋の中の空気を抜いて封をする、折り紙の角をそろえて折るといった、精度をねらう生徒まで、同じ作業内容の中でねらいに応じて工夫しやすいものを用意した。また、様々な場で働く人たちの様子を見学したり、経験したりできるよう、校内・校外実習の見学や校外学習先での就業体験を設定し、教室以外の場でも働くという場面を設定した。

毎回授業の初めに、作業着と名札を着用する。活動に対する意欲を高めたり、見通しを持ったりする他、身だしなみを整えることをねらいとした。そして、頼まれた仕事を行うことが明確にわかるように、担任外の教員から直接仕事をもらい、仕事が終わったらその教員に仕事を納め、給料が支払われる、といった活動の流れを設定した。この流れを毎回行うことで、全ての生徒が活動に見通しが持てるようにした。また、仕事は一定の期間で変化させていき、様々な仕事を経験できるようにした。仕事をして、もらった給料で週末に駄菓子屋へ買い物に行くことで、短い見通しで期待を持って仕事をしたり、仕事、給料、買い物という流れを繰り返し体験できるようにした。給料は最小限の買い物ができる額(10 円)を設定した。貯めたお金を透明なケースに入れ、いつでも確認できる場所に掲示することで、買い物に期待して仕事に取り組めるようにした。

本単元を通して働く事の大変さや喜びを知り、今後の職業学習へのきっかけとなることを望む。

黒板

C (男)

活動のスケジュールを
写真や文字で個別に提
示することで見通しを
持つて取り組むことが
できる。

T 2

B (男)

作業を手際よく行うこ
とに課題があるが、ゲー
ム性のある用語を交え
て伝えることで効率を
上げることができる。

E (男)

作業のポイントを事前
に伝えたり、褒められ
たりする経験を重ねるこ
とで、集中して作業に取
り組むことができる。

T 1

D (男)

細かい作業は苦手であ
るが、完成形を具体的に
伝えることで仕事の精
度を上げることができる。

A (男)

情緒が不安定になるこ
とがあるが、活動内容を
再度確認したり、クール
ダウンしたりすること
で活動を再開ができる。

4 ユニバーサルデザインの視点

(1) 見通しが持てる授業

工程表や授業の流れの掲示などを多用し 1 授業内の見通しが持てるようにするとともに、短期的な学習の反復をすることで単元の見通しが持てるようにする。

【視点 5、6、7、8】

(2) 視覚的にわかりやすくする。

イラストや掲示を利用し、具体的に確認できるようにするとともに、端的に伝わるようにする。【視点 3、4、8、9、12】

(3) 個別の配慮を行う。

教員の付き方や個に応じた工程表、また、活動内容を精選し実態に応じた活動や場を設定する。 【視点 1、2、10、11】

など

5-1 単元の学習

(1) 共通目標

○与えられた役割を最後まで行うことができる。

(2) 個人目標

A：与えられた量を最後まで行うことができる。

B：与えられた量を効率よく行うことができる。

C：与えられた量を最後まで行うことができる。

D：細かい部分に注意して丁寧に行うことができる。

E：2つ程度のポイントを守り、最後まで行うことができる。

(3) 指導計画

次	学習活動	時間
1	オレたちの仕事 ～仕事をはじめよう～	2 h
2	オレたちの仕事①	2 h
3	給料で買い物をしよう①	1 h
4	オレたちの仕事②	1 h (本時6 / 1 4)
5	オレたちの仕事③ ～外で働こう① 就業体験	1 h
6	オレたちの仕事④	1 h
7	オレたちの仕事⑤ ～外で働こう② 就業体験	1 h
8	給料で買い物をしよう②	1 h
9	仕事を見学しよう 校内実習の見学	1 h
10	オレたちの仕事⑥	2 h
11	給料で買い物をしよう③	1 h

5－2 本時の学習

(1) 共通目標

○与えられた量の製品を作ることができる。

(2) 個人目標

A：見本通りに作業を行うことができる。

B：手順を守り、効率よく折ることができる。

C：与えられた量を最後まで行うことができる。

D：細かい部分に注意して丁寧に行うことができる。

E：2つ程度のポイントを守り、最後まで行うことができる。

(3) 本時の展開

	学習内容・予想される反応	指導上の留意点（◆ユニバーサルデザインの視点）				☆評価	
		A (男)	B (男)	C (男)	D (男)	E (男)	
課題の把握	・あいさつ	◆椅子だけにして正しい姿勢で礼ができるようにする。【視点1、3】 ・号令を行う際に教員がきつかけになる言葉掛けを行う。 ・事前に膝を曲げないで立位が取れるよう教員が指示する。 ・事前に目線を合わせて礼ができるよう教員が指示する。 ・事前に手、足の位置を教員が指示する。					
	・身支度の確認	◆良い姿の掲示を用意し、確認できるようにする。【視点3、4】 ・ボタンや名札、シャツの裾などが乱れている時には教員が言葉掛けを行う。 ・乱れている時には個別に掲示を見るよう指示する。 ・ボタンや名札、シャツの裾などが乱れている時には教員が言葉掛けを行う。					
	・前時を振り返り、本時の目標を確認する。	オレたちの仕事 ～働いて好きな物を買おう～ ◆写真を用意することで、前時の振り返りができるようにする。【視点8、11】 ◆イラストをつけ、本時の目標を掲示することで、活動に取り組む意欲が高まるようにする。【視点7、8、10、11】 ◆本時の活動の流れを黒板に明記するとともに、現在の活動がわかるようにする。【視点5】 ・前時の買い物を振り返るよう、写真を用意する。 ・前時の買い物を振り返った物を質問する。 ・前時の買い物学習で買った物を質問する。					
問題の解決	・合言葉言う	◆全員が言えるように、一人が先に言い復唱するようにする。【視点10、11】 ◆いつでも確認できるように合言葉表を掲示しておく。【視点7、8】 ・教員がきつかけとなる言葉を言うことで、言えるようにする。 ・正しく言えるよう掲示を見ながら行うようにする。 ・教員と一緒にジェスチャーをすることで行えるようにする。					・後に続いて言えるよう、ゆっくりはっきり言うよう伝える。
	・行先・相手がわかるよう言葉と写真で伝える。【視点5、8】						
	・入退出時に「失礼します、失礼しました」といえるよう事前に練習する。【視点3】						

	・行先と相手がわかるよう個別に写真を提示する。 ・「失礼します」が言えるよう教員がきつかけとなる言葉を言う。	・相手の顔を見て箱を受け取ることができるよう、視線が合ってから渡すようにする。	・行先がわかるよう個別に写真を提示する。 ・教員が言葉をかけつつ一緒に礼をする。	・ノックして入室できるようにドアを閉じておく。	・相手の顔を見て箱を受け取ることができるよう、視線が合ってから渡すようにする。
・仕事内容の確認 ・各々の仕事を知る	◆活動に見通しを持って取り組めるよう、見本を見せたり手順表を用意したりする。【視点 5、10、11】 ◆活動の終わりが分かるよう、各自に量を提示したり、全体の終了時間を時計版で掲示しておく。【視点 5、9】 ◆作業に取り組みやすいよう机を配置する。【視点 1】				
問 題 の 解 決	《アイロンビーズの袋詰め》	《楊枝さしの袋折り》	《アイロンビーズの弁別》	《アイロンビーズの袋詰め》	《楊枝さしのテープ止め》
	・適宜休憩を入れて最後まで行えるようにする。 ・2色のアイロンビーズを1色ずつ箱に入れておく。	・見本を見ながら、角をそろえて折り紙を2回折る。 ・10個ずつ検品を行い、時間や数量のチェックを行う。	・教員と一緒に混合されたビーズを指定の箱に弁別していく。 ・入れる箱に色紙を貼っておき、場がわかるようにしておく。	・丁寧に仕事ができるよう、ポイントとなる場所（袋の口を密封する・空気を入れない）を文字で提示する。 ・10個ずつ検品を行い、時間や数量のチェックを行う。	・端を印に合わせる・はさみを机に沿わせることで指定の長さのテープが切れるようにする。 ・10個ずつ検品を行うことで、注意点のチェックを行う。
	☆渡された全てのアイロンビーズを2つずつ袋に入れることができる。	☆時間内に50枚の袋を、角をそろえて折ることができる。	☆箱に入ったビーズを全て弁別することができる。	☆50個以上の製品の口を空気を入れないで閉じることができる。	☆楊枝さしからはみ出さずにテープを貼ることができる。
・片付け	◆用具をもとの位置に戻すことができるよう、場を明示する。【視点 1、11】 ◆製品と部品を分けて戻すよう全体指示を行う。【視点 9】				

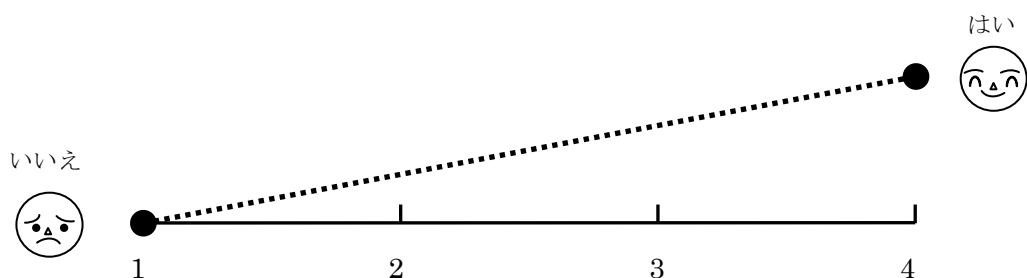
	・教員と一緒に片付けを行い、一つ一つ言葉かけで片付けるようにする。	・製品と部品を分けて片付けることができるようにする。	・教員と一緒に片付けを行い、一つ一つ言葉かけで片付けるようにする。	・製品と部品を分けて片付けることができるようにする。
・納入	◆行先・相手がわかるよう言葉と写真で伝える。【視点 5、8】 ◆入退出時に「失礼します、失礼しました」といえるよう事前に練習する。【視点 3】 ・「失礼します」が言えるよう教員がきっかけとなる言葉を言う。 ・相手の顔を見て箱を受け取ることでできるよう、視線が合ってから渡すようにする。	・相手の顔を見て箱を受け取ることでできるよう、視線が合ってから渡すようにする。 ・教員が言葉をかけつつ一緒に礼をする。 ・ノックして入室できるようドアを閉じておく。 ・相手の顔を見て箱を受け取ることでできるよう、視線が合ってから渡すようにする。		
・給料をもらう	◆報酬を受ける喜びが感じられるよう、一人ひとり手渡しする【視点 11】 ◆報酬を入れる袋を掲示することで視覚的にわかるようにする。【視点 1、10、11】 ・報酬をもらったときにお礼が言えるよう、「どうぞ」と言葉掛けを行う。 ・顔を見て受け渡しができよう、視線が合ってから渡すようにする。	・報酬をもらったときに礼ができるよう、教員と一緒に礼をする、	・顔を見て受け渡しができるよう、視線が合ってから渡すようにする。	
・振り返り ・自己評価	◆がんばったことや今日行った活動を言ったり、活動の様子をジェスチャーで伝える。【視点 11】 ◆姿勢のマナーを掲示し、言葉掛けを行うことで良い姿勢で聞けるようにする。【視点 3、12】 ◆拡大したワークシートをもとに、記入の仕方の見本を見せる。【視点 7、11】 ・活動中の写真や実際にできた製品を提示したり、実演したりできるように用具を準備する。 ・教員と一緒にワークシートに記入する。	・活動中の写真や実際にできた製品を提示したり、実演したりできるように用具を準備する。 ・教員と一緒にワークシートに記入する。	・詰まったときには発表ができるように補助発音を行う。 ・詰まったときには発表ができるように補助発音を行う。	・本時の注意点を発表すること、活動の振り返りとする。
ま と め				

「〇〇」授業アンケート

資料4

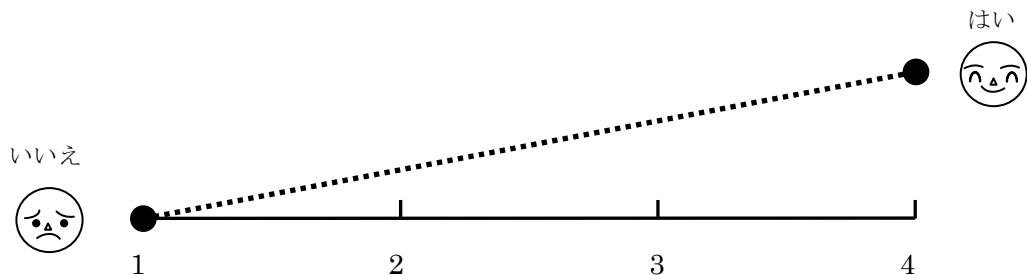
- ◆質問を読んで、自分の気持ちに最もあてはまる番号に○印をつけましょう。
(番号でなくても、数直線 —— 又は点線 …… に○印をつけてもかまいません)。
また、その理由も書きましょう。

1 今日の授業は、おもしろかったですか？



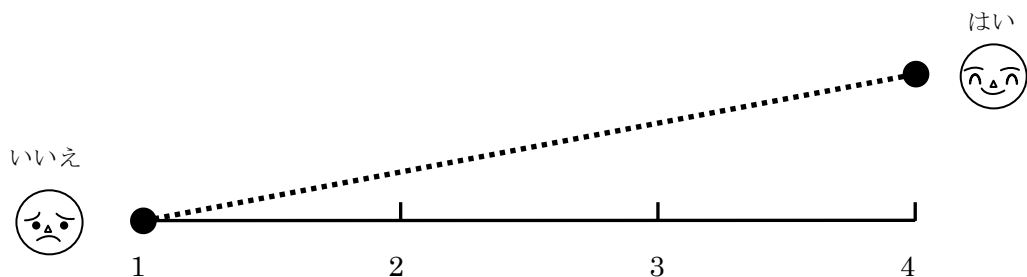
理由を教えてください。

2 先生の話は、分かりやすかったですか？



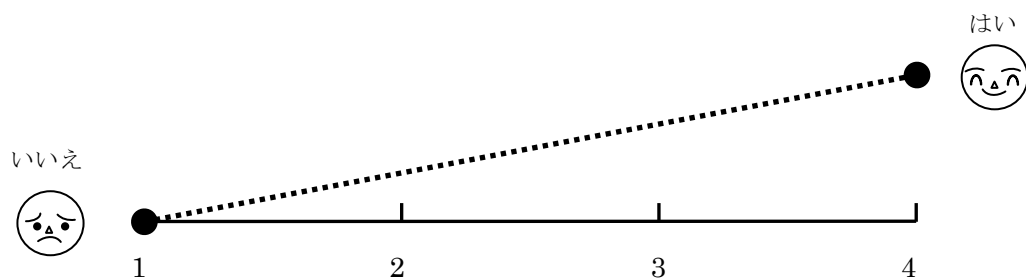
理由を教えてください。

3 今日の授業は、よく分かりましたか？



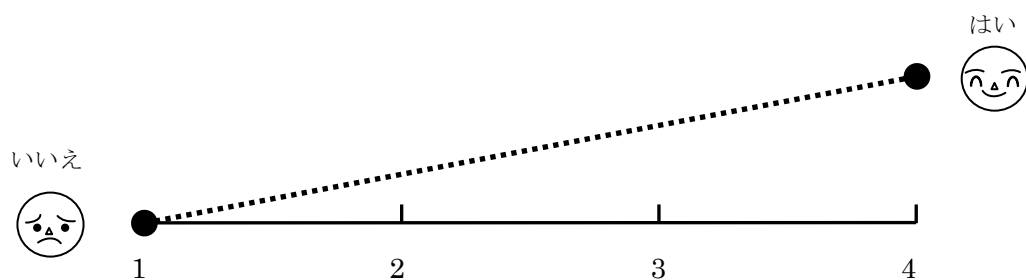
理由を教えてください。

4 ワークシートやヒントカードを活用して、じっくり考えることができましたか？



理由を教えてください。

5 自分から進んでグループで話し合ったり、考えを発表したりできましたか？



理由を教えてください。

6 授業の感想を自由に書きましょう！

これで終わりです

〇〇小学校 〇年「〇〇」 参観者アンケート

このアンケートは、埼玉県立総合教育センターの調査研究「小中高等学校及び特別支援学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践に関する調査研究」の一環として行うものです。

回答いただいた結果は、決してあなた個人を評価するものではありません。授業を参観して感じたまさを御記入ください。

1 あなた自身についてお尋ねします。該当するものに○をつけてください。

(1) 所属

() 校内の教職員 () 学外の教職員 () 本研究の調査協力委員

(2) 教職経験年数 (※臨時採用の期間も含めてお答えください)

() 1 年目 () 2～5 年目 () 6～10 年目

() 11 年から 20 年目 () 21 年以上

2 授業についてお尋ねします。以下の質問にお答えください。

(1) 本授業は、以下の視点を取り入れて実施しました。児童にとっての「分かりやすさ」「活動のしやすさ」に効果があったと感じましたか？ 右の5段階で評定をつけ、その理由をお書きください。

- 5 とても有効
4 少し有効
3 どちらともいえない
2 あまり有効でない
1 全く有効でない

項目	内容・視点	評定	理由
ア	教室環境「刺激への配慮」 ・前方の掲示板に目隠しカーテンを使用し黒板周りがすっきり。		
イ	授業の組み立て ・基本パターンがあり、見通しが持て主体的に活動できる。		
ウ	板書の工夫 ・学習カードの活用、チョークの色分け、授業の展開が分かる工夫。		
エ	参加の促進 ・発表ボードやワークシート・ヒントカードの活用。活躍できる場や活動の設定。		
オ	個人差への配慮 ・個別の補助具の活用（便利カードの利用）。		

(2) 上記の視点を更に効果的にするには、どのような工夫が考えられますか？

(3) その他、授業について感じたことをお書きください。

ご協力ありがとうございました。

引用参考文献一覧

CAST (2011). Universal design for Learning guidelines version 2.0. Wake_feld, MA:

Author.

キャスト (2011) バーンズ亀山静子・金子晴恵(訳) 学びのユニバーサルデザイン・ガイド
ライン ver.2.0. 2011/05/10 翻訳版.

花熊暁 (2011) 学校全体で取り組む授業ユニバーサルデザイン：子ども一人ひとりを大切
にする授業をめざして. 特別支援教育研究,652,7-10.

花熊暁 (2011) 〈小学校〉ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり：通常の学級で
行う特別支援教育. 明治図書.

平山諭 (監修) 河田孝文他 (2008) “特別支援の基本スキル”がなければ学級担任はできな
い!. 明治図書.

廣瀬由美子他 (2009) 通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザイン：国語・算数
授業に特別支援教育の視点を取り入れた「わかる授業づくり」. 東洋館出版社.

廣瀬由美子 (2011) 通常の学級における授業のユニバーサルデザイン：特別支援教育と教
科教育の融合で授業の質を高める. 特別支援教育研究,652,21-24.

飯守真一 (2011) 誉めポイントを伝え合う：互いに認め合い、高め合える学級経営. 特別
支援教育研究,652,18-20.

桂聖 (2011) 国語授業のユニバーサルデザイン：国語授業を「構造化」する. 特別支援教
育研究,652,25-27.

河村茂雄 (2005) 教室で行う特別支援教育 1 ここがポイント学級担任の特別支援教育：個
別支援と一斉指導を一体化する学級経営. 図書文化.

小島道生他 (2008) 発達障害の子がいるクラスの授業・学級経営の工夫：「私はこうした！
こう考える！」子どもの「やる気」と「自信」へつなげるコツ. 明治図書.

久保正明 (2011) 学び方の多様性に応じた通常の学級の集団・授業づくり：学校全体で取
り組むユニバーサルデザイン. 特別支援教育研究,652,11-13.

文部科学省 (2012) 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための
特別支援教育の推進（報告）」

長江清和・細渕富夫 (2005) 小学校における授業のユニバーサルデザインの構想：知的障
害児の発達を促すインクルーシブ教育の実現に向けて. 埼玉大学紀要教育学部（教育学
学） 54(1),155-165.

長江清和・細渕富夫（2005）ユニバーサルデザインの発想を活かした授業づくり（Ⅰ）：知的障害学級と通常学級（小学校 5 年生）との図画工作科の合同授業．埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要,5,169-184.

長江清和・細渕富夫（2006）ユニバーサルデザインの発想を活かした授業づくり（Ⅱ）：知的障害学級と通常学級（小学校 2 年生）との国語科の合同授業．埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要,6,209-223.

ロナルド・メイス他（1997）Version 2.0 NC State University, The Center for Universal Design.

佐藤慎二（2008）今日からできる！40 の提案：通常学級の特別支援．日本文化科学社.

佐藤慎二（2011）“特別”ではない支援教育のために：授業ユニバーサルデザインのこれから．特別支援教育研究,652,28-29.

埼玉県立総合教育センター（2009）特別支援教育の視点を生かした学級経営の在り方に関する調査研究．調査研究報告書,323.

漆澤恭子（2011）通常の学級の授業ユニバーサルデザインについて：授業ユニバーサルデザインを支える学級経営．特別支援教育研究,652,14-17.

高山恵子編（2009）発達障害の子どもとあったかクラスづくり：通常の学級で無理なくできるユニバーサルデザイン．明治図書.

東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟（2010）通常学級での特別支援教育のスタンダード：自己チェックとユニバーサルデザイン環境の作り方．東京書籍.

月森久江編集（2006）教室で行う特別支援教育 4 教室でできる特別支援教育のアイデア＜中学校編＞：授業における LD, ADHD, 高機能自閉症の支援．図書文化.

柘植雅義（2011）通常学級における授業ユニバーサルデザイン：その有効性と限界を巡って．特別支援教育研究,652,4-6.

吉田昌義他（2003）つまずきのある子の学習支援と学級経営：通常の学級における LD・ADHD・高機能自閉症の指導．東洋館出版社.

全日本特別支援教育研究連盟編（2010）通常学級の授業ユニバーサルデザイン：「特別」ではない支援教育のために．日本文化科学社.

研究協力委員等氏名

(職名は平成25年3月末日現在)

【研究協力委員】

(スーパーバイザー)

柘植 雅義 国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員/教育情報部長

(委員長)

鈴木 克俊 滑川町立宮前小学校長

(副委員長)

長江 清和 埼玉大学教育学部附属特別支援学校副校長

(委員)

磯部 聡子 蓮田市立黒浜西小学校教諭

砂辺 美千子 八潮市立大曽根小学校教諭

本田 浩基 三芳町立三芳中学校教諭

道上 恵美子 県立草加南高等学校養護教諭

内迫 博紀 県立蓮田松韻高等学校教諭

折原 裕朋 県立上尾かしの木特別支援学校主幹教諭

久保田 悦子 県立本庄特別支援学校教諭

【授業協力者】

野坂 秀樹 滑川町立宮前小学校教諭

東垣外 洋子 八潮市立大曽根小学校教諭

坪内 俊輔 県立草加南高等学校教諭

小林 昭文 県立越ヶ谷高等学校教諭

加藤 繭子 県立上尾かしの木特別支援学校教諭

金井 昌裕 埼玉大学教育学部附属特別支援学校教諭

今井 あゆり 埼玉大学教育学部附属特別支援学校教諭

中村 啓 県立本庄特別支援学校教諭

當摩 真紀 県立本庄特別支援学校教諭

なお、県立総合教育センターにおいては、次の者が研究に当たった。

松村 敦夫 元県立総合教育センター教育主幹兼主任指導主事

(現 県立三郷特別支援学校長)

高橋 雄一 県立総合教育センター指導主事兼所員

時山 久美子 県立総合教育センター指導主事兼所員

西 聡 県立総合教育センター指導主事兼所員

平成24年度調査研究報告書 第364号

小・中・高等学校及び特別支援学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践に関する調査研究（最終報告）

埼玉県立総合教育センター
特別支援教育担当

